一般財団法人日本アジア振興財団（ＪＡＰＦ）

2017 年夏期インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2017 年 8 月 20 日（日）～8 月 31 日（木）
　　カンボジア 2017 年 9 月 3 日（日）～9 月 10 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：74 名
　　男女割合：男 20 名、女 54 名
　　日本国籍者：72 名　中国国籍者：1 名　フィリピン国籍者：1 名

参加大学：北海道教育大学、茨城大学、金沢大学、宮城大学、都留文科大学、和光大学、慶応義塾大学、早稲田大学、中央大学、上智大学、明治大学、専修大学、国際基督教大学、東京学芸大学、東京国際大学、横浜国立大学、城西大学、埼玉大学、名古屋大学、滋賀大学、滋賀県立大学、京都府立大、同志社大学、京都外国語大学、京都外国語短期大学、京都女子大学、花園大学、立命館大学、関西学院大学、大阪教育大学、摂南大学、関西学院大学、関西外国語大学、甲南大学、神戸市外国語大学、兵庫県立大学、神戸学院大学、岡山大学、高知大学、和歌山大学、徳島文理大学、島根県立大学、北九州市立大学、大分大学、福岡工業大学、九州大学、宮崎大学、鹿児島大学

帰国後の活動：(関西での修了式)
　　日時：9 月 28 日(木)14：00～15：00
　　場所：大阪　在大阪カンボジア王国名誉領事館
　　（関西での事後研修会）
　　日時：10 月 1 日(日)13：00～17：00
　　場所：大阪　難波市民学習センター
　　（関東での修了式及び事後研修会）
　　日時：9 月 30 日(土)18：00～21：00
　　場所：　東京　JICA 地球ひろば
　　（福岡での修了式及び事後研修会）
　　日時：9 月 24 日(日)14：30～17：30
　　場所：　博多 リファレンス駅東ビル

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【二度目のカンボジアで学んだこと】

京都外国語大学 国際教養学科 3 年生

大学の掲示板にひっそりと貼られたポスターを見て、私は二度目のカンボジアへの旅を決意した。頭の中には、自然とともに生きているアンコール遺跡と、にぎやかなシェムリアップの町、人懐こい人々の笑顔、明るいカンボジアのイメージが浮かんでいた。あえてそこにしか向き合わなかったのだ。

キリングフィールド、トゥールスレンという場所があったのは知っていた。以前のインターンシップでもシェムリアップのキリングフィールドへ行き、生き残った人の描いた絵を見たからだ。あまりにもショッキングな作品に打ちひしがれた私は、カンボジアの暗い歴史と向き合うことから逃げてしまっていた。初日から、それらの暗黒時代の象徴のような場所に向かうことに、不安を感じていた。脳裏には依然見た、拷問される人々の絵が浮かんでいた。あまりにたくさんの死があった場所。それ以上でもそれ以下でもない。正直に言うと、怖気づいていた。

しかしそのような気持ちで向き合うには、彼らはあまりにも強かった。記憶にすらとどめておきたくないであろう収容所に、生き残っていた「彼」はいた。これからカンボジアで生きる人、そしてそこを訪れる世界中の人々へ、ここで何が起こっていたのかを伝える活動として、記憶を掘り起こして本を出していた。もう一人は絵をかいていた。シェムリアップのキリングフィールドで、絵を出していた人だった。

アキラーさんもまた、ポルポト政権の中で、強く生き残った人だった。五歳の時に良心を殺された彼は、10 歳の時に子ども兵としてクメールルージュに入隊させられる。小さな子供に、拷問と悲鳴まみれの日々。耐えられるものではなかったと思う。三年後にはベトナム軍につかまり、かつての味方と戦うことになってしまう。生きるために、大人を殺し、地雷を埋める毎日。戦争から解放されたとき、アキラーさんは私たちと同じくらいの年齢だった。それから 20 年以上もの間、彼は「贖罪」をしている。償うために、生きている。

このインターンシップのポスターには「本当の支援ってなんだろう」と書かれていた。物資や資金を送り、物的に支援をすることも、決して彼らのためにならないものではない。しかし、私はカンボジアで出会った人々からたしかに「生きる力」とは何かを学ぶことができた。本当の支援とは、私たちが持っている「生きる力」を、未来を生きる人々に受け継ぎ、同じ目線で生きていくことなのかもしれないと思った。そう遠くない将来、私はまたきっとカンボジアに行くのだろうと確信している。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアインターンシップスタディーツアーで学んだこと】

北九州市立大学 地域創生学群 3 年生

「これだ。」学校の掲示板にふと目がいった。以前から海外のボランティアに興味があり、これまでも何度かチャンスはあったが、自分のイメージしているボランティアとは少し違い、なかなか行けずにいた。ポスターを見るなり、発展途上国の現状を肌で感じてみよう、これが最後のチャンスだと思ったのが参加したきっかけだ。

実際に行ってみて、カンボジアから学ぶべきことや考えさせられることがたくさんあった。一番大きかったのは、「本当の豊かさや幸せとは一体何なのか。」ということだ。「食料も家もあってどこが豊かじゃないの？」農村を視察した後のバスの中で引率者の方が言っていた言葉がとても印象的だった。農村の地域は、街とは一変して、トイレやお風呂も無く、生活で使用する水は井戸水だった。だが、そこには子どもたちの無垢な笑顔、動物の鳴き声、ゆったりとした時間が流れていた。我々にとって当たり前が当たり前ではなくとも、豊かさや幸せは存在しているのだと感じた。目で見るものではなく、心で感じるものではないだろうか。人それぞれ豊かさや幸せの感じ方は異なり、正解はない。また、真の豊かさや幸せとは、お金が全てではないのだ。だから、発展途上国のカンボジアに寄付したり、様々な支援を行ったりするのは良いことだが、それを強制・押しつけてはいけない。先進国の意見を聞いた上で、カンボジアの人々がどう考えるか、そしてどう動くかが重要であり、それがカンボジアの魅力につながり、その国の色が出る。このように、価値観の多様性のもつながってくると考える。我々は、提供する立場であり、ただ単にカンボジアの人々に選択肢を増やしてあげる事が他国の役目ではないだろうか。

次に、深く考えさせられたのは、「格差」だ。ゴミ山を視察した後、自分たちが履いていた靴をバスに乗る前に脱いだ。すると、子どもたちがすぐさま集まって来て、どの靴が良いか選んでいた。と同時に、自分が履いていた靴を男の子がすぐに取って履いている光景を目の当たりにした。私達にとっては「要らない」靴は、カンボジアの子どもたちにとっては「必要」な靴であり、すごく現実を突きつけられた気がした。先進国と発展途上国を比較してもそうだが、カンボジア国内でもまだまだ格差は大きいと感じる。街の親の教育に対する関心の高さと農村で暮らす親の関心の低さ、ゴミを拾って食べて生活している子もいればスーパーで買った物を食べている子もいるように、都市と地方、富裕層と貧困層など様々な格差が生じている中で、先進国の私達は何ができるのだろうか。当事者であるカンボジアの人々は、一日一日生きていくことに必死であり、なおかつ自分の生きている世界しか知らない。だからこそ、上記でも述べたように選択肢を与えつつ、衛生や生活の質を上げていくことも一つの手かもしれない。

この研修を通して、「百聞は一見にしかず」とはこのことだと身を持って感じた。テレビやネットなどの情報だけでは理解することのできないものばかりで、実際に体験するから

こそ多くのことを学べた。途上国の現状を知ることで、自分のおかれている環境がいかに恵まれているか感じたと同時に、日々何不自由なく生活できていることにもっと感謝しなければならないと痛感した。また、価値観を広げることができ、自分自身の成長にもつながった。この７日間で数多くの貴重な経験ができ、本当に参加して良かった。JAPF スタッフのみなさんを始め、引率の方、現地のガイドさんやドライバーさん、そして２０名の参加者のみなさん、本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで失ったもの、得たもの】

和歌山大学 経済学部 3 年生

今回、カンボジアを訪れるのは二回目だった。前回渡航したのは単なる旅行に過ぎなかったので、カンボジアの「明るい部分」だけしか見ることができなかった。よってこのスタディーツアーでの目標は、一般に言われている「発展途上国」の現状と、現地の方たちは何を必要とし、我々はどのような支援をするべきであるのかを知ることであった。結論から言えば、その目標は十二分に達成できたように思う。孤児院や HIV 病棟、ゴミ山などを訪問し、メンバーとのディスカッションを通して、様々な価値観を受け入れることができたからである。アンコールワットをはじめとする観光資源を多く保有し、絶え間なく世界から注目を集めるカンボジアであるが、実情は日本とは大きく違った。

外国からの支援を目的とし、政府の許可なく開かれる孤児院。そして観光業の急速な発展に追いつかないインフラ整備。このように外国資本の流入によって引き起こされた弊害が多く存在していた。今までの先進国による経済的な援助は、途上国を正しい方向へ導いたのか、今後はどういった援助を積極的に行なっていくべきなのか、などということを実際に現場へ赴き、考えることができた。先進国による援助は途上国にとって、お金や物資が手に入る反面、国民の働く気を奪ってしまう。こういった理由から、途上国の「本当の発展」を考えるならば、単なる援助だけに留まらず、発展するためのノウハウを伝えていくことが大事だろうと私は感じた。

また渡航前は途上国に対して「貧困は悲惨なもので、先進国が援助するべきだ」「途上国の国民は不幸に感じているに違いない」などの先入観があった。確かに、カンボジアは日本に比べて生活水準は低いだろう。しかし、そのような環境の中でも「豊かさ」は存在していた。それは特に農村を訪れたときに、強く感じた。インフラをはじめ、食糧や移動手段に乏しいカンボジアの農村ではあるが、そこの住人(子どもたち)には笑顔が溢れていた。そもそも個人にとっての幸福を、国単位では計れないのだということに気付かされた。本当の豊かさとは何か、先進国はどういった支援をしていくべきなのか、などについて固定観念を捨てて考えることができた。

今回、このように充実した研修となったのも、一緒に活動した仲間の存在が大きかった。ディスカッションを通して、物事を多角的に捉えられるようになっただけでなく、他大学の先輩や同級生との何気ない会話などから、自分の将来に対するビジョン形成にも役立てることができた。机上の空論による先入観を捨て、新しい考え方や仲間を増やせたことは大きな収穫であった。

末筆ではございますが、このインターンシップ事業に関して、尽力してくださった JAPF スタッフの皆さんをはじめ、関係者の方々に深く感謝いたします。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【　カンボジアで学んだこと　】

北九州市立大学 外国語学部 3 年生

私のなかでのカンボジアの印象は、発展途上国、貧しい国というものであった。私がこのツアーに参加しようと思った理由も日本とは全く異なった環境で過ごし、今の日本での生活が当たり前ではないということを再確認したいと思ったからだ。今思えば、観光省で言われた発展国の人々は、発展途上国の人々を下に見ているという言葉の通りであると思う。実際私はカンボジアに行くまで、どこかカンボジアの人はかわいそうだという感情を持っていた、それは研修が始まった当初もそうであった。孤児院に行ったとき、日本であったら学校に通うことは当たり前のことなのに、両親が貧しいがために学校に行けないなんてかわいそうだと思った。ＨＩＶ病棟を訪問したとき、日本であったらきちんと設備が整った病室で治療を受けられるのにと思った。私はいつも日本とカンボジアを比べ、もし日本だったらと日本が誰の目からみても豊かな国であるに違いないという固定観念を持ち続けていた。しかし、カンボジアで過ごしカンボジアの人々と接することでこの認識が間違っているのではないかと感じるようになった。シェムリアップの農村を訪れたとき、彼らの家は電気も風呂もなく、食べ物は家の周りで育てている果物や家畜を食べていると言っていた。ゴミ山では、多くの人々が明日の生活のためにお金に換えることのできるゴミを探しており、その中には子どもたちもいた。確かに日本では考えられない生活だが、それは彼らにとって不幸なことなのだろうか。日本と比べ、カンボジアを貧しい国だと決めつけていた今までの自分の考えに疑問を感じるようになった。カンボジアの人々はみな暖かく、いつも笑顔でとても自分たちの生活に不満を感じているようには見えなかった。そのとき私は自分たちの暮らしをほかの国と比べ貧しいなどと考えるのは、日本で生まれ育った自分自身のおごりであると思った。今の生活が貧しいか豊かかは、自分自身が決めるものであって他人が決めるものではない。そして、それはお金やものではかるのではなく心が満たされているかどうかではないかと自分なりに考えるようになった。もし、カンボジアに行っていなかったら日本は先進国、カンボジアは発展途上国という認識だけでどちらが本当に豊かな国だろうなどと考えることはなかったと思う。実際にカンボジアで暮らす人々と接し、生活を目の当たりにすることで教科書や参考書だけでは知ることができなかったことをたくさん学ぶことができた。たった 1 週間という短い時間であったが、自分の中でのカンボジアという国に対する印象は行く前に比べると全く異なるものになった。それが私にとって今回のツアーでの一番の収穫であると思っている。そして同時にたくさんの人々とこのツアーを通して出会うことができた。このツアーで得たものは多く、あのとき申し込んでよかったと心の底から思う。これからもカンボジアで感じたこと考えたことを忘れずに毎日を送っていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアが示したもの】

都留文科大学 文学部 3 年生

研修に参加する際に私は、どの様な思いを抱いていただろうか？ この目で見てみたい、新たな知見を得たいとのほんの些細な好奇心から始まったのかもしれない。

同じアジア圏を成す国であるが、カンボジアと言えば、恐らくアンコール遺跡と発展途上国を想起させるだろう。然し、実際に現地へ行ってみて、その概念は、覆された、いや寧ろ払拭するべきと書いた方が妥当であろう。街中を行き交う車、建設ラッシュの高層ビル群等かつての日本の高度経済成長を彷彿させる光景であった。然し、辺り見渡せば、小さいのに労働に就く子や路上で、今日という日を必死になって生きようと懸命になっている人... 日本に居ては、経験出来なかった事であろう。

一週間の研修を通して学んだ事は、数多くある。その中でも豊かさとは何か、支援とは何かについて述べていきたい。「豊かさ」と、一言で表してもその人の価値観によって大きく変わるが、必ずしも物質的(金銭的)な尺度では、測れない事である。それは、カンボジアの人たちを見て分かった事だ。今の私達の生活は、科学技術の進歩のお陰で、以前と比較すれば便利さを難なく享受しており、恒常化されたシグナルとなっている。然し、その物質的豊かさの負の代償として満足を知らず更に欲求を追及してしまっている。カンボジアは、物質は、限られているものの、勉強を待ち望んでいる子ども達の大きな喜び、水や電気が不自由なく使える喜び、一日が無事に終えられる喜び...
彼らは、心を豊かにして生活を送り、彼ら自身が満足だと思える事を具体化し、そして実践する所に真の豊かさを享受しているのであり、彼らの見せる笑顔には、その心の豊かさが反映されているのではなかろうか？

一方で日本は、どうだろうか？便利さ故に喪いつつある大切なものを再発見したりした。我々現代の生活や精神の在り方は、カンボジアからすると異常なのかもしれない。当たり前は、恐ろしい事象だと気づいた。この点に於いては、カンボジアの方が上だと言える。

また、豊かさというのは、他人に対して、無理強いをしてはならないし、自分の価値観で抑えては、ならないのである。発展途上国という文言も先進国によって設けられた基準なのかもしれない。

だが、必要最低限の豊かさは、必要であり、人類共通の権利である。その為にも国が念頭に入れながら真摯に向き合わなければならない。

次に支援についてである。都市部では、経済成長が顕著であった。背景に多国籍企業による貢献が大きいが、それは一部の富裕層を潤すのみで、貧富や格差の拡大を助長させているのであり、貧困層の社会的不満を強める事になりかねず、支援の遂行に支障が生じるばかりか相互の関係にも影響を及ぼすのであれば本末転倒ではないか？ 支援というのは、彼等の生活を改善する為のサービスの提供ー いや当然の定義かもしれないが果たしてどこま

で理解しているのだろうか、ただ現状として与えるだけで良しとし、金銭の問題ではないのある。本当にその支援が必要とされているものなのかを再度見直す必要がある。
カンボジアではカンボジアなりの環境面や文化面を軸に発展しており、彼らが希求するものを考えなしに独断で決め付け、そして、押し付けては、ならないのである。我々(先進国)の支援が経済面と豊かさが結節させる方程式に介在する盲点だと感慨を覚えた。

日本も戦後直後は、発展途上国と同じ状況で、他国からの支援を受けながら日本なりの努力を重ね、発展してきた来歴がある史実を存知だろうか？その時の事を良く思い出して欲しいものである。

研修の中での話を拝聴しながら教育の是正が焦眉の課題であると、強く感じた。国民がそのサービスを受けられない、または、途中で断念してしまっている状況があるからである。それは、高等教育へ上がるにつれて、就学率の低下が顕著である。

もし、国を豊かにしようとする目標の下、支援を実践するのであれば、教育関連のものに対して優先的に資金を投資するべきではなかろうか？何故なら国民も国家を支える貴重な資源だからである。

この一週間の研修を通して今までの知識が紙面上のものに過ぎなかった事に終始気付かせられ、 その現実との乖離に驚きの連続であった。また、正解の無い問いに参加した他のメンバーと討論する中で、物事に対する客観的･多角的な視点や本質を探る姿勢で構える必要性を痛感し、良い刺激となった。これ程までに自分を外部の環境に投資し、知見を得るのは、座学とはまた異にするものであり、ツアーを含めて本当に貴重な機会であった。ここで得た経験は、今すぐとは言わずとも近い将来きっと活かせる場面に遭遇するだろう。そして、客観的な観点で物事を見る姿勢を忘れずにまたカンボジアをこの目で見てみたいものである。

最後に JAPF のスタッフ、引率者、ガイドさんをはじめ、このツアーの中で出会った全ての方々に感謝の辞を述べたい、ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで感じたこと】

同志社大学 経済学部 1 年生

初めて訪れたカンボジア。初めて訪れた発展途上国。勿論、人の肌の色も、町の風景も全く違う。当り前と思っていた日常も異国の地では違うことだらけで、驚きや戸惑いを隠せなかった。と同時に、カンボジアの素晴らしさを発見したこと、仲間と味わった様々な貴重な経験は、今年大学生になった私にとって一生忘れられない財産となった。

私のカンボジアのイメージは一言で言うと、「貧しい国＝幸せではない」だった。何不自由なく、豊かな日本で生まれ育ってきた私にとって、TV やニュースで見てきたカンボジアは悲惨な国だと、行ってもないのに心のどこかで決めつけてしまっていた。しかし、現実は私が勝手に想像していたものと違っていた。発展は少しずつだが進んでいて、建設中の高層ビルも多く建っていた。また何となくだが、怖い人が多いのかなと思っていたのとは裏腹に、優しい心を持ち明るく接してくれるカンボジア人ばかりであった。孤児院の子供たちや日本語学校の学生たちも皆素敵な笑顔をしていて、向上心もおおせいで、目の前にあること、目の前にある一日を楽しんでいた。それを見ると、幸せではない人が多いだろうなと勝手に決めつけていた自分を情けなかったと思った。

だがやはり、カンボジアで過ごしてみて経済格差は物凄く感じた。日本との経済格差だけでなく、カンボジア内での経済格差もだ。ゴミ山見学に行った際、私はあまりにも酷い臭いに耐えられず早々でギブアップをしてしまい、バスの中で皆の帰りを待っていた。そのとき窓から見えた、ゴミ山に住んでいるであろう家族を見た。誰も靴を履いておらず、赤ん坊を抱いているお母さんの肌着は破れたまま、今にも壊れそうな自転車に乗っている少年もいた。私は言葉も出なかった。ただただそれを見ていることでしかできなかった。本当に何とも言えないあの臭いの、ゴミ山の中で暮らしているということが、現実にあるのだと受け止めることが出来なかった。高級外車に乗って豊かに暮らすカンボジアの人も居たのに、どうしてこの人たちはこんな生活を送らないといけないのだろうかと。ゴミ山見学から帰ってきた友人から聞いた話だと、政府はここに住む人たちの事は考えていないそうだ。高層ビルを建てることよりも、まずはゴミ山に住んでいるこの家族を助けて欲しいと思った。そう願うだけで、私には何も出来ないことが悔しくてたまらなかった。

また孤児院に行った時も私はある事に凄く衝撃を受けた。私はとても笑顔の素敵な優しい女の子とずっと遊んでいた。見た目からして 5 歳くらいかな？と思いながら折り紙をしたり、ブランコにのったり楽しい時間を過ごしていた。たまたま通訳さんと 3 人で折り紙をすることになり、いくつかの質問を訳して貰った。すると私が 5 歳と思っていた子の歳は 11 歳で今年 12 歳になるということを知った。衝撃だった。日本人の 11 歳とは全く姿が違った。きっとこれが経済格差から生まれる成長の遅れなのだろう。いつか日本に行ってみたいと言ってくれた女の子だが、もし日本に来たら何を感じるのだろう。私たちの生活を羨ま

しく思うのだろうか。そして自分の国を惨めに思うのだろうか。そんなことばかり考えてしまった。人の幸せは人それぞれなのに、私は孤児院と農村に住む子供たちを一瞬可哀想だと思ってしまった。

日本はカンボジアへ色々な支援をしているという話を、色々な所で聞いたが本当の支援て何なのだろう。自分にも分からない。世界が掲げる平等て何だろう。大学 1 回生の私にとってカンボジアで学んだこと、感じたことの内容はあまりにも密度が濃かった。良いところを知れた反面、悲しい現実も目の当たりにした。辛かったこともあったが、仲間と充実した貴重な 8 日間を過ごすことが出来た。今回のツアーに参加して良かったと心から思った。見て、聞いて、感じて学んだことは決して忘れない。必ずこれからの勉強、生活に活かしていきたい。そして今在る幸せに感謝して、一日一日を大切に生きていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアに行ってみて】

専修大学 経済学部 1 年生

このツアーに参加しようと思ったのは、学校の授業であった。私の通っている学校にはスタディーツアーに参加する体制が整っている。授業で海外特別研修という授業があり、興味のある国のスタディーツアーに参加することができる。この学校の制度を利用してカンボジアにいこうと思った。このスタディーツアーに参加して、物事を考える価値観が変わった。人の価値観には多様性があるという事を、現地にいき肌で直接感じることができた。日本ではお金があれば幸せになることができる。しかしお金で買えるような幸せは本当の幸せではないのだと思った。カンボジアで印象に残ったのは、お金がなくてもみな幸せそうに生きていることである。お金はあることに越したことはないが、なくても人は幸せになれるのだ。

日本とカンボジアでは大きく価値観が違っており、幸せの感覚も違うのだ。日本人に限らず、先進国の人は発展途上国の生活は幸せだとは思わないだろう。それは先進国の豊かな環境になれてしまっているからだと私は思う。仮に最初から発展途上国に生まれ育っていればその環境が当たり前となり、特に不自由さなどは感じないだろう。その価値観の違いをとても感じ取れたのがゴミ山で働く人たちを見たときである。彼らはものすごい臭いのするゴミ山で働いており、生命力がすごく感じ取れた。主に彼らの仕事内容として、1 日中ゴミ山で働き、日給換算すると 300 円ほどだといっていた。日本ではあり得ないことだと思った。日本の肉体労働よりも辛いしごとをしても最低賃金よりも安いということはすごいことである。またカンボジアは約 30 年前には激しい内戦があり、理不尽に罪のない人たちが無惨にも虐殺されていった。キリングフィールドは重々しい雰囲気でどこか日常では味わうことのないものであった。そこでは収容所から運ばれてきたひとが何万人も殺されていった。地面には雨が降ると、人の骨や衣服の破片が出てくるのだ。それには驚いた。虐殺は国の発展を妨げるものだと実感した。カンボジアにいき人の暖かさや多様性を学ぶことができた。私の人生の中でも一番と言っていいほど貴重な体験をした。カンボジアで学んだことを今後の人生にいかしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私たちができたこと】

同志社大学 政策学部 3 年生

最初に孤児院を訪れた際たくさんのこどもたちが全く警戒することなく遊ぼうと駆け寄ってきてくれる姿に驚いた。単純に嬉しかった。しかし皆が遊んでいる中でその輪に入らずずっと料理を手伝っている子がいた。最初は特に気にも留めていなかったのだがその子は淡々と料理をすすめ、終わった後も遊ぶことなくベンチに座り、もう一人の同年代の女の子と二人で黙々と片づけをしていた。私は手伝おうと思ったがどう近寄っていけばいいのかわからなかった。英語が話せる人とであればつたなくてもなんとかくみ取ってくれて伝わることがほとんどであろうが彼女たちとは不可能だ。そこで初めて言葉の壁を感じた。何をすればいい？と聞きたいがもちろん現地語はわからないしガイドさんも近くにいなかった。ジェスチャーで伝えようにもそのジェスチャーさえ思い浮かばなかった。数分もやもやと考えたが思い浮かばずもう任せればいいかなという考えもよぎったりした。しかしどうしても気になりせっかくカンボジアに来たのだからと(大げさだが)自分を奮い立たせ、とりあえず寄ってみた。隣に座って見よう見まねで彼女の真似をした。彼女は淡々と作業をしていたがすぐに気づいてブラシを持ってきて、洗い方を見せてくれた。そして孤児院に来てから初めて彼女は笑顔を見せてくれた。その笑顔はいまだに忘れられない。そこからは何を心配していたのだろうと思うほど本当に楽しい時間を過ごした。水にぬれて笑ったり、虫に驚いていやな顔をしたり、彼女とはほとんど全く会話をしていないのに仲良くなれたことを十分に実感した。笑顔があれば仲良くなるのに言葉など大した問題ではないということを知り、とても嬉しくなった。

プノンペンで出会ったカンボジアの人々は子供大人関係なくみんな気さくで明るく優しい人ばかりで、私のカンボジア人に対しての不安はほぼなくなっていた。しかしゴミ山を訪れた際にはそうはならなかった。ゴミ山で生計を立てている人々はいわば低所得の人たちであってさっきまでの人とはまたちがうのではないかと思ってしまった。行きの道ではなるべく目を合わせないように関わらないようにして歩いた。しかしゴミ山では笑っている人たちがたくさんいて、想像していたほどの陰気な雰囲気は感じなかった。帰り道同じ場所にいた子供たちに手を振ってみた。するととびきりの笑顔で返してくれ、それを見たお母さんも笑ってくれた。アンコールワットでも似たよう経験をした。写真などを売りにくる子供たちに対して私は警戒心しか抱いていなかった。しかしその中の 1 人と話しているうちにアンコールワットの構造や写真のベストポジションを教えてくれ、最後には冗談も言い合う仲になった。私は彼らと出会って自分がとても恥ずかしくなった。と同時にどんな環境の人も根本的には変わらないのだということがとても嬉しかった。笑顔を笑顔で返してくれるというただそれだけのことがこんなにも嬉しいとは思ってもみなかった。

私はこのツアーに参加することを直前まで迷っていた。孤児院、学校、病院、農村など一

度訪れたからといってその人たちのために何になるのだろうか。自分たちの自己満足にしかならないだろうと思っていた。それでもやはり海外に行ってみたくて参加を決めたのだが最初は上記の思いから後ろめたさがあった。しかしツアー参加後この考えは少し変わった。たしかに１度訪れただけで人々の生活が変わるなどありえないし、変えてあげようなどとてもおこがましいことだと思う。しかしツアー中たしかに人々は私たちとの交流を楽しんでくれているように見えた。その証拠に私は人々になにかをねだられるようなことは一度もなかった。損得勘定なしに純粋に交流を楽しんでくれている姿が本当に嬉しかった。そしてその交流は互いの心に強く影響しあうものだと思う。新たな発見があるとそれがまた新たな考えを生み出す。それを繰り返して人は成長し、心を豊かにしていく。心の成長を手助けするという点で私たちが今回行ったことは意味があったのではないかと思う。このような形の支援もあって良いのではないか。私自身ここでは書ききれないほどの新たな発見や驚きがあり、そのたびに深く考え、より心豊かになった。カンボジアの人々の心も私と同じように少なからずより豊かになっていてくれたらと思う。

このツアーに参加して、数々の小さな勇気をだして本当によかったと思っています。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【一歩前へ踏み出してみえた世界と学び】

摂南大学 経済学部 3 年生

カンボジアには前から行きたかった。きっかけは、高 3 の時にレンタルショップで借りて観た、『僕たちは世界を変えることができない』という映画だ。メディアに影響されやすい私は、この映画を観て、「大学に入ったら貧しい国へ行って何かしよう！」と素直に考えた。しかし、大学に入るとその意識は一変し、バイトと大学通いを繰り返すだけの平凡な毎日となった。「何かにチャレンジしたい」という意欲がありつつも、いざ 1 人でそこに飛び込む勇気がなかった。3 年になると、あちこちで就活の話が飛び交うようになった。耳が痛かった。周りに流されたくなかった私は、夏季休暇を利用して留学に行く決意を固めた。高 3 で観た映画の影響と、大学で経済の勉強をしていくうちに、東南アジアに行きたいと考えるようになった。大学の説明会にも参加し、インドネシアの短期留学プログラムに応募した。やっと一歩踏み出せる…。そんな思いで胸はいっぱいだった。だが、そんなにうまくはいかなかった。インドネシア留学へ応募した学生は、自分たった 1 人。実施人数に満たないため、他をあたるように言われた。やっぱりそういう運命なのか…と絶望した。半ば諦めムードなとき、授業の移動で偶然 JAPF のポスターを見つけた。奇跡だと思った。正直、ポスターの詳細を全く読んでいない。読んだのは、『ベトナム・カンボジアインターンシップツアー』というタイトルと応募方法だけだ。急いで写真を撮り、インターネットで調べ、説明会にも参加した。自分のやりたいことのすべてがこのツアーにはあった。次こそはチャンスを逃さまいと、すぐに応募した。そして私は、チャンスを掴んだ。

カンボジアは、本当にいい国だ。自然、遺産、文化、食べ物、そして人。すべてに感謝している。帰国後も、カンボジアで観たすべてが頭から離れない。特に離れないのが、子どもたちの笑顔だ。カメラを向けると満面の笑みでピースしてくれる。互いに言語は通じ合わないのに、遊ぶと楽しそうにしてくれる。ご飯を食べる前に、歌を歌ってくれる。どのシーンを切り取っても、言葉で表すには多すぎて足らないほど、鮮明な記憶として蘇る。貧富の差が大きく、子どもたちは決して豊かではないかもしれない。しかし、私たちの考える豊かさとカンボジア人の豊かさは違う。彼らは、決して環境を言い訳にせず、強くたくましく生きている。生きるために必死なのだ。TAYAMA 日本語学校では、日本人以上に丁寧なお辞儀、元気ではっきりしたあいさつに圧倒された。生徒たちの話を聞いて、学ぶ意欲にも驚かされた。大学でただ呆然と勉強している自分が情けなくなった。カンボジアで現地の学生から学びの大切さを教えてもらった。私たち日本人はどうしても環境を言い訳にすることが多い。「いい大学じゃない」「田舎だから」は関係ない。視野を広く持って何をするかが重要だ。私たちにできることはたくさんある。あとは一歩踏み出す勇気だけ。今はわかってくれる仲間もできた。何も怖くない。カンボジアに負けないよう前に進むだけだ。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私が肌で感じたカンボジア】

大阪教育大学 教育学部 2 年生

私の大学生活は、思っていたよりずっと面白みのないものであった。しかしこれは、周りの人のせいでも授業内容のせいでもなく、一歩踏み出す勇気を持とうとしない自分自身が原因であったと気付いたのは、このツアーが終わる頃であった。ある日、大学構内に貼られていたポスターを偶然見つけた。カンボジアに興味があったわけでもなかったのに、その日のうちに参加することを決めた。動機はよくわからないが、とにかく自分にとって何も楽しくない毎日をどうにかして変えたかった。

カンボジアでは、たくさんのことを学んだ。なかでも私が非常に考えさせられるものになったのは、カンボジアの教育問題だ。大学で教育を学んでいる身として、孤児院や日本語学校、農村の中学校で学んだことは、大学の講義では学べないことだらけだった。私にとって、子どもが学校に行き教育を受けることは必要不可欠だと思っていた。多少なりとも勉強は出来た方が、将来生きていくのに困らないと思っていた。だがカンボジアで生の声を聞いてみると、教育を取り巻く様々な環境がうかがえた。孤児院の子どもたちは親がいない・親と離ればなれという背景を感じさせないくらい笑顔で元気いっぱいだった。大学で保育の授業を受けたことがあり、子どものことはとても好きだった。校長先生の話を聞いて、「逃げ出すかもしれないから子どもを叱ることはしない。」ということに驚かされた。こんなに無邪気で、日本の子どもたちと何ら変わらない表情を私たちに向けてくれた子どもたちだが、孤児院に来る前は路上でものを盗っていたこともあるという事実。本当に想像しがたいことばかりだった。だがきっとこれから、この場所で子どもたちは健やかに育ち、勉強をし、何か職に就いてくれるであろうと確信した。それは、大人が子どもたちをサポートする体制があったからだ。ボランティアの大人や料理担当の大人、銀行からお米を持ってきてくれる大人…、彼らのもとで、平和に育っていってほしいと願った。そして、まだまだ人数が足りないというサポート体制がより強化されるよう願った。

次に訪れたのは日本語学校。熱心に日本語を学び、私たちを温かく迎えてくれた生徒たち。ある生徒は、日本語を学んで日本で新聞の仕事をしたいと話してくれた。新聞記者かと思ったが、本当は新聞配達の仕事だった。私は、新聞配達のためにわざわざ日本へ…と驚いてしまった。彼らが必死で日本語を学んでいるのは生きるためだとわかった。いつもなんとなく授業を受けている自分の姿が脳裏をよぎって、少しばかり恥ずかしい気持ちになった。彼らの姿勢は見習わなければならない。

最後はシェムリアップの農村にある中学校。日本が建設に携わったということで、知らないところでこんなにも日本人はカンボジアへの支援を行っているのだとわかった。まだまだ学校に通える子どもは少ないが、「学校が楽しい」と思えることが何より大切で素晴らしいことだと思った。事前に考えていなかったことも自然に質問できた。大学での教育の勉強

を、この場でもっと広げたいと思えた瞬間だったと思う。

振り返ってみると、私がこんなにも貴重な経験が出来たのは、私がツアーに参加する決断をしたからだった。大学生活が全く楽しくないと嘆いていたあの頃は、何もアクションを起こさなかった。私がこのツアーに参加した理由は、「発展途上国の現状を知るため」でも「就職活動のため」でもなく、「人生を変えるきっかけにするため」だった。1 人で参加すること自体が、自分にとって大きな第一歩だった。カンボジアのことをたくさん学んだ 1 週間だったが、もっと長い期間色んな場所に行ってカンボジアの人と関わってみたいと思ったし、何より他のメンバーと沢山交流を深めることができて別れがとても寂しくなるほどだった。ただの楽しい旅行ではなく、カンボジアが抱える様々な事情について交換日記やディスカッションを通して意見を交わし合ったことが、こんなにも仲を深めてくれたのだと思う。たったの 1 週間だったが、私は間違いなく成長できた。もっと色んなことに挑戦してみたい。もっと沢山の人と話してみたい。自分に自信を持って、勉強を続けたい。自分の価値観だけにとらわれず、様々な意見を吸収したい。そう思うようになった。初めて自分の行動を称えてやりたいと思った。私は 10 代最後の夏を、一生忘れられない思い出でいっぱいにすることができた。そんなきっかけを作ってくれた JAPF のスタッフの方々に、改めて感謝したいです。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの国柄と現地人の笑顔に触れて】

早稲田大学 文化構想学部 1 年生

私が今回のカンボジアツアーに参加したきっかけは、大学に貼られていたポスターだった。今年のゴールデンウィークに大学の授業プログラムでベトナムを訪れ、実際に現地に行って肌でその国を経験すること・感じることの大切さ、発展途上国の実情を学び、夏季の長期休暇にも同じく東南アジアの発展途上国を訪れてみたいと思っている矢先、JAPF のポスターを発見しすぐに参加を決めた。

このツアーを終えた今、振り返って見ると思い出すのはカンボジアの人々の笑顔ばかりだ。カンボジア人は笑顔が多いということが、このツアーでの一番の発見といってもいいだろう。

JAPF のプログラムは、教育・医療・文化・歴史などを網羅していて、個人の旅行では行けないような研修先が豊富に含まれていた。ほとんどの研修先で現地の人から直接お話しを伺うことができたし、質疑応答の時間も設けられていたので、私が疑問に思ったことや現地の人がどう思っているかなどを納得がいくまで聞くことができた。直接人と触れ合う中で、言葉の通じない孤児院の子供達や、ゴミ山で働くスカベンジャーの方、トゥールスレン強制収容所からの奇跡の生還者の方、ナイトマーケットの売り子、バスの中からたまたま目があった道を歩いている人に至るまで、ほぼ全員が笑顔で接してくれた。約 30 年前のポル・ポト政権による大虐殺という悲しい歴史があったとは思えない、人の心の温かさに触れた気がした。

私は幼い頃から東南アジアに興味があり、大学に入学してから特に発展途上国について考えていることがある。それは、発展途上国と言われている国は、皆一様に既存の先進国にならなければいけないのか、ということである。発展途上国は、欧米諸国の先進国に追いつこうと無理な工業化を推し進め、皆同じような道を通ることによって発展しようとしている。だが、人には唯一無二の個性があり多様な考え方が存在するように、国際関係においても国独自の発展方法があって良いと思うのだ。例えば農業が盛んな国では、大きな工場や高いビルを闇雲に建設するのではなく、国土にあった作物を作ることで農業国として発展することも可能であると考える。その国がカンボジアでなければならないと押し付ける訳ではないが、道路を整備することや衛生環境を整えること、貧富の差を無くすことなど、人々の生活に根ざした福祉政策は、無理のある工業化よりも優先されるべきだ。それぞれの国の政府は、どうやったら国が豊かになるかを考えることを第一とすべきだ。では、カンボジアにとって一番良い発展方法とはどのようなものなのだろうか？

そういった思考を巡らせてこのツアーに参加し、研修先ごとに、グループメンバーと深いトピック、特に最後のディスカッションテーマである「豊かさとは」について語り合っているうちに、私の考え方は間違っていることに気がついた。私はカンボジアで、カンボジアに

あった、工業化などの先進国を真似た発展方法とは違う、全く新しい発展方法の突破口を見つけ出せないかと考えていたが、たとえその新しい発展方法が思いついたとしても、その方法は日本人が勝手な価値観でカンボジアに押し付けていることになるのであって、工業化を推し進める欧米諸国と同じなのだ。

カンボジアに最もふさわしい発展方法は、実際住んで生活を営むカンボジア人自身が一番よくわかっているのであって、カンボジア人にはその発展方法を見つけだす能力も自国を復興・発展させる能力も十分に備わっている。負の遺産を後世に残そうとする強制収容所からの生還者も、農村に教育を普及させようとしているバヨン中学校の設立者も、地雷を自ら撤去し今もなお被害を食い止めようとしているアキラー氏も、皆カンボジア人である。カンボジアを今よりもより良くしようと奮起している人はもちろん多くがカンボジア人だ。今は経済的な問題でたくさんの外国から支援を受けているが、カンボジアを発展させるために必要な人材が不足している訳ではないと考える。むしろ、金銭的援助をしているために直接的でなくても結果的に政治や政策に介入したり、後先のことを考えない中途半端な支援のせいで発展を妨げたり新たな問題が発生してしまうことだってある。カンボジアが貧しい国だと決めつけている日本人を含めた外国人が、現地の人の生活も考えずに良かれと思って簡単な支援ばかりしてしまうことは、むしろ新たな問題を引き起こしかねない。実際、孤児院に送られる豊富な支援を求め、孤児ではない子供を連れてくるという貧困ビジネスなるものも発生している。私たち外国人から見て問題だと思っていることは、実はカンボジア人にとっては大きな問題ではないこともあるということと、支援が過度になされているという実情も現地に足を踏み入れてこそわかったことだ。

今回のカンボジアツアーで、相手のためだと思って私が考えたことは、当たり前であるが必ずしも相手のためになるとは限らないこと、国によって常識が全く違うということがよく理解できた。私の中の、日本という国のものさしではかると、カンボジアは確かに貧しい国かもしれないが、人々が笑顔で幸せに暮らしていてそれでよしとするならば、とやかくいう権利は私たちにないと思う。それが私の考える「豊かさ」であり、それを決めるべきはそれぞれの意思に委ねられると思う。

今までの私の常識と考え方を変えてくれたこのツアーと、たくさん深い話についてディスカッションしてくれたグループメンバーに感謝しかない。ここまで深い学びができたのは、間違いなくメンバーに恵まれたから。このご縁を忘れず、私には世界のために何ができるのか、本当の支援とは何かを考えていきたいと思う。最後に引率の田野田さんを始めとする JAPF のスタッフさんに深く感謝したい。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修を終えて】

京都女子大学 文学部 2 年生

私は以前から開発途上国に関心があり、魅力に感じていた。だから大学で JAPF のポスターを見た時参加を即決した。カンボジアでは沢山の出会いや触れ合いがあり、このツアーを通してカンボジアを好きになったと同時に沢山のことを学んだ。

KURATA ペッパーでの倉田さんの「日本人である事の奢り」についてのお話を伺い色々と考えさせられるものがあった。私はカンボジアについて根本的知識が浅いにも関わらず、カンボジアは途上国だから豊かではない、苦しんでいる、日本が何とかしてあげなければ・・・等といった上からの考えを持っていた。しかしこの考えは間違っている事に気がついた。確かにカンボジアは開発途上国として位置付けられているが、お金が無くても限られた資源を有効的に使い、伝統的な手段でモノを作り国を成り立たせている。実際に、ポルポト政権が崩壊してからおよそ２０年と間もない中成長率は７％とアジア屈指の数字を誇る。つまり、私が持っていた考えはただの価値観の押し付けに過ぎなく、偏見を持っていたのだ。それでも、ごみ山や孤児院、農村の訪問を通して海外の支援の重要さや、経済・地域格差など課題は山積みであることを目の当たりにした。国家レベルの支援、又は個人レベルでのボランティアであっても、援助する側は「してあげる」のではなく、同じ地球上に暮らす一員として、本当に有益な支援なのかを考えた上で、カンボジアのもつ伝統を活かし、最後まで責任を持って支援を続ける事が大切なのかなと考えた。日本は歴史的背景から、カンボジアと文化・経済的面での親交が深い。そのような背景があるからこそ真の国際協力が成立するのではと思う。

カンボジアでおよそ一週間生活していて、「本当の豊かさや幸せって何だろう」と日々考えさせられていた。環境の違いはあるにしろ、毎日せかせかと時間や課題に追われ慌しく過ごしている日本人の生活とは異なり、現地はゆったりした時間が流れているように思え、私は非常に居心地がよく感じていた。また農村や都市部のマーケットや売店での人々の楽しそうな交流、友達や家族と仲良く遊んでいる子供たち、よそ者である私たちに笑顔で振舞ってくれる光景を見ると、豊かさは必ずしも物質的な豊かさだけとは限らないと体感した。物質的には豊かであると言えなくても彼らの笑顔や生活を垣間見ると、彼らは幸せそうにみえた。教育制度済が整っていなくても学びに貪欲な子供たち、自己をしっかり持ち、多様な価値観を受け入れているカンボジア人の姿勢は、先進国である日本が見習うべき姿なのかなと、この豊かさや幸せについて考える上で思った。

カンボジアでの研修は短い期間であったが、本当に充実しておりあっという間だった。このツアーで見て考え学んだ事は、この先忘れることは無いであろう、非常に貴重な経験となった。そしてこの経験をこれで終わらせるのではなく、得た知識をアウトプットし、これからも何らかの形でカンボジア、そして途上国に関わっていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアスタディーツアーを終えて】

立命館大学 文学部 2 年生

カンボジアスタディーツアーでは多くのことを知り、学ぶことができた。もちろんカンボジアの歴史について、課題について知ることもできた。そして、カンボジアの人々は私が今回知った国の歴史や課題を知らないということは衝撃であった。本当の豊かさとは何か、本当に必要な支援は何なのか、ということも考えた。しかし、それらの問題を理解し、答えをだすのは難しかった。一週間では足りなく、もっとカンボジアのことを知りたくなった。

私にとって、カンボジアでは人との出会いが大きな収穫となった。そして様々な生き方があることを知った。カンボジアで胡椒をつくっているクラタペッパーの倉田さん、地雷除去活動などを行っているアキ・ラー地雷博物館のアキ・ラーさん、クメール・ルージュから生還されたＣＨＵＭ　ＭＥＹさん、日本語学校の日本人教師の方、中学校で話してくださったＪＳＴの方。理由と目的をもって生きているようにみえた。自分はこれでいいのか。なんとなく大学にはいり、これから就職活動をし、内定をもらった企業に就職する。そんな未来だろうと思っていた。しかし、カンボジアで出会った方々、特に日本人の方を見て、自分の選択次第で予想もしない未来があることに気づかされた。このままなんとなくの人生にはしたくないと思ったし、可能性になんだかわくわくもした。同時に、選択することができない人、選択肢すら知らない人がいることを知った。だからといって日本に生まれた私は幸せだ、とは思わない。けれど、せっかく様々な選択肢を知ることができて、選ぶこともできる環境にいるのだからそのチャンスを十分に生かしたい。もっと視野を広くもち、自分で選択して生きていきたいと思った。出会ったのはカンボジアに住む人々だけではない。一週間をともにしたグループ２のみんなだ。同じ体験をしながらも考えることが違い、ディスカッションは刺激的であった。全国から集まった、同世代の人と関わるなかで自分を客観視し、自分自身についても知ることができたと思う。

本当に濃密で貴重な経験ができたカンボジアスタディーツアーであった。もう日本に帰りいつのまにか一週間以上たった。帰ってきてから私は何をしただろうか。カンボジアでの経験を活かすことができているのか、行動に移せているのか。どちらもできていない。ただ知るだけではいけない。あの一週間で終わらせてはいけない。カンボジアでの経験について考え出すと今でもおもいがまとまらない。カンボジアで思ったことを考え続けて自分の意見・価値観をしっかり築いていきたい。そして、そのうえで選択をして生きていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアに行って】

岡山大学 医学部　3 年生

私がこのインターンシップ型スタディツアーに参加したのは大学に掲示してあるポスターを見たという理由からだった。もともとカンボジアに行きたかったというより、とにかく海外に行ってみたいという思いからだった。そのため、カンボジアといえばとにかくアンコールワットという印象で、今思い返すと、以前の私はカンボジアという国に関して本当に無知だったと思う。

まず、カンボジアに行って最初に行った KURATA PEPPER。その創立者である倉田さんの話の中での、「環境が合わないと思ったら変えればいい。だから私はカンボジアで開業した。」という言葉。この言葉は私にとって本当に印象的だった。私は、日本社会の一定の型にあてはならない人を軽蔑する社会性に嫌気がさすことがよくある。その私に、倉田さんの言葉は背中を押してくれた。みんなと同じでなくていい。大学を卒業して、就職して、結婚して…。そんな人生じゃなくても、自分のやりたいことをやりたいと思ったその時にやればいい。私はそんな風に自分の考えを少し変えることができた。

また印象的だった、TAYAMA 日本語学校。教室に入ると生徒たちが拍手喝采で迎えてくれて、大きな歓声を浴びた。そのような経験は初めてだったので、とても嬉しかった。さらに、私たちの発表したプレゼン内容に対して、積極的に質問してくれる様子や、そのリアクションに日本とは異なる人種性を感じ、非常に面白かった。それに加え、とにかく TAYAMA 日本語学校の学生はとても日本語が上手だった。話を聞くと、まだ日本語を勉強し始めて 3 年目だそうで、もう１０年以上英語を勉強している私を比べると、本当にすごいと感じたし、私ももっと頑張ろうと思った。

また、カンボジア 4 日後に行ったカンボジアの中学校。ここでその中学校の設立に携わった人の話を聞いた。その男性は、ポルポト政権時代を生きた男性で、今までの彼の人生についての話を聞いた。男性は父、兄２人を拷問の果てに殺され、自分は１２歳のとき命がけで日本に渡日し、家族と離れ、日本でのいじめに耐えながら、１０年以上異国の地で過ごしたという男性だった。男性は実際の経験者だったので、一つ一つの言葉が私の心に深く突き刺さった。ポルポトが及ぼした人々への傷や苦しみは一生償えないものだと感じると同時に、私はカンボジアという国について本当に何も知らなかったんだと心底思い知らされた。また、その方が連れて行ってくださった農村。私は今までにも何度か電気、ガスのない生活をする人々をテレビで見たことがあったが、実際に自分の目で見るのは初めてだった。鶏や犬が村中を駆け回り、木の実を食べて自給自足の生活をする人々。自分がいかに恵まれた環境に産まれてきたのか実感した。

今回のツアーは本当にいい経験になった。カンボジアの歴史や文化を知るいい機会になったし、今のカンボジアを知ることもできた。しかし、カンボジアについて知れば知るほど、

まだまだ問題を抱える国だと感じた。今後この国がどう発展していくのか、遠い日本から見ていたいと思う。

【このツアーで学んだこと】

甲南大学 法学部 2 年生

今回、このツアーに申し込んだのは、ボランティアに興味があって申し込みました。しかし、ボランティアという行動は、正しいし、良いことかもしれないけど、今回、ツアーに行って、本当に正しいことなのか？本当に必要としているのか？ボランティアは必要だけど、そこまで介入する必要はあるのかな？と考えさられたツアーだった。

行く前までは、日本は、カンボジアより、豊かな国だから、豊かではないカンボジアを助けなければならない、日本と同じように、豊かな国ならなければ、幸せになれないと考えていた。しかし、今回のツアーで、孤児院や農村、KURATA ペッパー、日本語学校など訪れて、その価値観は間違っていると気づかされた。日本語学校では、皆、大きな声で、「こんにちは、お疲れ様です。」と挨拶し、積極的に質問をしたり、真剣に私たちの話を聞いてくれた。夢も熱く語ってくれて、日本とは違う、勉強に対する態度や気合いが全然違うと感じた。日本は、中学校までは義務教育で、学べるチャンスは多く、勉強できる環境への有難さや意識は薄い。実際、私も薄く、今、勉強できるこの環境に感謝した。皆、夢を語るとき、キラキラした目で話していて、胸が熱くなりました。発展途上国は、勉強しないし、あまり夢を持たないと考えていたけど、違った。

また、KURATA ペッパーでの倉田さんのお話の中で、アリとキリギリスのお話を聞いて、衝撃を受けました。裸で歩いているからといって、貧しいわけではない。暑いからかもしれない。私は、カンボジア＝貧しい国＝可哀想な国という固定概念を持っていて、裸の人は、服が買えないからだと決めつけていたことに気づいた。中身まで知ろうとはしていなかった。価値観の多様性を学んだ。日本などの先進国が、カンボジアは、お金もないし、衛生面、教育も行き届いてないから、可哀想、不幸せと決めつけるのは違う。実際、カンボジアの現地の人は、皆、笑顔で、優しい人ばかりで幸せそうでした。孤児院や農村で訪れた人々も、笑顔で、招き入れてくれて、子供たちは、人懐っこくて、元気一杯に遊んでいたり、農村の人々は、シャワー４回も浴びたり、お昼寝の時間があったり、悠悠自適な生活をしていた。

豊かな国だから、幸せ。豊かな国ではないから、不幸せ。この考え方違った。日本の国は、確かに、カンボジアよりは、発展している。しかし、幸せというカテゴリーで見たときに、日本の方が幸せだと言えるのか。一人、一人幸せの価値観は違うのではないか。働いて、お金を好きなものに使うことが幸せな人もいれば、好きな人や家族と過ごすことが幸せな人もいる。カンボジアは、豊かな国ではないからこそ、一つ一つにどんな小さいことにも、感謝や幸せだと感じている。私は、日本では当たり前なこの今の環境がどれだけ素晴らしいことか、幸せなことかと気づかされたツアーだった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【見えるものと見えないもの】

同志社大学 経済学部 2 年生

一週間のスタディーツアー。日本にいた時に持っていた価値観が大きく変わったと断言できる。価値観について意識しだしたのはプノンペンの空港についてからだった。発展途上国にはありがちの交通インフラの整備不足により信号があまりなく、とてもバイクが多い。車はとても高くて買えるものではないのだろう。一つのバイクで家族全員が移動しているような状況であった。その時純粋に車をもてないことは可哀そうな事だと思ってしまった。しかし後の体験を通してその考え方は違うことがはっきり分かった。

そんな考えを持ちつつ向かった二日目の孤児院で出会った子供たちの笑顔、それは純粋なもののように見えてどこか悩みを抱えていそうな雰囲気を醸し出していた。孤児院に来る子供たちは路上で生活してたり、親が面倒を見切れず孤児院に来るなど様々なパターンがある。その中で子供たちは自分が今後どのように育っていくのかそのことについてあまり深く考えておらず今を生きることに精一杯になりすぎていると強く思った。そういう面で心の貧しさをくっきりとみることが出来、その貧しさをなくすために自分は何ができるのか、考える良いきっかけになったと思う。

孤児院でカンボジアの子供たちと交流しあったあと、TAYAMA 日本人学校に行くことが出来た。私たちの発表を真剣なまなざしで見てくれ、拙い日本語でたくさんの質問をしてくれた。

このとき思ったのがここに通っている人たちと私はいったい何が違うのかという事だ。なぜここまで真剣に取り組むことが出来るのか。それは彼らが次の目標をしっかりと持って頑張っているからだと思う。具体的な目標を持つことで次のステップに向かうことが出来ると思った。

日本語学校でパワーをもらったあと農村へ行った。農村は町から離れた田舎で川の水もとても濁って汚かった。それでもそこには 3000 人ほどが暮らしていると聞いてとても驚いた。話を聞いているとここの住民たちはみな自給自足生活を送っているとのことだった。庭でフルーツを育て、豚や鶏を育て、水（鉄が多く含まれとても飲めるようなものではなかった）を汲み生活している。そんな生活が幸せなのだろうか。その時すごく自問自答し、答えを出そうとした。ほかの参加者にも話を聞いてみたりした。すると農村に住んでいる人は自分たちでちゃんと生きていけているからそれは幸せなことであると結論付いた。他所からみると可哀そうだなと思う事でもそこに生きている人達はそれで満足しているし他所の人たちがとやかく言うものではないなと思った。

今回のスタディーツアーを通して日本人の感覚でカンボジアの人たちは貧しいから可哀そうだと決めつけていたが実際は貧しいながらもちゃんと暮らせていることが分かった。募金活動をするにも貧しいからという理由ではなくこれが必要だからするという風に変え

ていけたらと思った。日本に帰ってから色んな人にカンボジアについて話すことが出来た。現地に行って出来ることもあるが日本では自分は何ができるのか常に考えながら今後生きていきたいと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【私の貴重な体験】

京都外国語短期大学 キャリア英語科 1 年生

私は、今回このベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して、本当に貴重な体験ができたと思う。その中でも最も貴重な体験ができたいくつかを挙げていきたいと思う。

まず１つ目は、TAYAMA 日本語学校に行ったことである。私が生徒の前でプレゼンテーションをした際に、日本のことについて知りたい！という思いを生徒全員が目で伝えてくれているのを強く感じ、興味津々に聞いてくれている姿勢を見て、私がもし先生の立場なら何でも教えたくなるだろうし、教え甲斐のある生徒たちばかりで教えていても意味のある毎日を送れそうだなあと思った。それと、日本の生徒では考えられない程生徒の目が輝いていたことや凄く素直であったこと、挨拶がきちんとできていたこと。日本の生徒間で起こるあの人が嫌いだ！や、あの人とは仲良くしたくない等言っている生徒すらいなく生徒全員が仲良くできている関係に触れることができて良かったと思うし、生徒に対しての先生の一生懸命さも伝わってきた。最後に私たちに生徒全員が合唱コンクールで唄う曲を唄ってくれた時、心を込めて唄ってくれたのと歌詞が良かったのもあり私は涙が出そうになった。

２つ目は、ツーズー病院平和村に行ったことである。障害のある方たちと関わらせてもらって自分とを比較できた良い時間であった。それはその中の一人にプールで泳いでいる動画を見せてもらって、障害のある方の方が凄く何事にも前向きでどんなことにも頑張ろう！という気持ちをもっていることを感じた半面、私って何なのだろう。。。と考えてしまったし、頑張れる、何でも出来る環境にいさせてもらえているのだから、もっと頑張らないといけないなと考えさせられ、有難みを感じた。私の良いお手本が見つかった。また、一生懸命生きる大切さも学べた。

３つ目は、シハヌーク病院 HIV 病棟に行ったことである。通訳を通して患者さんのことを聞かせてもらい、どういう症状からくるのか等、その患者さん本人に聞かせてもらえたことは貴重な時間であった。また、既往歴に関しては少し複雑な気持ちになった。HIV 患者に出会ったこともなかったし、ありのままの心情を聞けて為にもなった。

４つ目は、CCH 孤児院に行ったことである。私の想像していたイメージは、かわいそう、貧しい子たちばかりというマイナスなイメージしかなかったし、持っていなかった。でも、実際に行ってみてその子たちと出会い、関わり、そんなマイナスなイメージはどこかに消えてしまった。その子たちのスタイルで元気に楽しく暮らしていた。そんな姿や顔を見ていると、パワーをもらえたし、また素直さが凄く溢れていてこの子たちと毎日関わっていたら素直の溢れる人になれるだろうなあと思った。今の日本の子供のことや私の小さい頃のことを思い浮かべると、本当に裕福な子は多いけれど、ここまで素直な子が日本の子供の中にはいるのかなあと思ってしまったし、裕福で暮らせていることが本当に幸せ

なのか？ということ。私は、たとえ裕福に暮らせていなくてもその子たちが、幸せに元気にその子のスタイルで暮らせていたら問題ないと思うし、またそんなことより素直でいることの方が人から好かれ、信頼性のある人間になれると思う。人間に必要なことって一体何だろう？と自分に問いかけた一日だった。

この１２日間のスタディーツアーを通して、幸せの形は様々であるということ、また、想像するだけではなく、実際に行き、五感で実際に感じてみるということの大切さを学べた。日本って本当に何においても行き届き過ぎていて、それが日本人を自立できないようにしているんじゃないかとも思う。このツアーは今の自分、これからの自分において本当の生き方を考えることの出来た貴重な１２日間であったし、凄く濃厚な毎日を送れた。これはこれからも日本と言う国で生きていく私にとって必要な事であり、学べた場、成長出来たであろう場となった。私の一生の思い出となり、忘れることのできない最高の思い出となった。これからも一日一日を大切に出会った人たちを時には思い出し、一生懸命何にでも前向きに取り組み、私らしく生きたいと思う。

最後に、このスタディーツアーに参加できたこと、引率の方、現地ガイドの方、参加した皆さん方に出会えたこと感謝でいっぱいです。また、引率の方、現地ガイドの方には大変お世話になりました。改めて、本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【知ることと理解することの違い】

同志社大学 商学部 2 年生

自分はこのツアーでいろんなところを訪問し、本当に多くの事を学ぶことが出来た。その中で特に自分の考えを大きく変えたのはいろんな人の話を聞くことだった。自分はこの研修を経て、本当の意味での「人の話を聞く」という事を理解できた気がする。

私たちは、自身で「知識を得る事と、それを本当の意味で理解することは違う」とわかっている。しかしほとんどの人がこのことをただ分かった気になっているだけだと思う。自分も研修に行く前まではそうだった。JAPF から出された事前学習という宿題をきちんとこなし、カンボジアという国と、カンボジアの抱える諸問題について理解したうえで臨んだ研修だったが、そんなものにそこまで意味はないということを思い知らされた。もちろん全く意味がないという事なんて全くないのだが、それが本当の意味で理解したかというと、それは大きな間違いだった。例えば、カンボジアという国の事を学ぶ上で不可欠なポル・ポト政権の話についてはかなり詳しく調べたのだが、現地で話を聞くとポル・ポトの印象は事前学習で感じた印象とは大きく異なり、自分の調べたことも間違いではなかったため戸惑った。しかし、ネットで調べたことを真実だと鵜呑みにするのではなく、現地の声を聴くことでそれを本当の意味で理解できるのだろうと悟り、ポル・ポトについてもそれが正しい史実なのだと理解した。しかし、それだけではまだ間違いだった。

研修の中で、計三回ポル・ポトについての話を別々の人から聞く機会があったが、矛盾したことを話している訳でもないのに、話の印象がそれぞれで大きく異なった。例えば、事前学習で調べたときは、「ポル・ポトは地方の農民をそそのかしてクーデターを起こした悪者である」という印象を受けたが、一人目の話では「ポル・ポトは国を愛した共産主義者で、彼なりに国を良く変えたかったのだがやり方がまずかった」という話であった。また、二人目の話では「地方の農民はポル・ポトの思想に強く共感したためにポル・ポトに下った」という風に話していたのだが、三人目の話では「当時反ロン・ノル勢力であったポル・ポトが国民から支持の多いシヌハークが手を結んだことによってポル・ポトの支持も増えた」という話であった。どれも間違った話ではないが、こうもいろんな話しかたがあるとどれが正しい史実なのかがわからなくなってしまう、というのがすべての話を聞いて思ったことだった。しかし、正しい史実なんて本当はなかったのだ。

確かに史実というのは一つの変わらない事象の記録ではあるが、それについての正しい話なんてないのだ。地方の農民がポル・ポトに下った理由にしたってみんながみんな同じ理由であるとは限らないし、立場が異なれば同じ事象にしたって見えている光景だって異なるはずである。このことを今回の研修で痛感した。

つまり、自分が今回の研修で学んだことは、「理解する」ということは一つの事象でもいろいろな考え方や、いろいろな立場からの光景を知ったうえで様々な正しさを認める事

であり、話を聞くことにおいても一人の話を聞いて満足するのではなく、多くの火との話を聞いて自分の中で咀嚼する事が重要である、ということである。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の豊かさと幸せとは】

神戸市外国語大学 外国語学部 1 年生

カンボジアに到着し、バスに乗った際に窓から見た景色は、日本で「豊かな」暮らしをしている私にとって、衝撃的だった。例をあげるとキリがないが、バイク 1 台に 4 人乗っていて、車やバイクの間を人が通っていたり、ゴミはあちこち散っていたり、人々はほとんどみんな裸足で街歩いていたりと日本では考えられない光景が私を取り巻いていた。しかし、そのなかでも、カンボジアの人々は何の不満もなく、笑顔で楽しそうに「幸せそうな」毎日を過ごしているように感じられた。

「本当の」豊かさと幸せとはなんだろうか。カンボジアで過ごす 8 日間でとても疑問に思った。例えば、日本人に「どういう人のことを豊かで幸せそうだと感じるか」と聞くと、きっと半数以上の人が「お金を持っていて、豪華な暮らしをしている人」と答えるだろう。最近まで、私もテレビで芸能人の豪華な暮らしを観た時には、「お金を持っていると、こんな豪華な暮らしができて幸せだろうな」と心の中で思ってしまうのも事実であった。しかし、そこでお金を持っている日本人は自分のことを本当に幸せだと感じているのだろうか、あるいは本当の幸せはお金を持っていることであるのだろうかと考えると、どちらも肯定し難いものである。

今回カンボジアに行って、いろんなことを体験したことを踏まえると、「本当の」幸せを感じているのはきっと日本人よりもカンボジアの人々なのだろうなと思った。特に、実感したのは、TAYAMA 日本語学校に行った時と農村のフリースクールに行った時である。日本語学校の生徒たちはみんな、元気に挨拶してくれるし、日本語を学びたいという意欲や熱心さ、何でも知りたいと思う好奇心がとても感じられた。また、農村のフリースクールにおいても、幼い子供たちが妹の面倒をみながらでも学校に出向こうと思う姿を見て、少しの時間でも学べることの幸せ、「本来の」幸せを感じているのだと実感した。確かに、豊かな暮らしをしているのは日本人であるが、日本人の中では、この現状の暮らしに当たり前さを感じているため、常に現状以上の贅沢な豊かさを感じた時に幸せを感じるのだろう。以上より、カンボジアの人々は、日々の生活以上の幸せをあまり知らないからこそ、現状のことに熱心になることができ、毎日が幸せだと感じることができているのである。「本当の」幸せと豊かさとは、欲しいものが何でもある裕福な生活をするからこそ感じられるとは限らないのだと痛感した。

私は、発展途上国を支援することで、だんだんと途上国途上国の幸せの基準が高くなってしまい、本来の「幸せ」が薄れてしまうことを少し懸念している。しかし、この本来の「幸せ」を伝えていくためにも、私たち先進国の人々が幸せについて、再確認して支援していかなければいけないと私は考える。このツアーで、このように考え直すことができて、参加した意義があったなととても光栄だと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアの人々が教えてくれたこと】

関西外国語大学 外国語学部 3 年生

大学に入って 2 年と半年が過ぎ、自分の中でこのままではダメだ、何か刺激が欲しい、という欲望を抱いていたころ、このＪＡＰＦのポスターを見つけた。初めは、正直どんなことをするのか、どんなメンバーがいるのか何もわからず、手探りのまま参加した。しかし、一日目でもう確信したことがあった。それは、今まで生きてきた中で一番濃いい、充実した 12 日になるだろう、ということだった。毎日数か所回る研修先での新しい発見、学びに加え、各々違う分野を学んでいる同世代が集まっているからこそ聞ける、いろいろな角度からの意見が交差するディスカッション。これらは今まで経験したことがなかった分、わたしにとってとても新鮮で、考えさせられることが多い毎日だった。その中でも、帰国してからもずっと心に残り続けているのが、ベトナム人、カンボジア人の温かい笑顔だ。観光客であるわたしたちに対しても、目があえば微笑んでくれ、いつも幸せそうに暮らしていたのが印象的だ。日本を出発する前は、正直、どんな貧しい方たちがいるのだろうかと不安な部分もあった。しかし、このツアーに参加してみて、これらは我々の勝手な先入観に過ぎないということがよく分かった。確かに、日本よりかはまだまだインフラも整っておらず、不十分なところも多いかもしれない。しかし、だからと言って、それが満足な生活を妨げているわけではない。人それぞれによって生活のニーズも異なり、幸せと感じる価値観も全く違うからだ。出発する前のわたしは、ベトナムやカンボジアが貧しい国であるという事が前提なうえ、それを自分の目で確かめられることをひそかに期待していたのだ。だからこそ、この大きな過ちに気づいたとき、現地の方々を見るのが申し訳なく、いたたまれない気持ちになった。親切にしてもらった分、その痛みは大きかった。

また、現地の学生と触れ合ってみて特に感じたのが、勉強意欲が日本の学生よりもはるかに高いということだ。日本は資源が豊かな分、どこか勉強できる環境に慣れすぎているように思えた。訪問させてもらったカンボジアの学校では、働きながら勉強している子も大半で、みんな合間をぬって勉強しているようだった。また、親の仕事を手伝わなければならず、勉強したくてもできない子さえいることを知った。彼らのことを考えると、今までは勉強できるのが当たり前だと思っていたが、これからは勉強をさせてもらっているという自覚をもって、勉強するという行為にもっとありがたみを感じなくてはいけないと強く思った。日本では当たり前のようにしていた行為そのものが、実はとても幸せなことなのだと気づかされた。

このように、日本でいつも通り過ごしていたらきっと何の変哲もなかっただろう 12 日間が、ＪＡＰＦに参加したことにより、わたしの価値観が変わり、その後の生活を大きく変えてくれたとても意味のある時間となった。現地の方々、ツアーガイドさん、引率してくれたスタッフ、わたしを成長させてくれた全てのものに対して感謝の気持ちでいっぱいだ。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【機会の平等をいかにして実現するか】

島根県立大学 総合政策学部 2 年生

12 日間の研修を終えて、一息ついた後、当初の参加目的について考えてみた。「全国から集まる目的意識を持っている活動的な大学生の共通項を発見するため聞取りを行い、それを自分の所属大学に伝えること」である。わざわざ海外のスタディーツアーに参加してまで、聞取り調査をすることに大きな意味があったように思う。なぜなら、この調査から得られた結果は、今回訪れたカンボジアから見えたことと大きな関連があったからだ。

最初に、個々人の選択肢の数がその人の人生において大きなプラスの影響を及ぼすことについて触れておきたい。カンボジアの TAYAMA 日本語学校の生徒は、口コミで学校のことを知り、入学するというものだった。「TAYAMA 日本語学校に入学する」という選択肢があるかないかで、その人のその後の人生は大きく変わる。極端な例を挙げているかもしれないが、人間は多数ある選択肢の中から自分に合ったものを選択することで、より豊かな人生を送ることができることがわかるだろう。

そして、今回の調査の結果は、機会と選択肢の数が比例関係にあることを前提に、個々人がより多くの機会に触れ、自分の可能性を探るためには、周囲の環境（教育制度、社会構造、もう少し詳細に見れば、家庭の経済資本量、文化資本量、個人の社会関係資本量など）が最重要視されるということである。

まず、参加者へのインタビューからわかったことを述べていく。彼らは、大きく分けて 2 つの分類ができる。1 つ目は、幼少期～学童期の期間に親から習い事をする機会を与えられていたグループ、2 つ目は、高校生～大学生の期間に、自身に危機感や憧れを抱かせるような非常に強く影響を受ける人物が現れたグループである。両グループとも、自分のやる気といった内的要因ではなく周囲の環境（習い事をさせてくれる親、影響を受ける人に出会うゼミに所属、講義、友達）という外的要因によって、今の自分があると言っていた。そして、彼らは知的好奇心が旺盛で、様々な機会を見つけ出し、自身の選択肢を増やすことに精を出していたように思える。

次に、スタディーツアーに参加した全体的な感想として、教育の重要性を感じたことを付け加える。カンボジア内でも、社会階層の違いが原因で、機会の不平等が生じてしまうことが多い。TAYAMA 日本語学校へ行った時も、王立大学へ訪問した時も、その学生の学力もそうだが、やはり 1 番は機会に恵まれていると感じた。運がいいのだ。すなわち、良い環境のもとに生きているのである。その例は、偶然、口コミで学校の存在を知った、偶然、経済力を持った両親を持ったなどである。以上より、機会の差が各々の人生に大きな差をもたらしていることが分かった。しかし、環境というのは恣意的に作ることができる。良い機会を提供するのが周囲の良い環境であることを踏まえると、如何にして教育・家庭・経済環境作りを行っていくかが重要視されるだろう。（そんなことは、わざわざ例

を出さなくても、共通の理解であるとは思うが。）さらに、カンボジアという発展途上国においては、格差の規模は日本のそれとは比べ物にならないほど大きく、それゆえ、その機会の不平等さを是正するような動きが必要になってくると考えた。

以上、参加者へのインタビューとカンボジアで感じたこと 2 点を考えると、如何にしてより良い環境づくりを進めていくかが今後の論点になると思う。これは、私の所属大学規模の話でも、カンボジアという大きな規模での話にも共通することだ。

最後に、今回のインターンシップ型スタディーツアーに参加した感想として、普段めったに接することのできない他大学の学生さんと交流、そしてディスカッションすることができて本当に良かったと思っている。とても陳腐な言葉で申し訳ないが、言葉で表現するのが困難なくらい、貴重な経験をすることができた。G2 のメンバーが作る雰囲気は、学ぼうとする姿勢が強くとても居心地が良かったし、彼らのように積極的な大学生がもっと増えればいいのにと切に願うばかりだ。

ベトナム・カンボジアという異国の地に行き、他大学の学生と勉強をする。異文化の刺激を全身に受けた 12 日間であった。異文化に触れることで、自文化のバイアスを多く知ることができ、今後の大学生活にも大きな影響を及ぼすものになると信じて疑わない。このツアーに参加を決めた自分は運に、環境に恵まれていると思う。それらが与える利益を享受するのは私だけでいいのか。いや、よくはないだろう。

【このツアーで学んだこと】

滋賀県立大学 人間文化学部 3 年生

恥ずかしながら私はこのツアーに参加する前、ベトナムとカンボジアについて特に何も知らなかった。ただ、東南アジアにある国であること、高校の世界史の授業でベトナム戦争について学んだり、カンボジアには世界遺産のアンコールワット遺跡群があったり、といった知識のみしかなかった。そもそも私がこのツアーに参加しようと思ったきっかけは、単純にアジアが好きだから何らかの形で夏休みの期間を利用し短期でアジアに行きたい、と考えていたことだ。その際に大学の国際化推進室でこのツアーのパンフレットを見つけた。パンフレットを読んだ時、研修内容・期間・費用など様々な点において私が頭に描いていたプランと合致していたこともあり、これは行くしかないと心に決めた。

実際に参加してみて、学び得たことは数多くあり本当に良い経験になったと心から思う。まず感じたのは、どれほど日本が恵まれているかということだ。例えば交通面。日本では道路がきれいに舗装されているということはもはや当たり前という認識がある。だが電車やバスなどの公共交通機関、インフラ設備があまり整っていないのが、現在のカンボジアの状態として挙げられる。今回ベトナムやカンボジアを訪れ、私たちが普段何気なく利用している公共交通機関や信号機などの交通設備が不十分という発展途上国の現状を目の当たりにし、車やバイクがなくとも電車やバスなどでどこへでも行くことが出来るという日本の現状を当たり前と思うべきではないと感じた。また衛生面においては、特に食事の際、生のものや水道水を使用したものを口にすることが出来なかった。理由としては、衛生的に日本人の胃に合わないため、体調を崩すことがあるからだ。日本にいるときには食事をする際に衛生面について気にしたことがなかったが、それも日本が恵まれているということに繋がるのではないかと思う。

そして、このツアーから学んだ 1 番のことは、カンボジアの人たちだ。上記にもあるように私はツアーに参加する前、カンボジアについての知識がまるでなかった。それは、インフラや教育などのカンボジアの現状だけでなく、ごく最近まであったという内戦時代についても知らないことが多かった。今回のツアーで、それらについて学ぶことが出来、ツアー中に訪れた様々な施設や機関から、現在のカンボジアを知ることが出来た。私がこのツアーで印象に残っている毎晩のディスカッションのテーマに、「豊かさとは」というものがあった。このテーマに対する問いを考えたときに、私は幸せであることが豊かであることなのではないかと考えた。たとえ、日本ほど恵まれた環境がなくとも、日本語学校、孤児院、農村、レストランや町中で出会ったカンボジアの人たちを見ると、見知らぬ私たちに対しても、手を合わせて挨拶してくれたり、顔を合わせると笑顔で手を振ってくれたりしていた。また、カンボジアの教育面に触れた際、発展途上である故に教育制度がまだまだ整ってはいないが、子供たちの学びたいという意欲を強く感じた。さらにそれは彼ら自身きちんと将来を考

えた上で学んでいるから驚いた。今の日本人学生と比較すると、学歴社会というものがあるため、学びたいという意識がないまま、何となく教育を受けている学生は少なくない。これらを考えると、カンボジアの未来を担う子供たちの生活を豊かにするためには、インフラを整備するなどの環境作りも大切だが、彼らが幸せと感じるものを充実させることを優先してもいいのではないかと思うようになった。

ツアーで 12 日間、毎日新しいことを学び、感じ、共に参加した仲間たちと意見を共有することが出来、とても濃く素晴らしい経験をすることが出来た。違う大学で学部学科、出身も異なっている人たちが集まり、一緒に生活するということ自体とても新鮮だったし、そんな仲間たちと毎晩ディスカッションをすることにより、自分と異なる視点や観点からのものの見方や考え方があることに気づかされた。また、自分の意見を相手に伝えることや相手の意見を理解することの大切さと難しさを知った。共にツアーに参加した仲間だけでなく、現地のガイドさんや引率スタッフに出会うことが出来、貴重な経験が出来たので、このツアーに参加して本当によかったと心から思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアで学んだこと】

徳島文理大学 人間生活学部 2 年生

私は、海外に興味があり自分の目で様々なものをみて学びたいと思いこのツアーに参加した。初めての海外ということもあり不安だったが、ツアーが実際に始まってみると不安というものはなくなり、日を重ねるうちに学ぶことに対しての意欲が自分の中にどんどん出てくるのが分かった。そして、次に挙げる 2 つの支援について深く考えることができた。

まず一つ目は、教育面が都市部と農村では違っているということである。都市部では、私が思い描いていたものとは全く違っており、ビルが建っていたり電子看板があったりと驚く部分が多くあった。移動中のバスの中からも、インターナショナルスクール、日本語学校なども見かけることができ、こんなにも発達しているというのを自分の目で確かめることができた。また、プノンペンにある孤児院では義務教育以外の教育も受けられることも聞き、色んな教育現場を知ることもできた。一方で、農村では、小学校があるが中学校、高校がないなど勉強をしたくてもできないという環境だった。支援で学校を作ればいいのではと思ったが、教師がなかなか派遣されないということを聞いて簡単に解決する問題ではないことが分かった。また、都市部と農村を行き来するにも道路が整備されていないことから交通面の改善も必要であると感じた。このようなことから、経済格差は教育格差もできてしまうということを改めて考えさせられた。

二つ目は、衛生面についてである。ゴミ山を訪れたとき、ゴミを漁ったそのままの手で食べ物を食べている人を見て、感染症などの病気にかかる可能性があるのではと感じた。孤児院に行った時は、周りがゴミだらけであったりトイレが汚かったりと衛生面について考えさせられることが多かった。ディスカッションの中でも衛生面に関しての意見も多く、ボランティアで周りのゴミ掃除やトイレ掃除を行った方がいいのではないかという意見も出ていた。「魚を与えるのではなく魚の釣り方を教える」という言葉が印象に残っているが、この言葉のように、形あるものを与えるだけでなく、掃除の仕方など国が自立できるような目に見えない支援が必要であることを学ぶことができた。

このツアーは濃い毎日であっという間に終わってしまった。しかしただ濃いだけではなく、様々な研修先を訪れ一日の終わりに行ったディスカッションで考えを共有し深めることができ、自分の中でプラスになる貴重な体験をすることができた。日本で住んでいるからこそ気づく部分もあって、こんな環境でいいのかと感じた場所もあった。しかし、住む場所関係なく、たくさんの人が笑顔だったのが脳裏に焼き付いている。幸せというものは人に決められるものではなく、人それぞれであることが分かった。このツアーを通じて、素敵な仲間、引率の方々、たくさんの人と出会えたことに感謝したい。そして、もっといろんな世界を目で見て、耳で聞き、自分の世界を広げたいと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアで学んだこと】

花園大学 文学部 3 年生

ポスターの「本当の支援ってなんだろう？」を見てこのツアーに参加しようと思った。私自身、大学で子どもたちに対してのボランティア活動をしていたので支援ってなんだろうと思った。ツアーに参加すれば支援について学べると思った。

実際に、ベトナム・カンボジアのツアーに参加してみて、支援や教育、戦争について学んだ。

それは、実際にカンボジアで支援している団体である JICA や CIESF,JHP や農村を訪れた時にお話を聞いたチアさんなど多様な支援団体からお話しを聞き支援について考えることが出来た。どの支援団体も団体の支援の良さが見えたけれど、ディスカッションでそれぞれの支援団体の長所や短所など考えた時にどの支援団にも欠けている部分があると感じた。私自身、支援については何かしらの理由で苦しんでいる人たちに少しでも力になりたい、協力したい、幸せになってほしいなど思って支援していたが、KURATA　PEPPER を訪れた時の倉田さんから価値観の多様性について学んだ。出来る人、出来ない人がいるから助け合いが必要。自分が思う価値観が絶対ではないので、相手の立場も考えることを学んだ。支援の苦しんでいる人がいるから力になりたい、手助けは自分の支援の押し付けであること、その人が自分にとっては不幸に見えることなど相手のことなど考えずに自己満足をしていることに気づいた。現にカンボジアでは学びたくても学べない子どもたち、親の手伝いなどで学校には行っているが途中退学する子ども、都市部と農村での貧富の差が激しいなど子どもに通えない子どもたちの事情を聴いたが、TAYAMA 日本語学校や CCH 孤児院、農村の学校、ゴミ山や市場などで色々な子どもたちをツアー中に見たが、TAYAMA 日本語学校での生徒たちの礼儀の良さや日本について貪欲に学ぼうとする姿勢など私自身、生徒たちから学ぶことが多く、見習いたいと思った。CCH 孤児院やゴミ山では、孤児院で経済的に苦しく親と離れて暮らす子どもやゴミ山で親の手伝いしている子どもなど学校には通えていて嬉しいと思った。そして、孤児院の子どもや農村の子供と実際に関わって遊んだが、楽しく、笑顔も多く元気そうに見えたし、農村を訪れた時も貧富の差が激しいと聞いていたけれど、自給自足で自分たちの食べる量は毎日確保出来ていたり、全体的に都市部とは違っておっとりした感じがあり、農村には農村の生き方があることを学んだ。そして、子どもたちに学校の設置や学校を通えない子どもを無くすための支援、衛生面などの支援は必要であると感じたが、このツアーで関わってきた人すべての人が自分らしく生きていると感じた。それが、幸せか幸せではないかと考えると分からないが、支援するとするなら、自分に出来る事をする、それは支援する相手の立場や現状などをしっかり理解して、その人たちにとって何が必要で何が不必要なのか考えて自分に出来ることを小さなことでもやるが私の支援に対する答えである。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを知りたい】

京都府立大学 生命環境学部 3 年生

カンボジアに来るのは二回目でした。以前は観光目的でただ「アンコールワット」の一文字に惹かれた旅でした。シェムリアップのみの滞在、忙しく回って何も知らずにカンボジアという国に来ました。そのまま帰国してしまった私は、カンボジアに行ったのに、この国のことを何もしらないまま行ったと言えるのか、そう思い親にもう一度行きたいと伝えると、一人では危ないからダメだと言われ、偶然大学の廊下で JAPF のパンフレットを見つけました。即決でした。旅はプノンペンから始まりました。シェムリアップの町とは随分と雰囲気は違いました。プノンペンに行くことは、カンボジアの歴史を知るのにとても意味があり、ポルポト時代の 遺産がたくさんありました。キリングフィールド、S21、こんなに穏やかな国がつい最近まで内戦で荒れ果てていたと誰が想像つくでしょうか。果たしてこの出来事を日本人は理解して、カンボジアに支援をしてたのだろうか。これらは私たちにカンボジアという国を深く考えるには十分でした。 日本人から見るカンボジアのイメージ「貧困」それは紛れもなく私たちの潜在意識になっていて、この国からはボランティアだったり募金をすぐ彷彿とさます。カンボジアに行きました。と言えば観光？と聞かれるのではなくボランティアと聞かれる。カンボジアにイオン があること、吉野家があることをみんなが知っているのか、今急速に発展しているこの国を、「貧困」の一言で表すことにとても違和感を感じました。それはもちろん今も少ないお金で 暮らしているところはある。それはどこの国もあって、実は日本でも問題になっているのを 知っているのだろうか。 幸福とはなにか。カンボジアのことをかわいそうと思っている人も少なくないだろう。で はカンボジアが幸福でないのか。日本は高収入で幸福。本当にそうなのか。人それぞれ幸福 は違う。私が見たカンボジアの人々は生き生きとしていて、決してかわいそうには見えなか った。むしろうらやましく感じた。それはないものねだりかもしれないが、いまの就活を控 えた私にとって、日本では過労死などが問題になっているなか、カンボジアはとても魅力的に見えたのである。カンボジアの人々からすると、定年まで毎日働く日本人をかわいそうと見ても不思議ではないのだ。かわいそうなのは私たちだったのかもしれない。このツアーに私自身、一人で参加したこともって仲良くできるのか、ちゃんと一週間過 ごせるか、とても不安でした。しかし、全国から集まった仲間達は私にはない考えを持っているし、みなさんこのツアーの目的をしっかりと持っています。そんな仲間たちと過ごした一週間は刺激的で、とても有意義なツアーにすることが出来ました。カンボジアの事を以前よりは少し知れたと思うし、魅力的なこの国にもう一度行きたいと思いました。素敵が仲間たち、ガイドさん、引率の方々、現地の人々すべてに感謝です。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援ってなんだろう】

滋賀大学 教育学部 3 年生

このスタディーツアーのパンフレットに記載されていた問いを、私は 12 日間、常に考えながら研修に取り組んだ。というより、日が経つにつれて自然と考えるようになった。10 日間様々な研修先に訪れ、多様な分野からベトナムや、主にはカンボジアを見た。

実際にカンボジアを訪れるまでのカンボジアに対する印象は、とにかく危険で貧困に苦しんでいる国であると思っていた。しかし、実際に訪れてみると印象とはかけ離れたものであった。次々に高層ビルが建設されている市内の様子や、必死に学校で学ぼうとしている学生や子ども、自分たちの生活様式を確立した農村部の人々を見ると、今まで自分が抱いていた勝手なイメージに申し訳なさまで抱いた。日本と比べると生活の中にはモノが技術的にも数量的にも不足しており不便なことはたくさんあるが、それはモノがあふれる日本で私たちが生活しているために生じる感情であり、今あるモノを有効に利用していたカンボジアの人々は、自分たちの生活に不便はさほどしていないように見えたし、今の生活様式を変えたいと思っているようには見えなかった。

日本人は発展途上国に対して支援やボランティアが必要というけれど本当に現地の人々が要求しているものにこたえられているのか。また、そもそも現地に人々は今の生活に万足しており、他国の介入の必要性を感じていないのではないだろうか。結局は日本人の価値観に沿ったものを勝手に支援だと考えているのではないだろうか。研修を重ねるにつれてどんどん分からなくなっていった。

研修を終えた今でもこの答えが出せた訳ではないが、このツアーで明らかに分かったことは、教育の重要性である。TAYAMA 日本語学校や CIESF など教育に関する機関ではもちろん、HIV 病棟や農村でもその重要性は計り知れないものであった。HIV についての知識がないためにエイズが流行したり、また子どもたちはポルポト政権についての歴史を知らないために、いつ同じような出来事が起こってもおかしくないのだ。またアキ・ラーさんのお話の中では戦争というものがどのようなものか知らないために、戦争がある世界が当たり前で、戦争も遊びのひとつという感覚であるという話など、「知らない」ということがどれだけ怖いことであるかを肌で感じた。

毎日学校に行って勉強して塾にも通うという生活が当たり前だと感じていた私は、学校でする勉強に意味を見いだせないときすらあった。しかし、学校に行きたくても学校がなかったり教師のいない環境で勉強できないカンボジアの人々からすると、私たちが学べる環境にいることがどれだけ恵まれた環境であるのかを実感し、それとともに自分がもっと学べない環境にいる人々の支援に携わりたいと強く感じるようになった。

私は小学生のころから教師になることが夢であり、教育学部に入学して今も勉強しているが、発展途上国の教育については知識も関心もあまりなかった。しかし、このツアーを通

して教育の重要性というものを肌で感じ、自分の将来の選択肢や視野が確実に広がった。このツアーで得たものをアウトプットするとともに、本当の支援とは何かをもう一度考えなおし、自分なりに行動していきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで感じたこと】

兵庫県立大学　経済学部　3 年生

私が今回このカンボジアスタディーツアーに参加しようと思った理由は日本とは違う国に行きたいと思ったからである。初めは良い経験になれば、程度にしか考えていなかったが、事前学習でカンボジアを調べていくうちにもっと時間がほしいと思った。事前学習の時間が足りず、研修先で知識を吸収するのに精いっぱいだった。その中でも私が感じたことは大きく二つある。

私がカンボジアに行き、感じたことは支援についてである。KURATAPEPPER でお話を伺ったときにボランティアとして井戸を掘る人がいるが、そこにはヒ素が混ざっているため、飲み水としての使用は難しいとおっしゃっていた。本当の支援とは何か。孤児院では外国からの支援が役立っていると聞いたが、HIV 病棟では支援は必要ないという話を聞いた。では、カンボジアの人たちに必要なことは何なのか。研修先を見て回ると、日本語学校や孤児院で様々な笑顔に救われた。カンボジアの環境に慣れず、ストレスを感じていた私にとって、笑顔に触れたことはとても元気づけられた。私はカンボジアに行き、研修先を回った。しかし、何ができるかという答えは見つからなかった。それを踏まえ、私にできることはカンボジアを知ることだと思う。今回痛感したことがある。それは、教科書に書いていない事実のことである。正直、ポルポト時代のカンボジアについて学校の授業で取り上げられた記憶はほとんどない。ワークを見ても 1 頁にも満たない。しかし、事実としてたくさんの人が犠牲になっている。私は行ってみるまで知ろうとすらしなかった。収容所やキリングフィールドに行ったとき、目を背けたくて仕方なかった。だが、今となっては行ってみてよかったと思う。知らないまま過ごしても困らないだろうが、事実を知ったことで、見方も増えた。過去を知ったうえで、今のカンボジアは笑顔のある国だということが分かった。それだけで何か支援につながると思う。具体的に何をするかは掴めていないが、カンボジアに興味を持ち、実際に行ったこともある種の支援だと思う。

次に考えたことは豊かさについてである。ディスカッションでも扱った内容だが、私自身の学びのテーマでもある。日本の価値観、カンボジアの価値観、世界の価値観…、様々な価値観が存在する中で豊かさの定義は曖昧である。カンボジアと聞くと学校建設プロジェクトなどの印象が強かった。しかし、プノンペンには高層ビルがあり、シェムリアップには観光客を迎えるホテルが充実していた。学ぶ意欲にあふれる生徒たちがいた。何が足りないのか、は人それぞれでその人が足りないと思えば足りないのだろう。目に見える豊かさはお金が関係しているものが多いと思う。日本と比べるとカンボジアはお金が少ないかもしれない。それでもそこに暮らす人は特に不自由さを感じていない。豊かさについてはもっと様々な人の意見を聞きたいと思った。

この研修に参加したことで、私は自分の未熟さを感じた。両親、参加メンバー、引率の方、ガイドの方、JAPF スタッフの方々、様々な人のおかげで私はこの研修を無事に終えることができた。ただ参加した、で終わらせないよう学び続けようと思う。

【カンボジア研修】

関西学院大学 経済学部 2 年生

私がこのカンボジア研修で考えたこと感じたことはいくつかあります。

大きく一つ目は文化面がかなり違い、そこには歴史的背景などが隠されていんだと感じます。なんども話を聞いたのですがポルポト政権の行った共産主義政治が原因でかなり経済的な面で影響を現在も受けているのだと感じました。経済的格差を感じる場面が多く、裕福な人々はごくわずかながら存在し高級車などを街中で見かける場面があり、また一方で物乞いをしている人々、スカベンジャーとしてごみをあさるも日給三百円ほどしか収入をえて生計を立てているものなど貧困の差は日本よりも大きいものであるなと感じました。

子供の格差も顕著であり、一方は比較的家が裕福で整った環境で日本語などを一生懸命に学習し将来まだ成功する可能性が残されている子供がいること。もう一方の立場では悪臭がひどい衛生面で悪い状況で生活している子供がいるということ。しかもそのごみの状況は解決策がなくいまも悪い環境を作り出している。

ここで私が感じたことは、日本よりも遅れている部分が多くこの状況を打開するために観光などに力をいれているのだと思いました。シュムリアップでは観光客も多く、いまもカンボジア経済は発展のため努力をしているのだと感じました。

二つ目は日本人の社長がカンボジアで起業し成功をおさめたくさんの社員を雇っていたということです。Kurata ペッパーではカンボジアでなぜ起業することになったのか、またどうして成功を収めているのかということが知れて大変勉強になりました。カンボジアクッキーでは少し高めの値段を設定して従業員にボーナスなどが出るように従業員のことを考えた経営をされているそうです。そのように日本から遠く離れた地域で活躍されている日本人がいるということ、カンボジアの労働環境をよくしている日本人がいるということを知れたことは本当に勉強になったと感じています。

三つ目に感じれたことは、カンボジアには戦いの跡地が多く残っているなと感じました。収容所では当時の写真が生々しく残っており、キリングフィールドでは骸骨が多数展示されているのを見て、この国も日本と同様、戦争、負の歴史を大切にし、同じ過ちを繰り返さないよう努力しているのだと感じました。中でも私の心に残っているのが拷問で耐え切れずに死んだ収容所の人たちの写真です。写真の表情から当時のむごさを物語るようなすさまじさを感じました。地雷からは今尚、この人の器官を奪う道具が埋まっており、実際にカンボジアの人にも聞いたものですが、家族が地雷を踏んだ、親戚が地雷を踏んで足がないなどは日常の会話であるようで、日本では考えられないことがここ三十年で起こっている国であるのだということを感じました。

四つ目はこのツアーだけよい点で参加者全員が大学生であったので、性格も学歴も多様な大学生が日本中から集まりました。そこでいろいろな考えを聞き刺激を受けることができ、これからの学生生活をより有意義に過ごすための話をたくさん聞けよい刺激を感じれたと思います。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修で感じたこと】

名古屋大学 経済学部 3 年生

私がこのツアーに参加した理由は発展途上国の現状を自分の目で見てみたいという思いがあったからである。実際に現地に行くことでしかわかりえないものがあると感じたからである。出国前のカンボジアについてのイメージはポルポト政権とアンコールワットだけであった。しかし、実際に行ってみると様々な魅力があることに気づかされた。

最も強く感じたのは人の温かさである。ツアー中、子供から大人まで様々な人に出会うことができた。彼らはとても親切で幸せそうに感じた。幸せを定義づけることは難しいことではあるが、私たちは金銭的に余裕がある日本人であるからこそ自らより恵まれた環境にいるものを羨んでしまうため、彼らより幸せそうでないのではないかと考えた。

また彼らや街全体からこれからの発展を推し進めようとする気概が伝わってきた。その一方で農村部ではまだまだ開発が進んでおらず、学校に通えない子供も多数いるということを知って都市部と農村部の格差の大きさをまざまざと感じることになった。バスから降りると私たちの元に物売りの子供達が群がってきて、つたない日本語で商品を勧めてくるのを見て、居た堪れない気持ちになると同時にこの現状を変えなければならないと思った。

今回様々な場所を視察する中で、カンボジアが抱える問題を学ぶことができたが、これらの問題も教育がもっと浸透すれば解決に近づくことができると考えた。そのためこれからのカンボジアを支える子供達への教育を充実させることこそが最優先に取り組むべきことであると思う。

カンボジアでは長く続いた内戦から国を立て直すために必死になっているとことである。しかし、どうしても都市部と農村部で差が生まれてしまうという現実がある。これらの対立からまた再びカンボジア国民同士による争いが生まれてしまうのではないかと倉田さんはおっしゃっていた。次の総選挙が非常に不安であるという言葉を聞いて、まだまだ安定しているとは言えない国内事情であるのが現実である。また同じ過ちを繰り返さないためにも同じアジアの国として日本が果たさなければならない役割も大きいと思う。金銭的支援だけではなく、本当にその国がこれから発展していけるように後押しできる方法を模索していくべきである。

私は今回このツアーを通してカンボジアに行くことができて日本では味わうことのできない貴重な体験をすることができた。今回のこのツアーを通して、将来は発展途上国の人々の暮らしを少しでも良くすることのできるような仕事をしてみたいという気持ちが一層高まった。これからも日本だけではなく様々な国のことに興味・関心を持って多角的な視点で物事を捉えられるようにしたい。また是非ともカンボジアに行ってこれからの成長を見てみたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアでの研修を振り返って】

高知大学 人文社会科学部 ２年

大学に入学してから２度目の夏を迎えようとしていた時、何かひとつ思い出に残るようなことをしたいという思いが芽生えた。何でもよかった訳ではなく、スタディツアーというものに参加してみたかった。特に何もしないまま終わってしまった大学１年の夏と同じようにしたくなかったのだ。色々探し回った結果、ＪＡＰＦのチラシに辿り着いた。カンボジアのことは、高校の世界史で習った。アンコールワット、ポル・ポト、内戦、地雷のこと。しかし研修先にあたるゴミ山やＨＩＶ病棟、トゥールスレン収容所、キリングフィールドの存在は研修に向けての事前学習をして初めて知った。それらについて調べれば調べるほど、カンボジアに対するマイナスのイメージだけが膨らんでいた。初めて行く場所、そのうえ知り合いがいない状態で参加するのがとても不安で出発ギリギリまで、行くのを躊躇していたのだ。

それでも印象に残るような出来事や学んだことはたくさんあり、このツアーに参加してよかったと思えた。研修を終え、問題から目をそらさずにちゃんと向き合うことがどれほど大切で難しいことなのか感じた。カンボジアが多くの問題を抱えてることは目に見えてわかる。子どもの労力問題、医療機関での設備不足、環境問題など、次から次へと出てくるだろう。それらを解決していくには、膨大の労力と資金が必要になる。改善することは決して簡単なことではない。「発展途上国だからしかたがない」って言ってしまえば楽だろう。しかし、子どもたちに教育の場を与えようと活動するチアさんや地雷撤去に励むアキラ―さん達のような方々の話を聞いて、どんな問題に対しても、それに真正面から向き合うことに意味があるのだと思った。

そしてもう一つ、ツアーに参加して、人との出会いをもっと大切にしていこうという風に改めて思えた。このツアーの中でたくさんの人たちと出会えることができた。研修先での現地の方々やカンボジアの魅力を一生懸命に伝えてくれたガイドさんたちはもちろん、同じグループのみんな、そして自分たち参加者のために準備の段階から最後の最後まで頑張ってくれた引率の方との出会いは、私にとっての大きな宝物である。知りたいという気持ちさえあれば、たとえわずかな期間の中でもお互いのことを深くまで知ることができるし、お互いの価値観を共感しあえることを同じグループのメンバーたちから学んだ。そして、自分の意見を述べられる、新しい価値観に触れられる、そんなディスカッションの場を与えてくれた引率の方には感謝をしている。たまには何かについて深く考えたり、議論したりする時間があってもいいのではないかというように思えた。私は、このツアーで得たことをこれからの大学生活に繋げていきたいと思っている。最後に、このツアーに関わった全ての方々に感謝の気持ちを述べたい。本当に、ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【伝えるちから】

関西学院大学 法学部 1 年生

「え？カンボジア行くん？カンボジアって何があるん、そこ行って何するん？」これはこのツアーに行く前にある人が私に実際に言い放った言葉である。カンボジアについて「内戦」「地雷」「貧しい」など、マイナス要素のイメージを持つ人が多く、カンボジアに行くと言うと私をもの珍しげに見てくる人が大半だった。しかし私は「カンボジアは思っているような国ではない」と声を大きくして言いたい。

私は今回 JAPF のツアーでベトナムとカンボジアを訪れ、産業面、平和面、教育面など、様々な角度からその国を見ることが出来た。それと同時に、行く前に持っていた、少しは危ないのではないかというイメージも覆された。農業が豊かで、国全体が活気に満ち溢れ、皆があたたかく、部外者である私たちを優しく受け入れてくれた。数々の研修先で学び、多くの考え方を吸収し、行く前の自分では考えられなかったことを考えた。さらにいろいろな事に興味を持ち、質問し、2 グループのメンバーとディスカッションを行った。私と比べて知識量、語彙力、経験値、全てにおいてはるかに豊富なメンバーが発する言葉。正直すごく圧倒された。参加メンバーは全国津々浦々、あらゆる学部から構成され皆がそれぞれ持っている知識を活用し、自分の意見を持ちディスカッションしていた。その中で意見をあまり言えなかった私は、伝える力がないと駄目だと気付かされた。

ツアーを終えた今、私が必要だと強く感じているのは「発信力」である。私が体感したことを私でストップしてしまうことは本当に勿体なく、この体験、このすごく貴重な経験こそ、ほかの人に伝えなければならないと思うからである。そのために私がすべき事は知識量と語彙力を増やすこと、経験を積むこと、いろんな人と話すことである。だからこれからはたくさんの本を読み、学部や学校以外でもコミュニティを作り、いろんな人と出会い、恐れることなくコミュニケーションを取り考え方を吸収する。JAPF ツアー参加メンバーの多くが誰かに影響されて行動しているのを知ったときに、一人だけがんばって意識を高く持っているのではなく、多くの人と関わり、巻き込み人とつながっていく力も大事だと感じた。

上記のことを行い伝える力を身につけ、皆がアジアに対して持っているマイナスの価値観を一新できるような人にならなければならないと思っている。私が伝えることによってアジアに興味を持っていない人が興味を持ち、訪れる機会を増やすことが私の最終的な願いである。

最後に私を大いに成長させてくれた JAPF、現地のガイドさん、十二日間ともに過ごした最高で素晴らしい引率、参加メンバー、関わってくれたすべての人に感謝する。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの子どもたち】

花園大学 文学部 1年生

ポスターを見て、すぐにこのツアーに参加しようと思った。大学生活に物足りなさを感じていた私にはちょうど良かった。はじめは、そのような気持ちだった。しかし、教師を目指している私にとってはこのツアーは自分の将来性を考え直す素晴らしい機会だった。

実際、カンボジアに行ってみて強い衝撃を受けた。やはり、日本と大きく違いがあることは当たり前のことだが、それ以上にカンボジアの教育について思い知らされた。カンボジアでは私たちが当たり前のように受けている教育を十分に受けることができていないという現状である。親に子どもを養える経済的な余裕がなく、子どもに教育が行き届かない。だから、ストリートチルドレンが存在するのだろう。そこで、ストリートチルドレンがいる孤児院に行くと様々な問題を抱えているにも関わらずそこら辺の日本の幼稚園や保育園の子どもたちよりもキラキラした笑顔でイキイキとしていた。彼らは、その時その瞬間を一生懸命で私たちに元気を与えてくれた。今、先進国という国で生きている私たちは不便＝豊かではないとつい考えがちではないだろうか。言葉ではいくらきれいなことを並べても発展途上国を下に見てしまっていないか。しかし、彼らの表情を見ると経済的に余裕があるからといって幸せと直接関連付けることは少し違うことだと感じた。

これまで、子どもたちばかりに視点を置いていたが大人はどうなのか。孤児院の校長先生は「子供は叱らない。なぜなら勝手に施設から出て行ってしまうから」と言っていたが。叱るということは子どもにとって重要な教育の１つだと思う。叱ることで、正しいことや正しくないことを教えてあげなければいつまでも成長できない。また、出て行った先で子供でも働くことができてしまうというものが厄介なところである。カンボジアでは子どもは重要な労働資源であり簡単に働けてしまう。そういう現状が教育の優先順位が低い原因の一つであるといえる。大人の教育に対する意識を高めつつ雇用の幅を狭めることができればカンボジアの現状を変えることができるのかもしれない。

７日間すべてが日本で経験できないようなものばかりだった。施設に実際に行き、現地のありのままの姿を肌で感じることができた。また、ツアーの仲間はほとんどが私よりも先輩でディスカッションでは私とは異なった考え方の人の意見を聞くことができて視野を広げることができた。このツアーではたくさん学ぶことがある中、それと同じくらい楽しい日々を送ることができた。全国各地から集められた仲間一人ひとり本当に良い人ばかりだった。何をするにしても、仲間の存在は大きいものだと改めて痛感した。これからも人との繋がりを大切にしていきたいと思えた瞬間であった。

この先、カンボジアがどのような国に発展するのかまたはしないのかわからないがカンボジアにはカンボジアでしか味わえない良さというものがある。私はそれを大切していってほしいと願っている。

【価値観】

岡山大学 薬学部 2 年生

今回のツアーは私にとって初めての海外であった。一番衝撃を受けたのは価値観の違いである。毎晩のディスカッションでは、その価値観の違いがテーマをより一層難しくした。

ツーズー病院平和村を訪れた日のディスカッションテーマは「出生前診断」についてであった。平和村には身体に様々な障害を持った子供たちがたくさんいた。寝たきりの子や、手足をベッドに縛り付けられている子どもいて、正直かわいそうだなと思ったし、この子たちは生きていて楽しいのかなとさえ思った。しかしそれは我々の価値観であってその子たちにとっては毎日が幸せであり、できるだけ長く生きたいと思っているのかもしれない。障害を持って生まれてくる子はかわいそうだという我々の価値観の押しつけによってこの世に生まれてこれない命もあるのかなと思った。

CCH 孤児院とアンコール・クラウ村について事前学習を行った際は、親がいなかったり、経済的に豊かではなかったり、インフラ整備が行き届いていなかったりすると学んだので、不便で大変そうだなと思った。しかし実際に行ってみるとそんな想像とは真逆で、みんな現在の生活に満足していて幸せそうだった。孤児院の子供たちはみんな明るく元気でフレンドリーだった。クラウ村の売店では、お客さんが来たら働いてお客さんが来なかったら昼寝をするというように、みんな家族でのんびり過ごしていた。周りがものであふれているがあわただしく忙しい日本と比較して、どっちのほうが幸せなのだろうなと思った。その日のディスカッションテーマは「農村がこのままの生活を維持するのと都市化するのではどちらが良いか」であった。我々は都市化することで利便性が高くなり、雇用も増えて生活は豊かになると考えるが、現地の人々からしたら今の生活で十分満足で、寧ろ日本のようにあわただしい生活になり家族と過ごす時間が減ったり地域の中でのかかわりが薄れてしまうほうが不幸に思ってしまうのではないかと考えると、他国がどんどんカンボジアに入り込んで都市化を進めていくのもいかがなものかと思った。

ディスカッションをしていく中で、国境を超えた価値観の大きな違いに驚いたが、話し合いをするその班の中でも価値観に差があり、価値観は本当に人それぞれなのだなと痛感した。KURATA ペッパーの倉田さんもおっしゃっていたが、価値観には多様性があるので頭ごなしに決めつけるのではなく逆の立場に立って考える必要があるなと思った。

今回のツアーで私は世の中には色々な人がいて、たくさんの価値観があることを学んだ。これから社会に出て色々な人とかかわっていく中で、我を通すのではなく相手を受け入れる姿勢を身に着けることも大事であるなと感じた。

最後に、このツアーを企画してくださった JAPF のスタッフの方々、引率の香月さん、河合さん、そして一緒に１２日間を過ごしたツアーの参加者の皆さん、貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

【価値観】

岡山大学 医学部 3 年生

今回のツアーは私にとって初めての海外であった。一番衝撃を受けたのは価値観の違いである。毎晩のディスカッションでは、その価値観の違いがテーマをより一層難しくした。

ツーズー病院平和村を訪れた日のディスカッションテーマは「出生前診断」についてであった。平和村には身体に様々な障害を持った子供たちがたくさんいた。寝たきりの子や、手足をベッドに縛り付けられている子どもいて、正直かわいそうだなと思ったし、この子たちは生きていて楽しいのかなとさえ思った。しかしそれは我々の価値観であってその子たちにとっては毎日が幸せであり、できるだけ長く生きたいと思っているのかもしれない。障害を持って生まれてくる子はかわいそうだという我々の価値観の押しつけによってこの世に生まれてこれない命もあるのかなと思った。

CCH 孤児院とアンコール・クラウ村について事前学習を行った際は、親がいなかったり、経済的に豊かではなかったり、インフラ整備が行き届いていなかったりすると学んだので、不便で大変そうだなと思った。しかし実際に行ってみるとそんな想像とは真逆で、みんな現在の生活に満足していて幸せそうだった。孤児院の子供たちはみんな明るく元気でフレンドリーだった。クラウ村の売店では、お客さんが来たら働いてお客さんが来なかったら昼寝をするというように、みんな家族でのんびり過ごしていた。周りがものであふれているがあわただしく忙しい日本と比較して、どっちのほうが幸せなのだろうなと思った。その日のディスカッションテーマは「農村がこのままの生活を維持するのと都市化するのではどちらが良いか」であった。我々は都市化することで利便性が高くなり、雇用も増えて生活は豊かになると考えるが、現地の人々からしたら今の生活で十分満足で、寧ろ日本のようにあわただしい生活になり家族と過ごす時間が減ったり地域の中でのかかわりが薄れてしまうほうが不幸に思ってしまうのではないかと考えると、他国がどんどんカンボジアに入り込んで都市化を進めていくのもいかがなものかと思った。

ディスカッションをしていく中で、国境を超えた価値観の大きな違いに驚いたが、話し合いをするその班の中でも価値観に差があり、価値観は本当に人それぞれなのだなと痛感した。KURATA ペッパーの倉田さんもおっしゃっていたが、価値観には多様性があるので頭ごなしに決めつけるのではなく逆の立場に立って考える必要があるなと思った。

今回のツアーで私は世の中には色々な人がいて、たくさんの価値観があることを学んだ。これから社会に出て色々な人とかかわっていく中で、我を通すのではなく相手を受け入れる姿勢を身に着けることも大事であるなと感じた。

最後に、このツアーを企画してくださった JAPF のスタッフの方々、引率の香月さん、河合さん、そして一緒に１２日間を過ごしたツアーの参加者の皆さん、貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【2017 年夏期　カンボジアインターンシップ型スタディツアー】

国際基督教大学 教養学部 2 年生

カンボジアという日本とはまるで異なる場所に一週間身を置き、全国から集まった魅力的な同世代の仲間と過ごした時間はかけがえのないものとなった。
自分が、今回参加を決められる環境にあったこと、また、カンボジアで触れ合った多様な価値観を通して得ることのできた学び、全てに感謝をしている。

カンボジアの常識は、日本の常識とは違う。メンバー一人一人の考え方や、価値観もそれぞれ違う。最初はなかなか受け入れることができず、その上、ホテルの相部屋におけるダブルベットのストレスは大きかった。心が折れそうになっていた。

私の今回のテーマ、『様々な価値観を受け入れる』。簡単なように思っていたこのテーマが、こんなにも大変なことだとは思ってもみなかった。

研修では、重い内容や暗い歴史に触れて涙が出そうになったりもした。しかし、夜遅くまで私の話に付き合ってくれたり、冗談を言って笑わせてくれたり、真剣な話を聞かせてくれたりする素晴らしいメンバーがいたから、最後まで前向きな姿勢でツアーに参加することができた。

私は今まで、資本主義の世界に翻弄されていて大事なことが見えていなかったと感じた。収容所やごみ山を訪れ、幸せとは、豊かさとは GDP や収入では計ることのできない、客観的には定義できないものなのだと実感した。

収容所では今まで当たり前だと思っていた自由、そして、自分の大切な人々と過ごせる時間のありがたく思い、また、ごみ山では私にとってはショッキングな光景でしかない光景が、その場にいる現地の人々からすれば家族とともに働ける満足のいく職場なのかもしれないと気がついた。

貧しいから、衛生的に危険な状態であるから幸せとはいえないという浅はかな考えを持っていたこれまでの自分を恥ずかしく感じた。私がいつの間にか身につけていた固定概念はカンボジアでは無力であった。カンボジアに実際に訪れてみないとわからないことだらけだった。

アンコールワットを見てみたい、何もしなかったら何もないまま終わってしまう夏を自分の成長につなげる夏にしたい、そんな安易な思いの下に今回のインターンシップへの応募を決めた私だったが、今回の体験を通して様々なものを見つめ直す大きな契機を得ることができた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

立命館大学 産業社会学部 4 年生

カンボジアという国について初めて知ったのは、10 年ほど前、日本テレビ系「行列の出来る法律相談所」のなかで、カンボジア学校建設プロジェクトがきっかけである。その中で、家族のために水を汲みに行く子供の姿があった。しかし、その水は泥水だった。自分が住んでいるところとは違うところの国で、自分には考えられない状況が起きていることに小さいながらに衝撃を受けた。そして、大学生になった自分に欠けていた思いやりの心。これを育むきっかけにしたいなと思い参加を決意した。

カンボジアで印象に残ったこと。まずは、孤児院の子供たち。校長先生の話によると、道に落ちているものを拾って食べたり、親がいなかったりとネガティブなものだったが、一緒に遊んだ子供たちからは一切感じなかった。一つのボール、一つの折り紙、一つのフリスビーに全力で遊ぶ子供たち。その元気な姿と無邪気な笑顔は僕たちをまた元気にさせてくれた。そして、TAYAMA 日本語学校の生徒たち。プレゼンでは、自分自身もわかりやすく伝えることを念頭に臨んだが、高校野球という知らない話題に真剣に聞いてくれた。そのまなざしが、伝えるこちら側を熱くしてくれた。そして最後に、Dreams Come True の「何度でも」を合唱してくれた。その時は、本当に心から嬉しかった。孤児院と日本語学校の子供たちから学んだこと。困難な状況にあっても、やるべきことを全力かつ笑顔でやること。そのひたむきさと笑顔は人の心を動かすということ。胸に刻んでいきたい。

KURATA ペッパー倉田さんのお話からも興味深い言葉があった。「昔、カンボジアはお金がなくても幸せに暮らせる環境があった」。お金がなくても幸せに暮らせるなんて、今まで育ってきた自分の環境を考えると、理解するのはなかなか難しく感じた。ただ、カンボジアで一週間過ごして、理解しなくても受け入れることが価値観の多様性を理解でき、自分以外の人に思いやりの心を持てるのではないかと思った。自分基準じゃなくて、相手の幸せや価値観を考えて接したり、お話したりすること。これが思いやりのヒントになるのではないかと思った。自分の将来にこれから必要な思いやりの心を育む機会をいただけて本当に感謝している。

今回このスタディーツアーに参加して、自分に欠けていた思いやりの心。そして、忘れかけていたひたむきさと笑顔。カンボジアの子供たちが教えてくれた。これから生きていくうえで必要なことを学び、また思い出させてくれた一週間だった。これから行き詰ったりしたときは、この一週間を振り返ったり、違う世界を見て感じたりしながら生きていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを訪れて】

北海道教育大学函館校 教育学部 2 年生

私は今回のスタディーツアーに参加し、考え方がこれまでと大きく変わった。具体的には、以下に挙げるふたつのものである。それらについて詳しく述べていきたいと思う。

まずひとつめは、「与えるということがすべて正しいわけではない」ということである。バイヨン中学校を訪れた際に、校長先生から中学校の就学率と卒業率について聞いた。毎年 200 人ほどが入学するが、卒業するのはたったの 60 人ほどである。つまり、卒業率はわずか 30%ということである。その理由の多くは、親の理解が足りないためである。バイヨン中学校の子どもたちの親世代は識字率が非常に低く、教育の重要性についても理解が足りない。そのため、入学しても親に再び働かされ、学校に行けなくなり、退学せざるを得ない子どもが多い。その話を聞き、一度教育を受けてその喜びを知っても、辞めてしまう子どもは失う喪失感の方が大きくなってしまうのではないかと考えた。私は現在教育学部に所属しており、教育について学んでいる。教育は全ての子どもに与えられるべきであり、自分はより多くの子どもに教育を与えるべきなのだと信じてきたが、今回カンボジアの教育の現場を目の当たりにし、一概にそうとは言えないのかもしれないと感じた。教育が必要だという考え方は変わらないが、何も考えずに、かつ一方的に与えてしまうことは正解でないだろうと思った。

ふたつめは、前述に関連して「支援は本当に必要なのか」ということである。アンコールクラウ村を訪れた際、現在の日本ではほとんど見られないような原始的な生活を目の当たりにし、とても驚いた。家には電気やガスが通っておらず、夜の灯りはない。水道も通っておらず井戸を利用し、食べ物はほとんど自給自足で賄うという生活であった。しかし、そんな生活の中で、彼らの中に不満そうな表情など全く無かった。むしろ、とても楽しく、幸せそうであった。また、プノンペンやシュムリアップの街中でも同様のことを感じた。街中や人々の生活の様子を見て、明らかに裕福といえるようには感じなかった。だが、カンボジアの人々は皆、常に笑顔であった。確かに日本よりも生活水準は低く、物質的には恵まれていないのかもしれないが、彼らは日本人が持っていない心の豊かさを持っていた。その様子を見て、支援の必要性はあるのか、疑問を抱いた。私は長い間国際協力に興味があり、途上国の恵まれない人々の支援をしたいと考えていた。しかし、実際にカンボジアを訪れ、人々を目の前にすると、一体彼らの何が“恵まれていない”というのか、全く分からなかった。そのため、金銭的な支援はもちろん、国際協力と称した全ての行動は、本当に正しいものかは分からないと思った。現地の人が何を必要としているかは実際に現地にいって自分の目で現場を見なければ分からないのだろう。そのため、今後自分が他者に対し何か行動を起こす際は、本当に必要なのかより多くの視点から考えなければならず、そのためにはもっとたくさんの世界を知るべきなのだと感じた。

今回のツアーを通し、本当にたくさんのことを学ばせていただくことが出来た。カンボジアはたくさんのことを教えてくれる素晴らしい国であった。自分はまだまだ“本当の世界”を何も知らないため、もっとたくさんの地を訪れ、たくさんのことを勉強してから、もう一度カンボジアの人々に会いに行きたいと思う。

この研修に参加できて本当に良かったと思う。どうもありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

埼玉大学 教養学部 3 年生

今回のベトナム・カンボジア 2 ヵ国ツアーでは、資料館や病院、企業、援助機関などの様々な場所を訪れ、多くのことを学んだ。その中でも私にとって印象的だったのは次の 2 点である。まず 1 点目は、「カンボジアの人々と自分との間にある問題意識の差」である。これはとくにゴミ山への訪問で印象深かった点で、今回のツアーの中で最も衝撃的な点でもあった。2 点目は、ツアー最終日の最終ディスカッションで取り扱ったテーマでもあるが、「カンボジアと日本の関わり方」である。今後はどのような方針で日本がカンボジアに関わっていくべきかについて、同じツアーのメンバーと一緒に考える時間は大変有意義であり、とても勉強になった。以下に、ツアーを通して得た、これら 2 点に関する私の所感を述べる。

1 点目の「カンボジアの人々と自分との間にある問題意識の差」は前述の通り、ゴミ山への訪問の際に強く印象に残った。衝撃的だったのはゴミ山の視覚的なインパクトや特徴的な臭いではなく、現地の人々のゴミ山に対する問題意識であった。私は現地を訪問するまで、ゴミ山をいかに撤去していくかが問題だと思っていたが、スカベンジャーの方々やゴミ山を管理する現地の企業の方から実際にお話を伺って、本当の問題はゴミ山の存在そのものではないということが分かった。スカベンジャーの方々は日々の生活を賄うためにゴミ山に来ており、一方で企業の方は、自らのビジネスを成立させるために、今後どうやってその限られた場所にゴミを埋めていくかを問題としていた。たしかに、景観を汚す、人体に悪影響を及ぼしうるなどのデメリットがあるゆえ、ゴミ山を無くすことができるのであればそれに越したことはない。しかしゴミ山は現地の人々が生きていくための糧を得る場所であるというのが実情であった。これは現地に赴いたからこそ、頭だけでなく肌で感じて理解できた事実であり、自分の問題意識がいかに浅はかであったのかを気付かされた出来事であった。

2 点目の「カンボジアと日本の関わり方」については、日本の対カンボジア援助が、ただ単純にカンボジアの経済的発展を目的とするのではなく、将来はカンボジアが援助なしで自立する方法を共に探っていく方針が相応しいと考える。訪問先においてカンボジア現地の方が会話の中で、「私たちは途上国だから…」、「外からの援助がないと～できない」と仰っているのを何度か耳にした。たしかに財政の厳しい現状でカンボジア自身が国内の細かい諸問題の解決に手が回らないのは仕方ない側面があるのかもしれない。しかしだからといって、援助に依存してしまう性質や自分たちを途上国だからと悲観視してしまうようなことがあってはならない。そのきっかけを招いているのは、日本をはじめとする先進国が行ってきた援助政策に問題があったためであるともいえる。今後は単にモノを与えるのではなく、将来的にカンボジアが自分でやりくりしていけるように、教育や人材育成などのソフ

トウェア部門における支援を重点的に実施すべきである。また援助機関や NGO による支援だけでなく、企業の積極的な参入も促進し、雇用創出や産業におけるカンボジア側の技術向上も目指していく必要があるのではないだろうか。

私は大学で国際開発学を専攻しており、先生や友人から途上国について話を聞くことも多く、援助関連の話題に触れる機会に恵まれている。しかしながら、今回のツアーほど実感をもって学ぶ経験はこれまでなかった。今回のツアーで学んだことは、これからの勉学、ひいては今後の自分の人生にも活かせると確信している。

このような貴重な機会を用意してくださった JAPF 関係者の皆様、現地での研修を円滑に進めてくださったガイドの方々、ツアーをリードし楽しく有意義な学びを提供してくださった引率の方々、最高の時間を共にしてくれたグループのメンバーに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【12 日間で得たきっかけと経験】

茨城大学 人文社会科学部 1 年生

今回の 12 日間のツアーは、私にとって、学びのきっかけであり、途上国についての自分の誤解を発見するきっかけであり、新しい観点を持つきっかけである。戦争後あまり時間が経っていない二か国で学んだこと、発展途上国と言われる場所で研修をし、話を聞いたこと、グループのみんなで同じものを見てディスカッションをし、考えを共有したことは３つのきっかけに結びついている。

学びのきっかけ、これは私が日本の歴史について無知識であり、考えようとしてこなかったことに気づかされたという意味だ。戦争について、小中高の間に学んできたと思い込んでいたが、文字を読んで覚えて、単に過去の出来事として考えていたのだと気付かされた。ベトナムの戦争証跡博物館やカンボジアの地雷博物館を訪れて、戦争について学ぶこととは、出来事を覚えることやどの国が戦勝国か敗戦国かだけはなく、戦争があった過去を知って平和を考えることだと痛感した。広島や長崎に行ったことがない私は、ただ漠然と「平和が一番」と思っていた。しかし、実際に資料や平和を願うポスターを見たり、被害者や当事者に会い、戦争の悲惨さを目の当たりにすることで「平和が一番」と深く考えるようになった。また、２か国だけでなく、日本の戦争と平和についても考える必要があると考えさせられた。

途上国に対する誤解の発見、私は無意識に、日本に住んでいる自分の尺度で価値を図っていたことに気づいた。ゴミ山を訪れた時、現地の方から、その場所は楽に稼げる、子供たちも楽しくゴミを集めている、埋め立てられたらもう入ることができなくなる、などの話を聞いて衝撃を受けた。私は訪問まで、ゴミ山は不衛生で、危険で、職に就きたくても就けない人々が収入を得るためにやむを得ず暮らす場所だと思い込んでいたが、そうではなかった。実際に不衛生であり、街や農家に公害被害が出る可能性があるため埋め立てられるということだが、その場所で暮らす人々の収入源はなくなることになる。都市部ではまだ雇用があまりないと聞いているし、ゴミ山に通う子供たちは半日しか学校に行かないために十分な教育も受けていない。「埋め立て後はここに住んでいる人々はどこに行くのか」と質問しても、「わからない。」と返された。ゴミ山訪問では、ゴミの管理や埋め立ての方法など、様々なことに疑問を覚えたが、埋め立て後の雇用に関しても対策が必要だと感じた。

新しい観点を持つきっかけ、これは、毎日グループのメンバーと行ったディスカッションのことだ。日本の様々な大学から参加し、学部や専攻もみんな違ったが、違うからこそいろいろな経験や知識を駆使してテーマについて真剣に話し合うことができた。共感できること、全く思いつきもしなかったこと、様々な意見が出たが、全員の意見を反映させた結論を出すことができたのは、お互いに否定をせず尊重しあえたからだと思う。また、議論が発展してそれぞれが大学で行っていることを聞くことができ、勉強になった。

私は、大学で国際学を学んだり、サークルでボランティア活動をし始めてあまり時間が経っていないが、一年生のうちにこのツアーに参加したことで、早い段階で様々な発見や経験

をすることができた。この経験を今後の勉強やサークル活動に生かしたい。また、歴史認識、教育、政治や法律について、日本にも不十分な点はたくさん存在している。今までは難しいからと敬遠しがちであったが、他人に任せるのではなく、自分で学んでいきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【インターンシップを通して感じたこと】

横浜国立大学 都市イノベーション学府 修士１年生

留学生の私は国際センターの看板で、ポスターを見てすぐ、参加しようと思った。自分が研究する分野は地域社会であり、同じのアジアの国のベトナムとカンボジアの社会はどうなっているか関心を持つ。教授に相談した上で、ツアーに申し込んだ。オリエンテーションで、私だけが外国人で、また大学院生だと認識した。このツアーで、日本人の学部生の皆と仲良くなれるかなと心配した。しかし、最後で２５歳の私は別れが来た時、涙が止まらなかった。これはこのツアーをきっかけで、仲良い日本人の友達も作った証拠だろう。

途上国への支援の現状やあり方などについて毎日みんなで考え、非常に濃い日々を過ごした。東南アジアに実際に行かないと、気づけないことと学べないことの発見に加え、ツアーを通して自分も現地で感じたことがとても多かった。毎日のディスカッションで一人ひとりの考えの相違を感じた。やはり、物事を様々な視点から見ることは重要である。私は発展途上国の中国出身で、先進国の日本人の皆との考え方や視点などかなり違っていた。

まず、格差問題について、私はカンボジアの現状から見ると、この問題の提出はまだ早いかなと思った。格差を解決するためには、所得再分配が必要である。しかし、現在のカンボジアで家庭所得の計算はまだやっていない。あるいは、カンボジアは所得の把握できないという状態である。そこで、税金の機能を発揮することができない。税金を取れないカンボジアにとって、絶対的貧困問題の消滅は格差問題よりもっと大事じゃないと思った。また、金銭面の支援（学校の設備、教員の充実、教養科目の増加など）より、家庭から教育へのサポートも大事である。親に教育普及に関することを宣伝するべきだ。貧しい人がお金を稼ぐためには、絶対教育は必要で、教育の普及のためには、親は教育が大切であることを認識しなければならない。読みかけできないから、物事を判断できなくなる。経済だけが重心になるのでなく、長期の目線で、教育も重心になるべきだと思う。教育に関する問題解決はかなり簡単には行かないことであり、子どものことだけでなく両親のことなど多くのことが関わってくる。

次は、孤児院について、孤児院のような施設は、調査やコンサルティングなどがあっても、実際どこまで実施したのがよく分からない。また、子どもの年齢を問わず、一緒に授業を受けさせるのがいいのかを考えた。子どもが家しか勉強できないマナーや家庭関係などを施設で学べないと思った。施設のいじめ問題や男女関係問題などはどうやって解決しているか。施設から出た子どもは失業率と犯罪率が高いという調査結果もあった。先行研究で、孤児院を卒業した子どもたちは暴力的傾向があり、コミュニケーション能力が低いということを知った。やはり、施設の子どもは「人との交流能力が低い」「暴力を振りやすい」など原因で、正常の社会に受け入れない状況になってしまった。実際に子どもたちと遊んでみて、彼らの笑顔から闇を見えなかったけど、きっと私たちの知らないところで多くの問題が起

こっていたと思った。施設、家庭と学校はどうやって協働して、子どもにより良い環境を与えるのか。これは私が関心を持っていることである。子どもが普通に社会の一員になれる制度が改正されることを期待している。

最後に、この研修に参加できて、本当に良かった。これから出会う様々な課題に一つ一つ真摯に向き合っていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【 カンボジアで感じたこと 】

中央大学　法学部 1 年生

私は、今回のカンボジアスタディーツアーに参加して、カンボジアのこれからの発展へのエネルギーを感じた。それは、主に次に挙げる 2 つの理由からなる。

まず一つめに、HIV 病棟の視察のときに感じたものである。カンボジアは HIV 患者が減少傾向にあると事前に調べていたが、それは外国からの資金援助や医師、看護師のボランティアなどによって減少しているのだと思っていた。しかし実際は、HIV 病棟は今は外国からの援助は受けておらず、カンボジア政府によって運営されていた。病院の設備はまだ完全ではないかもしれないが、カンボジアが今は自力で HIV 患者を減らすことができているのに驚いた。

次に、上記のように思った理由のもう 1 つの点は、ゴミ山を視察したときに感じたものである。ゴミ山は何の分別もなくゴミが積み上げられ、しかもそこで暮らす人がいるという最悪の状況だった。私の目からは最悪に見えたが、ゴミ山は管理する会社が存在していた。管理会社の人の話では、カンボジアのゴミ事情は以前よりは良くなっているということだった。以前はそこらじゅうにゴミが捨てられていたが、今は集める場所が出来ていると。また、いまはゴミ山から出るメタンガスをどのように有効活用出来るか研究中ということだった。どのような状況であれ、カンボジア人自身がカンボジアの社会問題解決に向けて努力しているというのが、支援に頼りきっていないとわかって、良いと思った。

研修場所以外でも、プノンペンの街には車やバイクが溢れ、マーケットは多くの人で賑わっていた。また、高い近代的なビルがあちこちで建設されているのを見てもカンボジアのエネルギーを感じた。

孤児院など、まだまだ外国からの援助が運営に必要な場所もあるが、カンボジアの自分で発展していく力を奪わない形での支援仕方を考えなければいけないと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを訪れてわかったこと】

城西大学 薬学部 6 年生

私は、将来、途上国で活躍できる薬剤師になりたいと考えていた。しかし、実際、途上国の現状、生活、医療を見たことがないと思い、何か途上国でのインターンシップがないかと探していた時に JAPF のポスターを見つけた。最終学年を迎え、国家試験や卒業試験が控えているが学生の視点から見れるのは最後のチャンスだと思い、すぐに参加申し込みをした。

1 週間カンボジアについて学んで、行く前はとても暗いイメージを持っていたが、実際はカンボジアの方々は見ず知らずのしかも他国である日本人の私たちを明るく受け入れてくれたように感じた。手を振ったら笑顔で手を振ってくれる。日本ではほとんど見ない光景だった。戦争や内戦により、悲しい過去があってもカンボジアの人々は前を見て力強く生きているように感じた。

カンボジアの世界一おいしい胡椒を伝統的な農法で栽培している KURATA PEPPER の倉田さんが「カンボジアの人々は、お金がなくても幸せに暮らしている。幸せとは、その人が幸せであるかどうかで、自分の価値観を他の人に押し付けてはいけない。価値観の多様性を理解することが大切である。」と。また、「カンボジアの人々は、内戦の前はお金がなくとも幸せに暮らしていた。」と言っていたのがとても心に残っている。幸せとは、その人自身が幸せであるかを決めることであって、周りと同じことをする、周りに合わせることで幸せになれるわけではないことがわかった。

私がカンボジアを見て、特に気になったことは環境衛生である。カンボジアでは子供たちはほとんど歯磨きをする習慣がないと聞いた。食事の内容をみていてもコーラなどの炭酸飲料をよく飲んでいるのではないかと思った。炭酸飲料は子供の成長を妨げる要因の一つであり、虫歯は感染症や病気に繋がる可能性があるため、改善した方が良いと思った。

また、水質の衛生も気になった。カンボジアの人々は生活水を飲んでも体調を崩さないとはいえ、カンボジアを流れている川はどこも濁っていた。カンボジアの地下水はヒ素が混ざっており、地獄の水とも呼ばれている。日本人がカンボジアの人々に綺麗な水を、という思いから地下水を掘ったが、水質検査でヒ素が見つかり使えないことがあったと知った。国際協力をするにしても、その国、そこに生活している人々のことを良く理解しないと、協力しても今後に繋がらないことがわかった。それに、その国の人々が何を求めているかを理解することが大切だとわかった。

今回、カンボジアの歴史、文化を学ぶことで、少しだけ生活、環境を理解することができた。カンボジアの人々がどこまで求めているかまだわからないが、将来、薬剤師として、環境衛生を守る職種として、途上国の健康に携われるようなことをしたいと思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで感じたこと】

早稲田大学 文化構想学部 ３年生

高校生の時から漠然と発展途上国に興味があった。なにも知らない私は「不幸のどん底にいる人を救ってあげたい」と思っていた。ツアーを終えた今いま思えば、とても身勝手な発想である。「不幸だ」と判断するのは、この幸せな国で生まれた私の判断する価値観なのだから。大学で地域開発の授業をとると、違和感を感じた。「幸せな国で育った私たちが、発展途上国の恵まれない人々を救いたいと勉強している」ということに疑問というか、気持ち悪さを覚えた。本当の不幸を知らない私たちが、本当に苦しんでいる人の気持ちがわかるわけがない。そこを援助、支援だなんて本当に上からで偉そうで強引で、気持ち悪い。そう感じた私は国際開発援助という学問から離れてしまった。しかし就職活動をするにあたり、もう一度向き合ってみたいと思った。

カンボジアに行って感じたことは大きく分けて二つある。一つ目はクラタペッパーの倉田さんのお話の中であった「豊かさ」の話である。倉田さんは「アリとキリギリス」の話を例にして、「幸せの価値観の違いを尊重すること」が大事だと言っていた。何を「豊か」なのかと思うのは人によって違う。たしかに、カンボジアの人々はみな、不幸そうには見えない。しかしそれならば私たちのする援助は「自分たちの思う豊かさ」の押し付けである。本当の援助とは何なのだろう。研修先で何回か現地の人に質問されたのは、「あなたたちはなぜここに来たのですか」ということだった。彼らは、今の現状は昔より良くなっているから、今のままで十分だという。自分たちのことを不幸だと思わないから、なぜ私たちがわざわざ来るのかわからないのだろう。もっと恵まれている状況というものを知らないから、現状が一番だと思っている。それでは、日本がカンボジアにできることは何なのだろう。グループでは、「カンボジアの都市と地方の格差をなくせば、カンボジアの人々はみんな幸せなんじゃないか」という意見もあったが、私はカンボジアの人々に「選択肢を与える」という支援のスタンスが一番いいのではないかと思った。もちろん私たちだってカンボジアから学ぶことはたくさんある。「教えてあげる、助けてあげる」のではなく、「このような方法もあるんだよ」という選択肢を与えるのである。カンボジアの人々が私たちに新しい発見と気づきを与えてくれるように。あくまでそれを実行するのは現地の人である。例えば彼らが東京に来て、カンボジアをもっと日本のようにしたいと思うのならばそうすればいいし、そう思わないのならば現状を維持すればいい。大切なのは、知識として「知る」ことである。相手の価値観を尊重しながら、同じ立場で、「良いと思う方法を提案し合い、共有する」という支援のスタンスならば、以前の私が感じた「何とも言えない気持ち悪さ」を打開することができる。

二つ目に感じたのは、「教育の重要性」である。わたしはこのツアーに参加して、すべての問題は教育不足に起因すると感じた。先ほど新しい支援のカタチを示したが、カンボジア

の人々に「考える力」がないとこのような支援は難しい。なぜなら、提案されたことを考えずにやることは楽であり、往々にして人は楽な方へと流されてしまうからである。HIV病棟でも、ゴミ山でも感じたことだが、彼らははっきり言ってしまえば「クリエイティブさ」に」かけている。向上心がなく、もっと良い環境にするにはどうしたらいいのか、という熱意を全く感じなかった。私たちからみたらありえないような状況で、改善したい点がたくさんあるのに、彼らはなにも問題だと思っていない。「豊かさの価値観が違うから」というだけではなく、「現状に満足しない向上心」がない。「考える力」を養う教育は一番カンボジアに浸透していないものであり、本当の自立を目指すには遠回りに見えるかもしれないが「教育」から変えていくことが大切であると感じた。しかしながら、農村の学校で聞いたカンボジア政府からの教育支援はまだまだであり、道のりは長いと感じた。

今回のツアーを通して、本当の支援の形が見え、また意欲も取り戻すことができた。同時に現地に行かなければわからない、目に見えない問題も実際に感じることができ、根本の部分が少しわかった気がした。本当に参加してよかったと思っています。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【価値観の相違と共通】

慶應義塾大学 法学部 1 年生

シェムリアップ郊外の農村に行った際に受けた説明で印象に残っているものがある。「カンボジアの農村の平均月収は 150 ドル」というものである。日本円にして約 1.5 万円、年収にしても約 18 万円しかないという計算になる。観光地として栄える街のすぐそばに、それ程までの貧困があったのか、と衝撃を受けた。しかし、本当に衝撃を受けたのはその後のことだった。

「各家庭の庭では、季節ごとにフルーツが実をつけるし、鶏が飼われているので、十分暮らしていける」との説明を受けたのである。これには、衝撃を受けた。それは現地の人々の価値観に対してでもあったし、自分が知らず知らずのうちに、日本的な価値観に現地の人々を当てはめようとしていたナンセンスさに対してでもある。常日頃から、「価値観は人それぞれ」であることに留意しながら生きているつもりだったし、今回のカンボジア研修に参加した動機もまた、その考え方に基づいて多様な価値観に触れようとしたからであった。そんな自分が価値観の多様性を無自覚とはいえ、無視してしまっていたのだから、自分に対して失望したことは言うまでもない。日本人がカンボジアのような発展途上国の生活ぶりに触れても、GDP などの数値による表層上の「貧しさ」にのみとらわれ、そうした先入観から、住民の実感を軽視した上っ面の『同情』を口にしてしまいがちである。このことは、近年一般に言われるようになってきてはいるが、そうはなるまいと思っていた自分が、実際にそうなってしまったことで余計に痛感した。

ただ、そうした「価値観の相違を踏まえるべき」との教訓を得た一方で、一部に関しては「共有すべき価値観」の存在も確認できたように思う。それは、教育に関してである。

教員不足により学校が二部制になっていたり、そもそも就学率が低いことなどカンボジア教育の問題は多くあるように思われた。農村部でそうした深刻な問題がある一方で、都市部では TAYAMA 日本語学校などに見られるように、教育水準が高まっている。

教育機会の不均等は、農村部の人々の将来の選択肢を狭める。これは単なる教育問題にとどまらず、都市と地方の分断をも生じさせうる。もしも両者の対立を焚きつけるようなことを政権が行えば、ポルポト政権成立前夜の状況に酷似するのである。

忌まわしい過去を繰り返さないために、カンボジアが真に取り組まなくてはならないのは、教育の均等化、特に農村部の教育水準向上なのではないか、と強く思う。

教育が行き渡った日本にいると感じられないことではあるが、教育機会の均等は民主主義に直結する。民主主義を確立しようとするならば、カンボジアは教育機会の均等を図るべきだ。このことに関しては、世界共通の普遍の価値観だろうと感じた。

一見すると、ポルポト政権時代から見事に復興を成し遂げたかに見えるカンボジアだが、やはりまだ民主主義という観点から道半ばだと思われるので、観光業の発達などももちろんだが、国家としての成熟が見られていくことを期待したいと強く思った研修であった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【 ツアーで学んだこと 】

早稲田大学 文学部 2 年生

はじめてカンボジアに足を踏み入れた時、想像とのギャップに驚かされた。内戦、貧困といった単語を連想させるようなものは一見なにもないように思えた。至る所で果物の樹が葉を揺らしていたし、人々は活気に満ちていた。むしろ日本人のほうがよほどつまらなそうな顔をしているような気がした。そのときふと思った。豊かさってなんだろう。毎日沢山のモノに囲まれている私たちは果たしてこの人たちよりも豊かなのだろうか。

勿論、よくよく見るまでもなく内戦は依然としてカンボジアに暗い影を落としていた。知識層が虐殺されたことで文化は衰退し、人口も激減した。文化を担っていた人々が殺されたためにカンボジアの学校では情操教育が行われない、と淡々と語られる様子が妙に生々しく心に残っている。地雷だってまだまだ残っているし、恐ろしくて政治の話はあまりできないという話に、緊迫した状況はまだ続いているのだと実感した。観光地に行けば物売りの子供が次から次へとやってきた。彼らには教育を受ける時間などないことは明白だった。だが、それでもカンボジアの人たちは互いに楽しそうに話をしては笑っていたし、初対面の人相手でも手を振りあっていた。日本人は初対面の相手にあんなにフレンドリーにしない、と言ったところ、ガイドのパニーさんに「なぜフレンドリーにしないのかがわからない。そうしないと楽しくない」と返された。もちろん日本人が閉鎖的なのは風土や文化の影響が大きいので、閉鎖的な日本人が悪いだとか不幸だとかいうわけではないが、カンボジアの人々が不幸で、恵まれていないとはどうしても思えなかった。

それから、KURATA ペッパーで価値観の多様性についての話を聞いて、そもそも、カンボジアの人々とひとくくりにしていること自体考えが浅かったのではないか、と私は思うようになった。考えてみれば当たり前のことだが、ある人が豊かだというときに、その観点はお金かもしれないし、知識かもしれないし、あるいはほかの何かかもしれない。自分では豊かだと思っていても、ほかの人からみれば豊かではないかもしれない。自分の価値観にとらわれたまま相手のためになるとおもうことをしても、実際のところただ迷惑なだけということもままある。価値観の多様性を認める、とは紙の上ではよく見聞きしたものだが、カンボジアまで来てはじめて、それを身にしみてわかったような気がする。

最終日のディスカッション、お題は奇しくも私が一週間考え続けた「豊かさとはなんだろう」であった。一週間考えてみたとはいえ、豊かさの尺度は人それぞれということは漠然とわかっても、いまだ掴みきれていないそれに、自分なりの答えを出さなくてはいけなかった。

班員が各々自分の考える豊かさを挙げていって、カンボジアはカンボジアなりに豊かなのではないか、経済的には豊かではないが、豊かさはそれだけで測れるものではないのではないか、などと話していたとき、「それでもカンボジアは豊かではないと思う」と言った人がいた。理由は教育水準の低さであった。カンボジアの小学校就学率は６０％弱、大学進学率に至っては１％程度。子供たちの多くが経済的な理由で勉強をあきらめざるをえない。

HIV の蔓延も知識不足が主な理由だった。私達は得た知識をもとに未来を選択することができるが、彼らには選択肢すらないというのである。

私の考えは少し違う。確かに教育の不足は選択肢を奪っていると思う。しかし選択肢があるからといって、必ずしもそれが叶うとは限らない。豊かさの尺度は沢山あるが、ひとつひとつに絞ればそこには比較が成立していると思う。この国はあの国に比べて経済的に豊かだ、という風に。ならば選択肢の増加はひとえに比較対象の増加であろう。これはけして豊かになることとイコールではない。

３０分の予定だったところ大幅に延長し、２時間に及んだディスカッションだったが、豊かさとはという問いに対して明確な答えが出ることはついぞなかった。私個人としては、豊かさにはひとそれぞれ基準があっていいという結論に至ったが、とはいえこれは理想論で、資本主義社会という大きな枠組みの中にいる以上、教育制度の徹底や金銭的な豊かさの追求なしには不利益を被ることもあるだろう。ただ、豊かさとはなにか、最終的にわからなかったということを覚えている限り、私はこの先他人の価値観をむやみに否定したり、無理に我を通そうとしたりすることはないと思う。

最後に。自発的な申し込みと LINE の扱いに不慣れだった私に丁寧に対応してくださった JAPF の皆さま、とくに引率のくみさん、そしてカンボジアに行かせてくれた両親、ガイドのパニーさんとセイホンさん、本当にありがとうございました。自分の知見が深まったことだけでなく、成田空港からずっと積極的に人に話しかけることを貫けたこと、学校の枠を超えた人脈ができたこと、ホテルで起きた問題に英語で対応したり、遠慮なく意見を交換したり、果ては通訳の真似事までできたことなど、すべてが貴重な体験でした。これを糧にこれからも頑張っていこうと思います。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【それぞれの生き方】

宮城大学 事業構想学部 3 年生

このツアーの中では、様々な人と接する機会があった。枯葉剤の影響を受けて生まれてきたドクさんや平和村で暮らす子どもたち、カンボジアの発展を願って尽力している日本人、悲惨な出来事を後世に伝えるために活動する方々、日本語を学ぶ学生、現地で暮らす人々、そして 12 日間行動を共にしたガイドさんや仲間たち。今までの大学生活の中でも最も濃い時間だったと言える。

私はツアー中、先入観を捨てて、異文化や歴史的背景から現在に影響しているものを知ることを目標にしていた。しかし、バスの中での事前学習や研修先に着いたときには、可哀想だとか私たちが現状を変えなくては、と思ってしまう私がいた。一番そう感じたのは、ゴミ山でゴミを拾ってお金に換えている人々(スカベンジャー)を見た時だった。だが、実際にスカベンジャーの方に話を聞いてみると全く予想できなかった話をしてくれた。「私たちにはちゃんと働く場所があるが、副収入を得るために来ている」、「会社で働く人たちと同程度の収入をゴミ山で得ることが出来る」、というのだ。私はてっきりゴミ山しか収入源がない人が集まっていると思っていた。もちろんゴミ山でのゴミ拾いが収入源、という人もいるのだろう。まさか、職に就いている人が来ているとは思わなかった。やはり、ゴミ山はここでしか収入を得られない、貧しい人たちばかりが来る場所なのだろうというありきたりな考え方が、私が驚いた原因なのだろうと思う。

その日のディスカッションではゴミ山を無くすべきか・残すべきか、短期的・長期的に見た場合はどうかについて話し合った。無くした時と残した時のメリット・デメリットを出し合ってみたが、どちらかに決めることは出来なかった。日本人側から考えてみれば無くすべきなのだろうが、それがカンボジアの人にとっても、良いことなのかは分からなかった。幸せの定義は人それぞれで、今を変えることがさらなる幸せを生むとは限らないのだ。

ベトナムの平和村やカンボジアの CCH 孤児院に行った時には、果たしてここにいる子どもたちは幸せに生きているのだろうか、私たちのように見学する人が来ることで観光地のように扱われて困ってはいないだろうかと、私の中で考えることがあった。子どもたちと触れ合ったり、施設で働く方から話を聞いたりする中で、治療費は病院や寄付で支払えていること、今いる施設でずっと暮らしていけること、子どもたちは学校にも通える、仕事の紹介をしてもらえること等を知った。日本の病院や孤児院よりもオープンな性質が寄付を集めやすくしている、また、偏見も少ないという効果を生み出していた。私が想像していたよりも、深刻ではないと感じた。子どもたちはとても元気で、曲が流れ始めればダンスを披露し、底なしの体力で施設の内外を駆け回り、私たちを驚かせてくれた。彼らが私たちに見せたあの笑顔に嘘はないと思う。彼らは日本の子どもたちより良い暮らしをしているわけではないが、自身の生活に貧しさを感じている様子は見られなかった。

結局、先入観を捨てようと思っていても捨てきれず、また、自分の物差しで測ってしまっていたな、感じている。しかし、ここで終わりにしてはいけない。これから私たちが出て行く社会は、今よりもさらにグローバル化が進んでいくかもしれない。その中で生きていく上でも、今回の自分の物差しで測ろうとしないことが重要になってくるだろう。価値観やその人のバックグラウンドを理解して関わりたい。そして、このツアーで訪れたベトナムとカンボジアが、今後どのように成長していくのか楽しみである。「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるのだ」。ツアー中に何度か聞いたこの言葉通り、彼ら自身の成長のためになるような政策や方針が生まれることを強く願う。

最後に、12 日間一緒に過ごした仲間たちを含め、関わった全ての方々に感謝したい。それぞれの大学で全く異なる分野を学んでいる人たちとの交流はとても貴重だった。この経験は、必ず私の将来の支えとなるだろう。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【視覚で感じたカンボジアの可能性】

上智大学 法学部 ３年生

研修 5 日目に訪れたカンボジア王宮前広場の光景は、研修先の中で最も印象深く残っている。トゥールスレン収容所やキリングフィールドの見学をし、カンボジア内戦の惨禍を目の当たりにした後に足を運んだこともあり、平和の象徴である鳩が無数に飛び交う中、家族連れのプノンペン市民が集う様子は、カンボジアの発展と将来性を暗示しているように感じたからだ。中には砂場で遊ぶ子供達の姿も見受けられ、人々が各々自由に休日を過ごす様子は、私の知っている日本で見る休日の風景と何ら変わりないように思えた。

他方、研修先の様々な施設を訪問する中で、途上国ならではとも言える腐敗と是正すべき点の存在に気付かされた事も否定できない。例えばゴミ山見学の際には、現カンボジア政府の汚職により国内企業の独占状態が続いているため海外企業が介入できず、環境整備がままならない状況であることを知った。(KURATA ペッパーでは、商品が高額であるため購買層がカンボジア国民に広がりにくい事情を説明されたが、これについては長期スパンで見ると観光業を通して経済力の向上も見込まれるため、改善点としては除外する)。ハードインフラは　JICA を始め多くの海外 NGO や国際機関、外国企業が既に着手しており、ソフトインフラについても民法や民事訴訟法の法案作成に日本が携わるなど、着実な発展が見られた。一方で教育や多方面に渡る人材育成の分野では、国際的に見ても遅れがあることは明白である。その原因はポルポト時代の牽制が引き起こした惨害の残痕である。

シェムリアップの農村部にあるバイヨン中学校を例として挙げる。ローカル NGO である JST が運営する、教育費を出せない農村部の子供達を対象とした中学校だが、ここでも教育に対する親の理解が足りず、無償であっても教育を受けられていない子供が多く存在するのが現状である。特に歴史教育は、過去の悲劇を次の世代に伝承することを躊躇する傾向が全国各地の教育機関にあり、ポルポト時代に禁止されていた情操教育もまた、多くの学校で十分に行われていない状況であった。その上バイヨン中学校の様な地方の学校は、子供達の教育環境を整備してもなお、都市部への就職が難しく、その後につながる人材育成の道が閉ざされている。ここ数十年の識字率の上昇率は甚だしく、将来の人材に多大な可能性を期待できる状況であるにもかかわらず、呪いの様に過去の惨劇が、カンボジア国民を追い惑わしているのだ。

それでもなお研修を終えた今、私は強くカンボジアに魅了されている。それは治安こそ悪けれ、街を行き交う人々の表情や雰囲気に、日本人が忘れつつある温もりを感じ取ったからかもしれない。しかしそれ以上に引きつけられるのは、カンボジアの持つ可能性と危うさのギャップだろう。

カンボジアは、将来性に溢れながらも、それを自らの手で摘み取る国だと思う。前述の通り、それは特に教育・人材育成の分野で露骨に表れている。研修の最後のディスカッション

では、上記の理由から海外からの教育支援が必要であるとの概括的な結論に至ったが、何においても教育支援が優先されるとの考えが、他の学生たちとも総じて一致しているのは面白かった。この様に一国の内情にここまで着目して、具体的に改善点について考察を深められたことは、自分自身にとっても財産であると考える上、国際社会で生き抜くための、一つの大きな指標になったのではと感じている。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【百聞は一見に如かず】

東京国際大学 国際関係学部 3 年生

「百聞は一見に如かず」、という言葉がある。繰り返し何度も聞くことより、一度でも実際に見ることには及ばない、何事も自分の目で確かめるべきだ、という教えである。私がカンボジアに興味を持ったのは十年ほど前、小学五年生ぐらいのときだ。派遣先がカンボジアだった元青年海外協力隊員の話を聞く機会があった。そのころカンボジアは世界最貧国の一つで、実際はどんなところか、現地の人はどんな暮らしをしているのか、すごく興味を持った。それからカンボジアについて調べるようになり、国際協力の仕事に就くことを目指すようになった。私が社会に出るまで、十年もあれば、もう支援をする必要のない国になっているかもしれないと思っていた。実際、他国の援助を受け、最貧国から抜け出し、都市部では急速な発展が続いている。しかしそれにより明確になった問題は、インターネットやテレビ、本などから得られる情報と、実際に現地を訪れて見聞きする情報とでは大きな差があった。まさに「百聞は一見に如かず」である。実際に現地の人の話を聞いてとても驚いた、食糧の豊かさ、言葉、意志の強さについて話そう。

まず、食糧の豊かさである。発展途上国といえば、まず想像されるのは食糧難や水不足だろう。人間が生きるために最も重要なものの一つである。確かにカンボジアは上下水道の整備が行き届いていないため、清潔な水は殆ど確保できていない。しかし一方で、食糧には全く困らないようだった。理由として、農業の発達により国内総生産が消費量を上回っていること。そして、ヤシの木やパパイヤなどの果樹がそこら中に生えていることである。これらを見れば食糧不足とは程遠いと見えるが、それでもご飯を食べていないような子どもがいれば近所の人が呼んで食べさせると話していた。このようにカンボジアでは慢性的な栄養不足、偏りがあるため痩せ細っている人が多いが、食料に恵まれているため餓死することはないと現地の方は話していた。

二つ目は、言葉である。海外で旅行する際に誰もが一番不安に思うのは言葉だろう。しかしカンボジアでは観光地やホテルで働く人はもちろん、そこで商売をする多くの人が英語を話すことができる。そして日本人観光客が多いせいか、少しだけ日本語を話せるという人が多く見受けられた。ただし日本語を勉強したというわけではなく、商売で最低限使う日本語を覚えている感じだった。特に若い世代ならば大半は英語が話せるので、ある程度の意思疎通が可能だ。レストラン等の従業員も比較的若く、ローカルなお店では自分の子どもに通訳をさせる場面を何度か目にした。このようにカンボジアでは、現在外資系企業の参入や海外支援の影響により、現地語、英語、加えて何かしら第二外国語ができると就職が有利で賃金も上がると現地の方は話していた。

最後に、意志の強さである。戦後半世紀以上たった現在の日本では、戦争の記憶は風化し、歴史の一ページと化している。戦争の時代を生きた人はもうほとんど残っていない。一方で、

ベトナム・カンボジアの両国は戦争や内戦からまだ半世紀たっておらず、その爪痕はいまだに色濃く残っている。戦乱の時代を生きた人たち、まだ自分の親ぐらいの人たちだが、それぞれの人生を語ってくれたそこには、確固たる「生きる」という強い意志を感じた。日本語学校や孤児院でも、学びや将来の夢に対して強い意志を感じた。このように、社会に流され当たり前のように日常を送る日本人にはない、キラキラと輝いた強い意志と生への執着を彼らには感じた。

このように、現地に行くことで驚かされたことはまだまだたくさんある。私はこのツアーを通して、情報として知っていたことと実際に見ることには大きな差があることを実感した。急速に変化する世界情勢の中、本やネットニュースなどの媒体となって自分のところに情報が届くまでのタイムロスや偏った情報操作・発信、実際に目で見なければわからない、感じられないものが多くあることを実感した。まさに「百聞は一見に如かず」である。このツアーで得ることのできた、情報、経験、考え方や疑問、何より出会った人や仲間との繋がりを大切にして今後の人生を歩みたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援とは何だろう】

埼玉大学 教養学部 3 年生

本論文では、「本当の支援とは何だろう」という問いをテーマとし、カンボジアの「教育」に関して論じていきたい。その際、カンボジアの教育事情を踏まえながら、日本の教育支援の考え及び、実際にカンボジアで活動している日本の支援団体について述べていきたい。

カンボジアではポルポト政権下の時に、知識層が処刑され、教育、芸術、宗教などが廃止された。その影響で現在も、教員の数が少なく、また美術・音楽・体育といった情操教育は教えられていない。

教員の数が少ない上に、彼らは都市部に集中している。それは教員としての収入だけでは生活できず、他の仕事をして賄っている実情があるため、働き口が多くある都市部を希望する人が多いからだ。この事情から、農村部で教員になる人は少ない。

さらに、農村部で生活する人々は都市部で生活する人々よりも識字率が低く、教育に関して積極的ではない。そのため、義務教育である小学校・中学校でさえも中退者が少なくない。

こうしてカンボジア都市部と農村部で教育格差が広がってしまっている。カンボジアの上記のような教育事情があるためか、日本では積極的にカンボジアの農村部への教育支援が盛んである。「カンボジアに小学校を作ろう」、「カンボジアの子供たちに文房具を送ろう」といったスローガンを掲げたボランティア団体には、日本にいた時から多く目にしてきた。今までは、途上国の恵まれない子供たちのために支援をすることは評価されるものであると思ってきた。けれども、今回 JAPF のツアーに参加して、いろいろな場所を研修してみて、「はたして一方的な支援は評価されるものなのか」という疑問が生じた。なぜなら農村部に学校を作っても農村部に教員が少なく、通う子供たちも少ないため、学校運営が難しい。学校を作った当初は良いかもしれないが、継続的な支援なしでは、学校自体成り立たなくなる。文房具であっても、定期的に送られてくるならともかく、一時的に送るだけならば、意味のないことである。けれども日本からのこのような支援は後を絶えない。そこには日本人がもつ、「先進国から途上国へ、支援してあげよう」という一方的な支援の考えが浮かび上がる。けれどもそれは、本当に途上国のためになるのか、カンボジア自身の自立を促すことができるのか、といった問いには答えることができない。

また、今回、JICA、CIESF、JHP といった教育支援をしている団体のお話を聞き、実際にプノンペンにある孤児院や日本語学校、シェムリアップの農村部にある小学校を訪れた。現地にて、学校建設および情操教育の JHP、教員育成および私立学校の CIESF、教員派遣と教員育成の JICA、それぞれの団体に良さを実感し、それぞれの必要性を感じたが、お互いの連携が取れていないことを非常に残念に思った。これらの団体にのみならず、学校建設する団体―教員派遣する団体―教員育成する団体（―教育道具を支援する団体）はつながる必要性があり、お互いの活動内容の把握と、それに応じて自らの活動内容の見直しが必要だと考え

る。それは多重支援を防ぐためにも、本当に必要な支援を供給するためにも、必要な最重要課題であると考える。

以上から、本論文において、カンボジアの「教育」という側面に焦点を当てて考えた時、支援に対する考えに疑問を呈し、また具体的な教育支援に対する問題点を挙げた。今後もカンボジアの教育事情に目を配り、本論文の問いである「本当の支援とは何だろう」に対して、答えを出していきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【幸せに生きること】

東京学芸大学 教育学部 ２年生

12 日間、今の世界をよりよくしたいという高い志を持つ仲間と共に、ベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加できたことは、私の財産となった。この研修に参加して、「幸せに生きること」について、私が考えたことを述べたい。

私にとって、ベトナムとカンボジアのイメージは、発展途上で貧しい国、困っている人がたくさんいるというものだった。このような先入観をもったまま 2 か国に行ったのだが、実際に行ってみると、2 か国とも私の想像とは違い、町の中心部には建物が立ち並び、人々が生き生きと生活する、発展している国だった。様々な人と出会い、たくさん話をした 12 日間の研修の最後に考えたことは、「幸せに生きることとはどういうことだろうか。」ということだった。幸せとは、単に経済的に裕福な状態であることではないということを改めて感じた。経済的には豊かでなくても、叶えたい夢があり、一生懸命勉学に励むタヤマ日本語学校の学生たちは、幸せそうに見える。また、農村で農家の仕事を手伝う子どもたちが、両親の背中を見て、毎日の平和な暮らしを満足に感じているのならば、例え学校へ行く価値が分からなくても、それは幸せではないとは言えない。

しかし、幸せについて考えていた矢先、どうしても気になることがあった。私は、学校教育に携わる勉強をしているのだが、カンボジアでは、経済発展が著しい街では学校教育が進んでいるものの、農村部では教育設備も教育の重要性の認識もまだまだ不十分だった。小学校に入学しても、6 年間通い卒業する子、中学校へ進学する子は少なく、国からの教育資金は僅かである。シェムリアップの農村にある、バイヨン中学校で働くチア・ノルさんが、「農業で生計を立て、自分たちが暮らす農村の中だけで裕福ではなくても食べるものに困らない満ち足りた生活を送れるため、学校に通わなくても、親と一緒に農業をして暮らせば幸せなのではないかと考える保護者もいる。」とおっしゃっていた。様々な価値観が尊重されることは大切だ。学校に行く価値を理解できないという意見は、カンボジアだけでなく、日本にもある。しかし、私は、教育は全ての子どもたちに必要だと思う。幸せに生きるためには、教育が必要だと思うのだ。教育を受け、読み書きや基本的な知識を身に着けることが、善悪の判断ができ、社会の中で自立できる人間になることにつながると思うからだ。どんな子どもにも成長する力があり、次の段階に進める機会があることを知らせることが大切だと思う。日本でも、学校という教育機関が合わない子どもであれば、学校に行かなくてもよいが、その場合でも、違う形で教育を受けることが推奨されている。

幸せの定義は人によって様々だ。今ある状態を、満ち足りていて幸せだと感じる人がいる一方で、まだまだ高いレベルでの幸せをつかもうともがく人がいる。今回は、発展途上国と先進国を比べる形で気づいたのだが、このような幸せの感じ方は、個人の価値観によって異なると私は思う。私たちは、自分の価値観に当てはまる幸せを目指せばよいのであり、どん

な幸せの在り方も尊重されるべきだ。しかし、もし、発達期の子どもたちが、いろいろな価値観や生き方を知らないのであれば、教育を受けさせ、未来への選択肢をあげたい。機会が平等に与えられた上で、自分の生きる道を探せることが、幸せに生きることになるのではないだろうか。私は、教育の立場から、子どもたちに様々な生き方、考え方があることを教えたいという目標ができた。

最後に、引率の方や現地のガイドさんをはじめ、この研修を支えてくださった全ての人に、そして、心配しながら送り出してくれた家族に感謝したい。私には帰る場所や安心して話せる人がいる、そして叶えたい夢があるという幸せを改めて実感できた研修だった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアをみて】

専修大学 経済学部 3 年生

中学生のときから、カンボジアに行ってみたいという意志があった。それは映画(僕たちは世界を変えることができない)を見たのがきっかけだ。実際に映画の中の設定、同じ大学生になり、ある程度のお金を貯めることが出来るようになったため今回のツアーに参加した。自分の目でカンボジアの現状を確かめたい。という一心だった。

今回発展途上国と呼ばれる国に行ったのは初めてであった。何故カンボジアは発展途上国という名前が付くのだろう？アンコールワットという世界遺産や観光地として有名な場所があるのに。大学の講義や、ゼミナールで専攻している分野ではあったがカンボジアなどを発展途上国や、開発途上国などと呼んでいることに少しずつ疑問を持つようになった。どこかの国と比べた結果、カンボジアの方が経済活動が劣っているから発展途上国という名前がついたのだろう。先に言ってしまえば、この 8 日間でカンボジアが発展途上国と呼ばれる理由がわかった。それは、あるところには高い綺麗なビルがドンと建っているのに、ふと後ろを眺めて見たら小さな少し古い家や、屋台が建っていたり。建設途中のビルがたくさんあった。これはどこかの企業なのだろうか。これだけでは判断できないが、街中に走る自動車を見ると、バイクを走らせる人が多い中、高級車に乗ってる人々が稀にいた。ここで感じたのが、格差が激しいという現状だ。私たちは都市であるプノンペンにいたからかもしれないが、明らかに経済格差を感じた。私たちの普段の感覚でいくと、日本の中の首都は東京。だから東京には沢山の施設、建物、鉄道などがあるため経済活動が活発だ。というが、カンボジアは違った。日本と比べたらかなり劣っている。働いているのか働いてないのかわからない人や、ぼーっとハンモックに揺られてる人、バイクに乗っている人、話している人。しかし何故だろう。皆、幸せそうな笑みを浮かべているのだ。日本の都市では見られない風景かもしれない。働く人々は、険しい顔をして余裕がなさそうな何かに常に追われているような顔や態度を剥き出しにする日本人。カンボジア人は、心が豊かなのが伝わった。お金を持ちすぎると人は貪欲になる、競争心が出てくる。しかしこれは先進国だからこそできる事なのではないかと感じた。セカセカしていなくてゆったりしているカンボジア。しかしきっとこのままというわけにはいかないのだろう。

日本をはじめとする先進国は、カンボジアに対し物資を送るという支援をしていたりする。がここで感じたことは、物の送るだけではない、本当の支援って何だろう。という疑問。物を送って終わりではなく、人々の内面に寄添わなければ本当の支援とは言えないのではないかと思った。カンボジアの人々が本当に必要としているのは、何かをもっともっと考えなければならないのだと感じた。なんらかの支援で向上することもあるが、マイナスに働いてしまう可能性があることも考えていこうと感じた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【世界と自分とのつながり】

早稲田大学 文学部 ３年生

私は今回のツアーが始まるにあたって「世界と自分のつながりを考えられるようになる」という目標を立てた。そこで研修では漠然と話を聞くだけではなく、そこから見える社会の課題や自分とのつながりを意識するように心がけていた。

そこで気が付いたのは、ベトナムやカンボジアが抱える問題と日本が抱える問題の共通性である。歴史の伝承や平和教育、都市部と田舎部での医療格差や教育格差などベトナムやカンボジアの研修先で感じた社会の課題は、場所や状況に違いはあれど、根本的な所は日本とそう変わりはないのではないかと感じた。例えばカンボジアでは内戦や虐殺の事実をどう人々に伝承していくかが課題となっている。教育の場で歴史を伝えるのであれば、ある程度情報を切り取って伝えなければならない。ではその情報とはどの立場から誰が取捨選択して伝えていくのだろうか。これは日本も同様である。私たちが当たり前だと思って認識していた歴史には実は伝える側の何かしらの意図が反映されているかもしれない。日本の教育は情報を与えるのみで、そこに隠された様々な視点から物を考えることを教えていないのではないか。このようにカンボジアで感じた社会の課題を通して今まで自分が受けてきた教育に対して考えるきっかけともなった。

私はある人から「途上国でのスタディツアーやボランティアに参加したがる学生は多いが、まずは日本の問題を考えるのが先ではないか」と言われたことがある。しかしその考えには途上国の世界と自分たちの世界が分断されたものという認識が隠れているのではないか。私はそうは思わない。このツアーを通してベトナムやカンボジアが抱える社会に課題について考えることが出来たのと同時に、自分自身を取り巻く課題についても考えることができた。そして普段自分の暮らしている世界から一歩離れてみたからこそ気が付けることもあった。

そしてこのツアーでの最大の収穫は人との出会いである。ベトナムやカンボジアで出会った人々は私に様々なことを教え、考えさせてくれるきっかけになった。このツアーで多くの人の話をある意味客観的に聞くことが出来たからこそ、同じ物事に対してでも立場や視点の違いによって多様な価値観を生みだし得るということを何度も感じた。また様々な価値観や視点を持つメンバーと毎晩ディスカッションをすることによって考えさせられたことも多くある。このツアーで出会った全ての人との出会いが私の１２日間をより充実したものにしてくれた。

最後に私はこのツアーを経験してこれからも様々なことに興味のアンテナを張り巡らせたいと思うようになった。１２日間でたくさんの研修先を回ったが全てが独立しているのではなく点と点が一つの線になっているように感じた。例えば都市部と農村部の経済格差の裏には、急速な経済発展や教育格差や労働機会の差が隠れていたりと、様々な要素が複雑

に関係しあっている。だからこそこれからも一つの物事だけに目を向けるのではなく、一見関係がないと思われる分野に対しても貪欲に興味のアンテナを張り巡らせて、ジャンルを問わず自分の興味や関心のある事に積極的に関わっていきたいと思う。

【教育の重要性】

和光大学 現代人間学部 3 年生

中学生の時、映画「僕たちは世界を変えることができない」に出会った。この映画は当時の私にとって大きな衝撃を与え、目の前には全く別の世界が広がっていた。衝撃と同時に将来、絶対カンボジアに行き、自分の目と耳で感じると心に決めた。あれから数年たち大学生になった今、当時の決心に変化はなかった。JAPF のツアーの前に af SPLE という学生団体の「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」に参加し、カンボジアで運動会や図工、音楽などの情操教育を育む活動をした。その活動のなかで、今のカンボジアにとって本当に必要な支援とはなにか？そもそもカンボジアとはどういう国なのか？などの、疑問が残った。そして今回は、カンボジアの現状を多角的に見つめてみたいと思った時 JAPF を見つけ、これしかないと思いすぐに応募した。

12 日間の研修を通して一番強く感じたのは、教育の力は偉大だということだ。教育は、人を善にも悪にも導くことができ、時代や国までも構築していく力があり、明るい未来を子どもたちに作ることができる一方で、戦争や紛争、人々の可能性を潰し想像もつかないほどの深い悲しみを作ることができてしまうことを実感した。教育は光と闇の二面性を持ち、希望と恐怖を同時に感じた。

そんな中、どの研修先でも今後の課題として取り上げられていたのが「親の教育への理解」だ。多数の研修先で問題として挙がっていたのにもかかわらず、まだ実際に動いてい団体がなかった。教育面については問題が尽きないが、カンボジアでは教育が浸透していないため、学校が必要だとは思われていない。考える知識がないため、迷うこともないことが問題だ。

また、気を付けなければならないのは、一歩間違うと取り返しのつかないことも起きてしまうことだ。日本もカンボジアも子供を教育により洗脳し、国家の利益のため戦争に駆り出した過去がある。日本では子供に教育を受けさせることに違和感や疑問を抱くことなく、当たり前のこととして学校に通わせている。なので、私もカンボジアに来てみてこのような問題に直面していることに驚き、あらためて教育の可能性と重要性を感じた。

教育は、人々が生活していく上で必要な知識を還元してより生活を豊かにさせるものだ。他にも、子どもたちの将来の幅が広がり、集団の中で学ぶこともある。さらには、歴史や情操教育を学ぶことは子どもたちの心まで成長させてくれるが、カンボジアは歴史教育に無関心で、ポル・ポト政権の歴史を子どもたちがかわいそうだからと教えていない学校が多く、体育も日本の指導案をカンボジアに持ち込んだものの、器具がなく、あっても使い方が分からない、修理の仕方が分からないなどの問題から放置されていた。現在のカンボジアは、ポル・ポト政権の知識人の大量虐殺の名残から親世代が全く教育を受けられていない。しかし、人々は教育がなくても幸せに暮らしている。生きていくために十分な

食料と水、経済的に豊かではないが、日本人の私たちから見ても、十分豊かな環境で生活を送っていた。子どもたちは学校に行きたくても生きていくために、仕事を優先していた。それは、人々は何十年後かの将来より、明日を生きていくこと想像しているからだ。よって、仕事を学校よりも遊びよりも優先しなくてはならない状況だった。もちろん生活面で何の問題もないというわけではない、生活環境での問題はあった。

孤児院や、CIESF、ゴミ山、バイオン中学校、教育現場でその声は上がっていたが、また教育は戦争の廃止や HIV 感染を食い止めることにも繋がる。しかし、この問題を解決するには人々の価値観を変えていかなければならない。簡単にできることではないが、今は生活に困っていないとしても、いい会社に入ることが目標じゃないにしても、生活の知恵を増やすツールとして教育を長期的な目で見て浸透させていくべきだと思った。

最後の、最初に定義した今のカンボジアに必要な教育はなにかという疑問への答えは、もちろんどの分野の授業も必要だ。初めは情操教育よりもやらなくてはならないことがあるとずっと思っていた。しかし、現在のカンボジアの多くの学校は 2 部制で、ほぼやっつけのような授業だ。だからこそ情操境域を通してまずは、学校の楽しさを知ってほしい。学校は楽しいところだと感じてほしいと思うようになった。

また、支援の難しさも改めて感じた。物資の支援は必要であり重要だと思うが、自立を目指すのであれば、物資の使いかた、作り方を教授し、地元の人々だけで使えるようにならないと意味がない。言葉も価値観も違う中で伝えていくのは難しいが強く思えばいつかは伝わるというのも、今回の研修で訪れた、日本人で起業された方のお話から感じた。

今回の研修から多くの事を学び、刺激を受けた。まだまだたくさんの問題があった。しかし、カンボジア人の温かさや優しさを残したまま成長していってほしいと、勝手ながら感じた。今回は、教育を取り上げたが、HIV やカンボジア国家、過去の歴史との向き合い方を今後も考えていきたい。カンボジアの人々を見て、経済発展することが豊かな社会という考えを翻された。これからのカンボジアが楽しみになった。

最後に、このツアーに参加し、毎日新しいことを吸収し、ディスカッションで仲間と共有しまた新たな発見があった。心から学ぶことの楽しさを感じた。さらに、かけがえのない仲間との出会い、今後の人生についてもたくさん感じ、考えられた。引率をしてくれた河合くんと香月さん、ガイドさんには感謝してもしきれない。この 12 日間を無駄にしないためにもこれからも頑張っていきたいと強く思えた。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【東南アジアと私の距離】

早稲田大学 文化構想学部 ２年生

「何一つだって知らなかった」このツアーを通して感じたことを端的に集約するとしたら、この一文は私が言いたいことの全てを包含している。元々東南アジアの文化に触れる機会が無かったこともあり、東南アジアについて今までそれほどの関心を抱いてこなかった。しかし人生のモラトリアム期である大学生活において、見ておけるものは全てみておきたいし、色々な刺激を受けて様々な人に出会いたい。たったこれだけの理由でツアーに参加した。ところがどうだろう、このツアーを終えた今東南アジアの魅力に魅せられて、東南アジアが大好きでたまらない。新聞やテレビ番組などで東南アジア、勿論特にこのツアーで訪れたベトナム・カンボジアに関する事象を取り上げているものを目にするとどうも食いついてしまう。なぜ私はここまでの気持ちの変化が起きたのであろう。

その理由の一つとしてこのツアーを参加するにあたってベトナムやカンボジアが歩んできた道のりや日本を含めた他の国とどのように関わり機能しているかなどをそれぞれの研修先で深く知り、それをあらゆる見方から思考しようとしたからであると思う。正直、ベトナムやカンボジアを訪れる前までは二か国とも私の世界から見ればどんな国であるかも全く知らない未知の領域であり、遠い存在であった。しかし平和分野や医療分野社会分野など様々な分野の研修先を通してベトナムやカンボジアという国は一体どのような国であるのかという事を深く知り、今まで自分から遠い存在であったものが一気に身近なもののとなった。また今まではこんなにも一つの国に対して焦点を当て、かつその国を色々な立場の考え方から捉えようとしたことは一度もなく、自分の目の前にある情報だけをそのまま取り込んでいた。しかしこのツアーを通して、今までは何も思わなかったことに関して疑問や矛盾を感じるようになり、それを自身の見方や考え方だけでなく新たな方向から捉えた。ベトナムやカンボジアの人達と各所で触れ合う度に、自分の勝手な思い込みや先入観とその人たちの国が抱える課題に対する考え方や感じ方が大きく異なっていたことにも気づいた。様々な視点からベトナムやカンボジアを見ることによって、より深くこの二か国のことについて知ることができ、より身近に感じられるようになった。

もう一つはベトナム・カンボジアという国で新たな出会いがたくさんあったことであると思う。TAYAMA 日本語学校で出会った同年代の生徒さんたちとの出会いは特に刺激を与えてくれた。まずもってカンボジアという異国において、「日本で働きたい」や「日本語を使った職業に就きたい」などの夢をもって、日本に興味関心をもち、勉学に励んでいる人達があんなにも多くいることを知らなかった。それと同時に彼等の勉学に対する向き合い方にも感嘆した。私たちが日本の文化についてプレゼンテーションを行った際には、そのプレゼン内容を食い入るようにして耳を傾けて聞いてくれ、それに関するたくさんの質問をしてくれた。彼らが日本語を学び、日本の歌を歌ってくれることに母国の人間として純粋に嬉し

さを感じた。また逆に私も彼らの国、カンボジアの事をもっと知りたいと思うようになった。どこの誰かもわからない日本人のプレゼンテーションをこんなにも真剣に聞いてくれ、受け入れてくれる彼らの人柄にも心を強く惹かれた。「またカンボジアに絶対に来てね。」一人の女の子が私に日本語でこう伝えてくれた。たった数時間しか出会わなかったもう二度と会わないであろう異国人にかけてくれた何気ない一言がどうしようもなく嬉しく、必ずもう一度カンボジアを訪れようと思った。この他にも孤児院で風船をプレゼントしてくれた子どもや英語で自分の夢を語りクメール語の指導もしてくれたレストランのウェイターのお兄さんなど、研修の中での一つ一つの出会いが自分自身の心の中に深く刻まれている。やはり何よりもベトナム、カンボジアで出会った人々のたくさんの笑顔に魅力を感じ、その人々の温かさに惹きつけられたのだと思う。

冒頭にも述べたように私は何も知らなかった。ベトナムとカンボジアの歴史や国の情勢はもちろんのこと、自身がベトナムやカンボジアはこうであろうと勝手に想像していた部分があったこと。そしてこんなにも温かく私たちを受け入れてくれる人たちを知ることができたこと。一つ一つ言い出したらきりがないがない程、自分の知らないことが多すぎることに気づけたツアーであった。ベトナムやカンボジアを様々な側面から見てまわることで、街並みを歩くだけでは気づかされなかったものや人を知ることができた。またそのおかげで東南アジアのことを大好きになれたのだと思う。もちろん私が今回見聞きしたのはほんの一側面にしか過ぎない。しかし、百聞は一見に如かず。自分の足で訪れ、見てみること感じることはやはりものすごく大切なことであるし、無知のまま一つの概念からしか物事を考えないことはよくないという事を学ぶことができた。またこのツアーを通して今まで私が当たり前に過ごしていた日常生活や価値観、考え方の全てが一つも当たり前ではないということを実感できた。このツアーに参加し、無事に帰国ができたのも当然のことではない。このツアーにおいて体調管理を含め、細かく気配りをしてくれた引率の方々や常に一緒にいて様々な注意喚起をして私たちを助けてくれたガイドさん、前提として普段から学費を払ってくれている親。周りの人達のたくさんの助けによってこのツアーに参加して無事に帰ってくることができた。様々な経験ができたのも周りの皆さんのおかげであることは決して心から忘れずに、このツアーで得たものを自分の糧として自分自身のさらなる飛躍へと還元できるように日々努力していきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【発展途上国の子供たち】

中央大学 文学部 2 年

今回のツアーは様々な面から教育現場や子供とふれあう機会が多かったと思う。私は純粋に子供が好きだ。以前別のスタディツアーでインドネシアに行き、現地の子供たちに日本の文化についての授業をしたことがある。それがきっかけで発展途上国における教育や子供に興味が湧き、このツアーに参加しようと思った要因にもなった。今回のツアーでは教育という面からみると、TAYAMA 日本語学校、プノンペン王立大学、クロサートメイ孤児院や農村の学校が挙げられる。しかしそれだけではなく、実際に現地で学校を作ったり、教育に対する支援を行なっている日本人側からの視点としての JHP や JICA プノンペン事務所。他にも障がい者としての立場であるツーズー病院平和村。あるいはバスに乗っている私達に手を振ってくれた子供たちや、マーケットで物乞いをする幼い子などあらゆる視点からたくさんの現地の生の子供や教育現場を見ることができた。

そしてどの研修先でも共通して言えることは、私達は訪問させてもらっている側にも関わらず、どの研修先の子供でも学生でも歓迎してくれることだ。話しかけたり一緒に遊んでいると、障害も言語も超えられるような笑顔で返してくれる。この子供たちの背景には、戦争による被害に苦しんでいる子、両親のいない子、貧しさのため教育を受けられない子など様々な問題が隠れている。しかし、どの国であろうと子供であることに変わりはない。私達は、勝手な固定概念で可哀想な子だとか、貧しい子だとか決めつけてしまっている。本当に豊かなのは、幸せなのは日本のような先進国なのだろうか。見ず知らずの人を笑顔で迎えてくれる子供たちの心を私は貧しいとは思わない。物質的豊かさと精神的豊かさどちらが本当に幸せで、子供に必要なのは何なのか。私はベトナムやカンボジアの子供たちを考えると同時に、自分の国はどうなのか考えるきっかけにもなったと思う。

そしてたくさんの研修先の中でも特に私が 1 番印象に残っているのはクロサートメイ孤児院だ。今まで孤児院という所にすら行ったことがなかった。しかし到着するとすぐになんの疑いもなく笑顔を向けて、手を繋いできて、抱きついてきた。それがとても嬉しくて、こんなに良い子どもたちに両親がいないと思うと心苦しくなった。今まで当たり前に親や兄弟がいて、教育を受けて、何の不自由もなく育ってきた自分と比べると、なぜこんなにも世の中は不平等なのかと悲しくなった。一緒に遊んだりご飯を食べていて、日本の子供となにも変わらないじゃないかと思った。しかし、帰る時にある私の友達が子供たちに飴の袋をあげた時だった。さっきまでみんなで楽しく遊んでいたのに急に飴の奪い合いや喧嘩が起きた。そして飴を手に入れた子は隠すように急いでポケットに入れた。もちろんもらった人への感謝の言葉も一切ない。私は最初何が起きたのか分からなかった。しかし、この子たちはこうやって今まで生きてきたのだとすぐに理解できた。世界には一日一日を生きていくことで精一杯な子どもがたくさんいる。その現実を突きつけられた気がした。この子供たちが

悪い訳ではない。これが発展途上国の現実だと思った。今までそのような環境に居たことがなかった分、衝撃が大きかった。世界で何が起きているのか、知っているようで何も分かっていない。知識としてしか知らず、本当の現状を目の当たりにして初めて理解した。

今回のツアーでは様々な分野から発展途上国の抱えている問題と向き合い、ディスカッションをし理解を深めることができた。参加者それぞれの体験をもとに、たくさんの人と意見を交換したり、経験を共有することで自分に欠けている物の見方や考え方を取り入れることができたと思う。そして自分の知らない世界や現実はまだまだ存在していて、どんな問題を抱えて何が起きているのか知らなければいけないと強く思った。自分の目で見て感じて、学び、考えなければいけない。このツアーを通して今後の自分のやりたいことや課題も見つけることができたと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【何を感じるか？自分とは？】

明治大学 理工学部 3 年生

まず、私がこのインターンシップに参加した理由は、自分が本当に海外ボランティア、NGO、NPO に興味があるのか、また、就職活動をすると考えたとき自分が人と異なる点、長所、短所を確認するためであった。もちろん、ベトナムとカンボジアの現状を自分の目で実際に確認したい気持ちもあった。まず、様々な研修先を訪れて、それぞれの研修先で自分の全く知らない世界のことを幅広く学ぶことができてよかった。研修先の中で、ツーズー平和村、シハヌーク病院 HIV 病棟は、内容的にハードであり、強く印象に残るものがある。

両者とも入院している人に会い、お見舞いをするまたは交流するというものであった。ツーズー平和村での奇形、障害のある子供たちとの触れ合いは、最初少し戸惑ってしまったが、一度目を合わせて挨拶をして笑いあえばたとえ言葉が通じなくても心で会話することができた。HIV の患者さんとは残念ながら話すことはできなかった。この両者で、共通して印象に残っているのは、看護師さん、または患者さんの家族の視線である。個人的な意見だが、とても冷たい視線を感じた。その背景には、平和村や HIV 病棟が一つの観光スポットになってしまっているということがあるのではないだろうか？自分も訪れていて、自分が何様で見学しているのか？自分は何もできないのに見学する意味はあるのか？なにか珍しいものとして患者さんを見ていないか？という疑問が出てきて、自分たちの行動に対して否定的に考えてしまった。ドクさんに質問できる機会があったので、そのことについて聞いたが、通訳さんとうまくかみ合わず質問の意図が伝わらなかった。一つ思うことは、観光スポットにしてしまうのかどうかは見学する側の気持ち次第であると思った。このような場所を訪れて、何を感じることができるのか？患者さんに対する尊敬をもてるか？感じたことをどう活かすか？これに限ると思う。自分としては、できる限り多くの人に自分の感じたことを伝えることから始めたいと思う。

ほかにも、様々な研修先を訪れて貴重な経験をし、考えを広げることができた。ここからは、自分とは？について今回の研修でわかったことを述べる。第一に、自分は今、理工学部に所属しているがやはりその分野よりも海外、ボランティア系への思いが強いと感じた。JICA で話をしてくれた小島さんも工学部出身ということもあり道を絞らずに視野を広くいこうと思った。また、ディスカッション等で自分の知らないことに対しても、何かしらヒントを見出して分かるふりをすることが得意ということに気が付いた。一つ新しい自分の発見ができたと思う。これに、更に知識を付けていけるように、本を積極的に読もうと思った。カンボジアの日本語学校の子供たちのように学ぶ姿勢を忘れずに、意識高く学習したい。今回の研修で、本当に多くのことを学び、自分を見直すことができた。最後に、無事にすべての研修が終わり帰国できたのは、引率の方々、現地のスタッフ、JAPF の全スタッフ、全員の協力のおかげです。この度は、本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア・ベトナムでの出会い】

早稲田大学 文学部 3 年生

１２日間のベトナム・カンボジア研修は、今までの人生の中で一番充実した日々だった。初めて行く東南アジアで初対面の人たちとともに生活をし、毎日新しいことを学び考えるということは、全てがわたしにとって初めての経験であり、不安と緊張を抱えながらのスタートとなった。今思い返すと、そのような不安や緊張は早々に消えてしまうほど、毎日素晴らしい仲間たちと一生懸命学ぶことに夢中になっており、あっという間の１２日間であった。この研修を通して、ベトナムとカンボジアが抱える悲惨な戦争の過去・発展途上国であるカンボジアの現状・教育の課題・日本の支援のあり方など、様々な分野について学び、ディスカッションを通して深く考えた。学んだこと、考えたことは膨大であるが、本論では全ての研修を通して実感した人との出会いの素晴らしさについて述べたい。

カンボジアの研修では、TAYAMA 日本語学校や CCH 孤児院、農村、市場、レストランなど、毎日現地の人との新しい出会いがありとても刺激的だった。特に、TAYAMA 日本語学校や CCH 孤児院での子どもたちとの交流は印象深い。日本語学校では、カンボジアの学生たちの日本語を学ぶ意欲や姿勢、礼儀正しさに驚かされ、なにより学校で学ぶことを心から楽しんでいる様子が彼らから見て取れた。私たちの日本文化についての発表では真剣に聞いて楽しんでくれているのが伝わってきたし、そのあとの交流では彼らが将来日本で働きたいと思ていることや、日本が大好きだということを熱心に話してくれて、私は彼らを素晴らしいと思った。私は今、上京し私立大学に通っているが、それを当たり前のことと考え、大学に通えていることへの感謝や学ぶ意欲、将来に対する夢を忘れかけていることに気づかされた。CCH 孤児院での研修では、想像していた孤児のイメージとは違う元気で活発な子どもたちに出会い、彼らと遊びまわった。私は、腕にしがみついて離れない９歳の女の子と仲良くなったのだが、彼女が描いてくれた絵にはカンボジアの国旗と日本の国旗、そして私の似顔絵が描かれており、言葉が通じなくても心を通わせることができることを実感し、数時間の出会いであっても私のことを必要としてくれていることの嬉しさを知った。彼らとの出会いは一期一会なのかもしれないが、たった数時間の交流でも心を通わせ、絆を深めることができる。今まで気づき得なかった感情に気づかせてくれた彼らに感謝し、この感謝を忘れず将来何らかのかたちで彼らの幸せに貢献したいと思う。

今回、様々な分野の研修を通じて実感したことは、カンボジアが今後発展し今よりもより良い環境をつくるためには、全ての分野において「教育」が重要であるということである。孤児院を訪れてトイレや悪臭、散乱したゴミなどの不衛生な悪環境を目の当たりにし、学校を建てるなどのハード面の支援だけでなく、学校の環境を整えたり教育の内容を充実させたりするなどの長期的なソフト面での支援も重要課題であると感じた。現在も JICA や様々な民間団体がカンボジアの教育現場の設立や整備にかなりの支援をしているが、日本にと

ってもカンボジアにとってもメリットのある、お互い成長できるような支援の仕方を模索することが大切である。

また、カンボジアが今後何世代か後に、他の東南アジアの新興国と同じように産業やインフラが発展し、経済成長を遂げるという大きな可能性も感じた。今後日本のグローバル企業がますます新興国に進出することが見込まれるが、その際私たちは、まず現地のことを好きになり、現地の人と触れ合い、彼らの文化を理解し尊重するということを大切にしなければならない。その国にしかできないこと、日本にしかできないことを発見し、日本ができることを一方的に教えるのではなく伝える・託すという姿勢を大切に、お互いより良い長期的な関係を築いていきたい。これはどの国に対しても共通して言えることだが、カンボジアと日本ならそういった関係が築けるだろうと、現地の人たちと実際に触れあってそう感じた。

今回の研修で素晴らしい仲間たちに出会い、毎日新しいことを全力で学び吸収し、最高の思い出を作れたことを誇りに思う。

この研修を通して抱いた感情や興味、自分の信念を、将来に生かしたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

専修大学 経済学部 ３年生

私がカンボジアに行こうと思ったきっかけは「僕たちは世界を変えることができない」という映画を見たからだ。高校時代に何気なく見た作品だったがとても印象的なものだった。また、私は事前にあまり情報を入れずにその地域で感じるものを大切にしたかったのでアンコールワットくらいしか知らなかった。

まず私は海外に行くのが初めてだったので長時間のフライトがつらかった。いざカンボジアに到着するとあいにくの雨であまりテンションが上がらなかったことが頭の中に残っている。そこからレストランに移動しはじめてのカンボジアでのご飯を食べたわけだが正直あまりおいしくなかった。「食」は行く前から期待していなかったが想像していたよりもきつかった。元からおなかの弱いので毎日カンボジアでは朝トイレにこもっていた。また、トイレやシャワー、交通設備がどれだけ日本が整っていてすばらしい環境で暮らしているのかを初日で痛感した。よって、初日はカンボジアの人は貧しい中で大変な暮らしをしているのかと想像してしまった。しかし、それは間違っていた。カンボジアの人々は笑顔があふれていた。会う人会う人が笑顔で話してくれる。日本では
ありえないことだ。生活環境やお金を持っていること以外の「豊かさ」、「しあわせ」というものを感じることができたし「豊かさ」、「しあわせ」の意味を勝手に決めつけていた自分が恥ずかしくなった。また、私が印象に残っているのはＴＡＹＡＭＡ日本語学校だ。ついた途端に日本語学校の生徒の大きな挨拶に驚いた。そのあとの日本の良いところの発表をするために教室に入るとものすごい拍手と歓声に包まれた。あそこまでの完成を受けたのは初めてかもしれない。生徒さん達は私たちの話を熱心に聞いてくれてたくさんの質問もしてくれた。日本人にはない自分の学びたいことに対する積極性を感じた。私もこのくらいやりたいことに貪欲になりたいと思った。日本語学校の生徒には挨拶、礼儀正しさの大切さを再確認させられた。また、ここでもみんなの笑顔を見てとても元気をもらった。

最後にこのツアーに参加してよかったことはカンボジアに興味があるということでしか繋がりがなかった一緒に参加した学生たちとであえたことだ。普段は全く違う場所に住んでいて学力も全く違う人達とも様々な意見を言い合い仲良くなれたこと。もちろん今回カンボジアのツアーに参加したこと。この出会い、この経験は必ず今後の人生の糧になると思う。また引率の方々、ＪＡＰＦのスタッフ、いろいろ迷惑をかけましたが本当に感謝しています。一週間お世話になりました、ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修を終えて】

神戸学院大学 現代社会学部 3 年生

私は大学で社会学を専攻しており、講義のなかで国際関係学や東南アジアに関する研究などを学んでいた。それらを通して得た知識が実際の現状と合っているのか、それともギャップがあるのか、学んだ観点で見たカンボジアと自分の価値観で見たカンボジアの差異を確かめたいと思い、今回このカンボジアスタディーツアーに参加した。
結論としては学んだことと現状に違いはあった。しかし、知識があったからこそ多くのものを学ぶことができた。大学で学んだことを生かしきれていると感じたこともあった。

まず、強くそれらを感じたことは日本人の価値観とカンボジア人の価値観の違いから生じる質問の意図をガイドの方が理解することができずに質疑応答が滞っているということを察することができたことだ。孤児院に訪問し、「卒業した子たちは将来どうなっているのか」という質問があった。質問の意図としてはどのような仕事に就いているのかについて質問者は訊きたかったのであろうが、返答は違った方向のものだった。ある程度社会、経済が安定している日本とまだまだ新興国であり急な成長を続け社会が不安定なカンボジアでは学校を卒業したから仕事にありつけるといった様な常識の食い違いが起きていたのだ。一日の終わりに書く交換日記にこのことを書いた際、引率者に「独特な視点」とコメントをもらったため参加者みんなとは違った視点で状況を見れているのだと感じた。

次に、「日常を非日常にしているのは外部だ」といった言葉を講義で聞いたことがあった。この言葉の真意を確かめることができた。カンボジアでは一部ペットボトルを使用したものを洗浄し、もう一度使いまわしているのだが、私たち日本人はある程度きれいなものだけを再利用し、汚いものは捨てているものだと思っていた。しかし、ごみ山を訪問した際、生ごみを家畜の餌として売るため、素手で生ごみの山を掻き分けているのを目にした。この時点で私たちにとってはごみ山がかなり汚いといったイメージが固まってしまっている。そうした中、ペットボトルだけが入ったビニール袋を見つけた。それらも当然汚いものであれをそのまま利用するわけがないと思っていたが、尋ねると使うと返答された。私たちはもちろん驚きを隠せなかったが、ガイドは私たちがそのまま使うのではと勘違いしていると思い弁解した、「もちろん洗浄しますよ」と。しかし私たちにとってそういった問題ではなかった。ここでガイドの人たちもこれが外国では普通のことではないと気づかされたのだと推察する。他にもストリートチルドレンがいることやカンボジアの平均月収 2~3 ドルが世界的に見て低いといったことなど私たちと接することで改めて日本では普通ではないことなのだということを感じたと思う。日本から来た学生たちにあったことでカンボジアでは当たり前な日常が外では非日常なのだと感じさせられる、逆もまた然りなのだ。研修を通して様々なことを感じ、学ぶことができた。

最後に、普段感じることができていなかった学んでいることが身になっているのを実感し実践できる場にもなった。引率の方、現地ガイド、スタッフの皆さんに感謝します。ありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

北九州市立大学 文学部 ３年生

私がカンボジアを訪れて最も印象に残っていることは、カンボジアの人々のあたたかい笑顔である。日本を出発する前、カンボジアは東南アジアの中でも発展は遅いほうであると聞いており、カンボジアの人々は貧しい生活をしていて、その表情は暗いのではないかと私は想像していた。しかし、実際にカンボジアを訪れてみると、たしかに、日本と比較すると物資等は少ないかもしれないがこの生活を貧しいといえるのかと疑問に感じるほど、カンボジアの人々の笑顔は輝いていた。このように感じた印象的な場面として２つが挙げられる。

１つめは、農村での生活の視察である。農村では自給自足、電気も基本は乾電池を使用するといった生活用品が十分に足りているとは言いがたい生活であった。この状況をただ聞いただけだと、カンボジアの人々は貧しい生活をしており、幸せではないと感じてしまうかもしれない。少なくとも、このスタディーツアーに参加する前の私だったらそのように感じていただろう。しかし、実際に人々の様子を見てみると、人々の表情は生き生きとしていた。私は、幸せではないと考えていた自分の考えの浅はかさを思い知った。そして、十分にそろった生活用品だけではなく、インターネットやＳＮＳといった発展しているが故に存在するストレス因子に囲まれた生活をしている私たちのほうがむしろ幸せとは言いがたいのではないかと感じた。このことから、何が“幸せ”なのか、“幸せ”の定義は１つではないということを思い知らされた。

２つめは日本語学校での生徒の方々との交流である。日本語学校の生徒の方々は皆、学ぶということに対して貪欲で、知識を得ることに対して純粋に喜んでおり、その表情は本当に素敵であった。私たちのプレゼンに対しても、次から次に質問をしてくださり、その勢いに圧倒されてしまうほどであった。それと同時に、この日本語学校にいる方々よりもはるかに恵まれた環境で学ぶことができているにも関わらず、自分は学ぶということに対し貪欲で真剣に取り組んでいただろうか、知識を得ることに対して喜びを感じることを忘れてはいなかっただろうかと考えさせられた。当たり前だと思っていた環境が当たり前ではないこともあるということを、頭では分かっているつもりでも本当の意味で理解をしていなかったのではないだろうかと感じた。

私たちは、何１つ不自由なく暮らしているように感じていたが、それは物質的な部分であって、幸せとは物が満ち足りている状態だけではないということを今回のスタディーツアーを通して感じた。これから急速に発展していくだろうカンボジアの今後がとても楽しみだが、今の素敵なあたたかい笑顔はいつまでもなくならないでほしいと思う。

【カンボジアで感じたこと】

北九州市立大学 外国語学部 ２年生

ただの旅行じゃなくて何か目的をもって海外に行こうと思って今回の JAPF のスタディーツアーに参加したのだが、思った以上にさまざまなことを学び、充実した１週間を過ごすことができた。

僕が一番感じた日本との違いは、人柄である。カンボジア人は日本人とは違ってみんな楽しそうだった。マーケットの人も、レストランの人も、ガイドさんも、ホテルの従業員さんも、ただ道を歩いているだけの人でさえも、みんなフレンドリーに接してくれたし、手を振ってくれたりもした。本当にみんな穏やかで温かい人達ばかりだと思った。だから、カンボジアにいる期間はすごく時間がゆっくり過ぎている気がしたし、日本にいるときよりすごく平和に感じた。カンボジアは孤児がいるし、ゴミ山で生活する人もいるし、悲しい歴史を経験してもいる。それを聞くと明らかに日本の方が平和だ。しかし、医療、財政、環境、政治的なことなどに関しては日本のほうが豊かなのかもしれないが、一人一人の心はカンボジア人のほうが豊かなのではないかと思う。本当の豊かさが何かとか考えても答えが出ることではないと思うが、日本人がカンボジアは発展途上国だからかわいそうだとか、発展途上国だから日本の方が豊かだとか思うのは間違っている。発展途上国であってもカンボジアの人々は、先進国である日本の人々より幸せそうに見えるのだ。人それぞれの豊かさがあり、それは誰かに干渉されるものでもない。だから勝手に孤児だからかわいそうとか、お金なくてかわいそうとか、そういうふうに考えるのはもうやめようと思った。

今回のスタディーツアーで、たくさん学ぶことがあったし、たくさんの出会いもあった。日本のいろんなところに友達もできた。本当に楽しくて充実した一週間を過ごせたと思う。話を聞くだけでなく、現地に行って学ぶことの大切さも感じた。最初のカンボジアのイメージとは全く違ったからである。このスタディーツアーで感じたことが少しかもしれないがこれからの人生に何か影響を与えてくれた気がする。本当に参加してよかった。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【彼らから学んだこと】

鹿児島大学 法文学部 2 年生

「どうしてわざわざあのカンボジアに行くの？」私はこの質問を何度も家族や多くの友人にされた。彼らの思う“あのカンボジア”とはどのような国なのだろうか。一概に述べることはできないが少なくとも多くの日本人はカンボジアという国に対して紛争、地雷、貧困、孤児など負のイメージを抱いているだろう。確かに私もこの研修に参加するまではそうであった。「貧しくて危険な可哀想な国」そう思いながらも「私には一生関係のない国」だと思っていた。そんな私が発展途上国に興味をもったきっかけは大学一年生のある男性との出会いだった。その方はバングラデシュの多くのストリートチルドレンに学びの場を提供しようと学校を設立されて活動していた。その方とお会いした時に「なんて綺麗な目をしているのだろう。この方を発展途上国の何がこんなに輝かせているのだろう。」と非常に不思議に思った。それから私は発展途上国に興味を持ち実際に発展途上国に行く機会を図っていたところ、大学の授業で先輩がこのツアーのことを紹介してくださり私はすぐに参加することを決めた。参加することを決めてからベトナム、カンボジアへの出発まではあっという間だった。

ベトナム、カンボジアは私が想像していた以上に活気があった。そして常に何かしらの気づきや学びを得ることができた。移動中のバスの中でさえもだ。特にインフラ整備不足には驚かされた。例えば日本の電線はまっすぐに張られているがベトナム、カンボジアの電線は量が多すぎるために重さに耐えきれず電線が大きく曲がっていた。また交通整備が完全にはされておらず、信号を無視して走る運転手も多かった。この国には交通規制をする警察官はいないのかと思い、 道端に目を向けるといたるところに警察官がいた。しかし彼らは取り締まることなど一切せず、談笑しているだけであった。この状況を見て初めて警察が機能していないことの恐ろしさを体感した。私の当たり前は当たり前ではない。改めてこのことを実感した。

このツアーで得た多くの学びの中で特に印象に残っていることは教育の大切さだ。「教育を受けるのは当たり前、学校に通って当たり前」ここでも私の当たり前は当たり前ではなかった。カンボジアの子供たちは学びたくても学べず、十分な知識を持つことができないまま大人となり、自分の子供に教育を受けさせようとしない。その一方でこの現状を変えようとしている人たちも大勢いるということも知った。実際にお会いして、やはり彼らの目は大学一年生の時にお会いした方と同じように輝いていた。そしてこの輝きはカンボジアの人たちの目の中にもあった。私たちからすれば彼らは決して豊かではないが夢や希望を持っていた。ゴミ山で生活している子供ですら夢を私たちに話してくれた。だからこそどのような境遇に置かれても目が輝いているのだ。実際に現地に行ったからこそこれらを知ることができた。

このツアーを紹介してくださった先輩をはじめ、反対しながらも行くことを許してくれた両親、助け合いながら共に熱い日々を過ごした仲間、そして親身になってくださったガイドさんや引率の方々に心から感謝している。ぜひこのツアーを多くの人に知ってもらいたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【本当の支援とは】

北九州市立大学 文学部 1 年

私はこの研修に参加して学んだこと、感じたこと、考えたことがたくさんある。おそらくたくさんという言葉では言い表せない。それほど多くのことを学び、感じ、考えた。

『本当の支援とは何か』。この研修に参加したからこそこの言葉の本当の意味を理解することができた気がする。単に支援といっても目的、対象、手段などは様々で、先進国によって為される支援全てが途上国にとって本当の“支援”となっているかというと、決してそうではなかった。支援とは力添えをして助けることであって、全てを与えることではないのである。実際、日本を含む先進国の途上国に対する支援は、インフラ整備や学校建設、教育資材の送付など、短期的、物質的な支援が大部分を占めており、教育者の育成や農作物栽培のノウハウの伝授など、長期的、技術的支援が少ない。私は、研修先の CIESF で学んだ「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える」という理念は、今まさに先進国が学ぶべき理念であると思った。しかし、変わるべきなのは支援過剰になってしまっている先進国だけでなく、先進国からの支援に頼りすぎている途上国もである。特にカンボジアは、過去の悲惨な歴史の名残もあって、教育分野に関して改善すべき点が多い。都市部と農村部での経済格差、ゴミ山や生活環境の衛生的な問題など、これから先カンボジアが抱える様々な諸問題を解決していくためにも、次世代を担う子供達の教育環境を整えることが大切であると身に沁みて感じた。

たまたま学校で見かけた一枚のポスターをきっかけに参加した 12 日間の研修だったが、普段考えもしなかったようなことに目を向け、普段友達とは話さないような話題について様々な人とディスカッションするなど、いろんな面で自分を成長させることができた。この経験を生かすも殺すも自分次第なので、これから先も色々なことに積極的にチャレンジし続けて自分自身を成長させていきたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【研修を通じて学んだこと】

北九州市立大学 文学部 2 年生

大学構内に貼られた研修のポスターを見て、参加したいという強い思いが自分の中に駆け巡り、飛びついた。その背景には、以前より国際情勢や協力に興味があり、そこで済ませてしまっている口先だけの自分がいた。興味はあるのに、自ら進んで国際情勢について深く勉強しようとすることはなく、何か行動を起こそうとすることもなかった。今まで先進国にしか行ったことのなかった私にとって、東南アジアで様々な分野の研修ができるこの機会は魅力的で、絶好のチャンスに思えた。

しかしベトナムとカンボジアのいずれに関しても事前に詳しい知識は持っておらず、実際に足を運んでみると、良い意味でも悪い意味でも、自分の予想を上回る現状に衝撃を受けることが多かった。ベトナムでは、街中を見てみると比較的きちんと整っており、ヨーロッパの街並みと類似しているようにも思えた。行き交う人々の中にも欧米系の外国人の姿を見かけることが多く、予想以上にベトナムが発展していることに驚いた。一方カンボジアでは、道路がきちんと整備されている所は少なく、街並みもあまり綺麗ではない。隣国なのにベトナムとカンボジアでなぜこんなに違うのか、という疑問の元、カンボジアでの研修でその原因を探る上で、2 つの大きな学びがあった。

1 つは、カンボジアの各研修先で学んだそれぞれの分野の問題点、それらは全て「教育」に行き着いているということだ。自国の歴史を知らない、衛生面や HIV 等の病に関する知識がない、そして 1 番大きな問題は、そもそも教育の重要性があまり理解されていないことだった。就学率をベトナムと比べみると、初等教育はベトナムで 98%に対し、カンボジアでは 70～90%と地域により大幅に差がある。中等教育はベトナムで 90%もあるのに、カンボジアではたったの 17%しかない。高等教育になると、ベトナムでは 40%に対し、カンボジアでは 10%を切っている。おおよその数値ではあるが、就学率を比べると歴然とした差が見えてくる。この背景には、カンボジアには子供に教育を受けさせるよりも、働いてお金を稼がせることを重視する親や、貧しいが故に子供に教育を受けさせられない親が多いからだ。また、地域により就学率の格差が生じているのも、カンボジアの教育において特徴的だ。カンボジア国土の大半を占める農村部では、学校の数も少なく、低賃金や交通等の理由により教師がなかなか集まらないのである。

しかし、教育の重要性や必要性を痛感する中で、私は「本当に教育は必要なのか？」という疑問に突き当たった。教育を受けることで得られるメリットは確かに多いが、それを押し付けることは本当に良いのだろうか。そこで私が得た大きな学びの 2 つ目は、「価値観の多様性」であった。教育を当たり前の様に受けてきた私達の価値観で、学校で勉強するべきだと言い切ることはできるのか、自分自身に問いかけた時、教育は大切だと思い込んできた私の中に、迷いが生じたのだ。農村部を中心に、教育を受けなくても農業や仕事をして最低限

の生活を送れるし、勉強なんて必要ないという考えの人が多いのは事実である。私達にとっての「幸せ」や「当たり前」とカンボジアの人達にとってのそれらとを重ね、こうした方が良いと一方的に主張するのは、一種の驕りではないのか、一見ベトナムの方が発展していて豊かに見えるかもしれないが、カンボジアにとっての豊かさの在り方は違うのではないかと思えたのである。

私が挙げた 2 つの学びには、もしかしたら相反するものがあるかもしれない。教育の必要性と価値観の多様性、見方を変えると矛盾とともに様々な課題が新たに生まれてくる。何が大切で何が正しいのか、今の私には答えを見つけることができないが、課題に真摯に向き合うことはできる。実際に研修中、正解のない問いやテーマに沿って、学部や学科が全く違う仲間達と夜遅くまでディスカッションができたことは、本当に貴重な経験であった。この研修に参加しなければ知るはずもなかった世界は全て、人として知らはければいけないこと、向き合わなければいけないことだった。自分がいかに無知で未熟であったか気付けた時、私はこの先成長していけるように思えた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【教育の必要性】

北九州市立大学 外国語学部 3 年生

私はこのツアーを参加する時に「教育を充実させるために自分が何ができるか考える」という目標をたてた。私は世界に存在するあらゆる問題の根源は、学校で行われる教育の不十分さであると考えていた。ツアーを終えた今、その考えは基本的に変わっていない。やはり教育は大事だ。しかし、ただ教育の場、教育の機会を与え、教育を行うだけでは何の役にもたたない。教育を受けた側が理解し定着させる必要があると感じた。

私は高校時代に、元血友病患者の方と HIV の啓発活動を一緒にしたことがあり、HIV には強い関心を抱いていた。先進国の中で HIV 感染者が増えているのは唯一日本だけ。（さらに今日、昨年の福岡県における HIV 感染者・AIDS 患者の数が過去最多で危機的状況というニュースが発表された。） 教育が整っている日本でなぜこんなに増えているのか疑問に思っていた。シハヌーク病院 HIV 病棟を訪問し、カンボジアでは 2000 年頃に最も増えたが、啓発活動のおかげで減少していることがわかった。啓発活動といっても、学校では HIV のことを教えておらず、いわゆる町内放送のようなもので行っていて、入院されていた方は “HIV は聞いたことがある程度のもの“とのことだった。この時、単純に「なぜ学校で教えないのか、教えればもっと数が減らせるのでは」と思った。

その後、Bayon 中学に行った時に、JST 代表のチア・ノルさんと校長先生に HIV について学校で教えているのかどうか尋ねてみた。すると、「教科書には載ってない。でも避妊の仕方は教えている。また、定期的に厚生省の職員が来て講義を開いている。」と答えてくれた。もちろんこれは Bayon 中学の例であり、カンボジア全ての学校には当てはまらないかもしれないが、学校で教育をしているならば(進学率等は違えど)日本と同じ。カンボジアは減少しているというのになぜ日本が増えているのかなおさら疑問に感じた。その原因は決して、啓発活動の不十分さだけではなく、上述したとおり教育を受けているが身になっていない、知識が浸透していないということではないだろうか。日本の学校で HIV について学ぶ機会といえば、私は保健体育の授業だけだった。小中高それぞれで 1 回ずつぐらいだ。日本の HIV を無くすためには、この回数を増やすとともに草の根レベルの活動が必要と感じた。私は HIV 病棟と Bayon 中学の訪問が日本の HIV 教育について考えるきっかけになった。

最終日のディスカッションで結局まとまりきらなかったが、「豊かさ」とは教育の充実度だと私は発言した。学校に行けば、友達と出会う中で様々な価値観に触れ、自分の生き方に選択肢を与えることができる。教育は子どもたちの心を充実させることができる。さらに、将来的に多くのお金を稼ぐ方法を見つけるかもしれない。選択肢を知らないほうが子どもたちにとっては幸せかもしれないという思いもある。ディスカッションの中で、選択肢だけ知ってもそれを手に入れる力がなければその選択肢はないという意見もあった。しかし、私は子どもたちが様々な選択肢を 1 つでも多く手にいれ、将来に希望をもち、目標を見つける

ことが金銭面でも心の面でも豊かになるきっかけだと思う。最後に「教育を充実させるために自分が何が出来るのか」考えてみると、支援団体として現地で教育支援することしかまだ思いつかない。ただ、行ってみて分かったのは親に教育の必要性を伝えることが必要だということ。このことを念頭に教育支援、国際協力をしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアを訪れて】

北九州市立大学 外国語学部 3 年生

東南アジアに行ってみたいとずっと思ってはいたが、衛生や治安の面が心配で一歩を踏み出すことができずにいた。そんな時に友人とこのツアーを知り、これなら安全だろうと思い参加を決意した。

実際にカンボジアに行ってみて思ったことは、意外と栄えているということだ。首都プノンペンでは、日本とあまり変わらないのではないかと思うくらい綺麗に整備された道路や広場を何度か見かけた。レストランやホテルも清潔感が漂っていてとても綺麗だった。私は、カンボジアは貧しく、どこもかしこも農村のような状況にあると思っていたので、正直驚いた。先進国が援助なんてしなくても、カンボジアはこのまま自分たちで発展していけるのではないかと思った。

しかし、3 日目、4 日目と過ごしていくうちに、カンボジアにはまだ技術や知識、そしてお金が足りていないと思うようになった。3 日目に訪れた HIV 病棟は、私にとってはトゥールスレン収容所やキリングフィールドよりもショッキングだった。初めて HIV に感染している患者を見たが、やせ細っていて苦しそうだったし、治療器具も日本のものより劣っているように見えた。病院にはクーラーがなかったため蒸し暑く、虫が患者の周りを飛び回っていた。あんな施設で病気が治るのかと思うが、HIV 患者は少なくなってきているらしい。院長先生は病院の衛生状況についてあまり問題視していなそうで、なんだかなんとも言えない気持ちになった。

私がこのツアーの中で最も記憶に残っている研修先の 1 つがゴミ山だが、ここはカンボジアの中で 1 番早急に手を打たなければいけないところだと思う。カンボジアでは、ゴミを燃焼したり分解したりせず、ゴミのまま土の中に埋めているだけだった。ゴミ山の管理者は、それが問題であると思っていなさそうだったし、むしろこれで環境が良くなっていると考えているようだった。カンボジアにはゴミを処理する技術や、分別して捨てる習慣がないらしい。技術やゴミに関する知識がないから、カンボジア人はゴミ山を問題視していないのではないか。それならば、そういったものを先進国が教えるべきではないのか。日本はカンボジアにイオンモールを作ったが、それよりもまずやるべきことがあったように思えてならない。

カンボジアには色々な問題があると思ったが、この 1 週間でカンボジアの良い所もたくさん知ることができた。特にいいなと思ったのは、カンボジア人の人柄である。カンボジア人は目が合うとにっこり笑ってくれるし、手を振れば振り返してくれる。そしてなんとなくだが、みんな時間に追われていないような気がした。何かに追われておらず、精神的に余裕があるから、知らない観光客に手を振られても笑顔で振り返せるのかなと思った。そしてカンボジア人はとても勤勉である。日本語学校の生徒の熱気はこれからも忘れられないし、私

も彼らを見習って勉強に励みたくなった。

カンボジアはこれからどんどん発展していくだろう。今回、発展中のカンボジアを訪れることができて、実際に自分の目で色々なものを見ることができて本当に良かった。このツアーでカンボジアのことが大好きになったので、次は個人旅行で訪れたいと思う。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの現状を知る】

北九州市立大学 外国語学部 3 年生

私がこのカンボジアツアーに参加したきっかけは、友人から誘われたからである。以前からカンボジアのアンコール遺跡群に行ってみたいという思いはあったため、カンボジアについて学べるうえに、アンコール遺跡群に行くことのできるこのツアーにとても魅力を感じた。

カンボジアに到着して一番初めに思ったことは、人が多くてとても活気がある国、という印象だった。今まで訪れたどの国とも異なる独特な雰囲気、クメール語で書かれた看板、そしてクラクションを鳴らしながら通っていくたくさんのバイク、すべての光景が新鮮だった。

そして、私が今回のツアーで最も印象的だったのは、カンボジアの人々の姿である。

まず、TAYAMA 日本語学校を訪問した際、校内ですれ違った学生はみな大きな声で元気よく挨拶をしてくれた。また、私たちが担当するクラスの教室に入った瞬間、そのクラスの学生たちが大きな拍手と歓声で迎えてくれた。日本語で私たちが自己紹介や発表を行う最中も、みな真剣に聞き入って積極的に質問もしてきてくれた。自由に話をする時間は短かったが、日本語を学ぼうとする彼らの姿勢、強い意志というものをとても感じることができた。それと同時に、私も彼らと同じくらい熱心に勉強に取り組まなければいけない、と痛感した。

孤児院を訪問した際は、子どもたちがとても明るく、笑顔が絶えない様子で、その姿を見ているだけでも元気をもらえた。しかし、孤児院にいる子どもたちはみな何らかの問題を抱えていた。親がいない子や、貧しさゆえに孤児院で生活せざるを得ない子がいる、というカンボジアの苦しい現状を、子どもたちの姿から関連付けることはなかなか難しかった。

一方、ゴミ山や農村ではそういった現状を実感できた。

ゴミ山を訪問した際、その立ち込める異様なにおいを嗅いだ瞬間、気分が悪くなってしまい、途中でバスに戻るはめになってしまい、とても情けない思いをした。しかし、ゴミ山のごみを拾って生計を立てている人々はいたって平気そうに行き来していた。その様子を見て、私たちにとっては異様で非日常的なゴミ山の光景も、彼らにとっては日常的な生活の場である、という日本との違いを改めて感じた。

農村を訪問した際には、教育環境が整っておらず、また、家庭を支える労働力であるため、子どもたちが十分な教育を受けられないという現状を目の当たりにした。

農村部と都市部の格差はますます広がり、農村部の子どもたちは慢性的な栄養失調に陥っている。そのほかにも、衛生問題や児童労働、小学校退学者数の多さ等、農村部の子どもたちが抱える問題はたくさんある。

このツアーを通して、実際に行ってみなければわからないことがたくさんある、と改めて実感した。今まで全く知らなかったカンボジアの現状を知って、さらに知りたいことが増え、また、私が今回体験したことを他の人に伝え、カンボジアについてもっと知って欲しいと強く思った。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【あらゆる見方を知る】

宮崎大学 農学部 3 年生

私は海外に行きたい、国際協力、現地の子供たちと一緒に触れあえる等の理由から、このツアーに参加したいと思い応募した。全くベトナム・カンボジアのことを知らないまま参加したが、実際に参加してみて、想像以上に濃くて充実した毎日だった。

日本では、カンボジアに対するイメージとして“危険”“不便”というマイナスのイメージがもたれていると思う。私も多くの人に行くことについて心配された。しかし、訪れてみると優しい人柄・多くの自然・元気いっぱいの子供たちなど、なぜマイナスのイメージがもたれているのか不思議に思うくらいだった。確かに、経済の発達・生活環境等まだまだ進んでいない部分はあるが、“豊かさ”は先進国・後進国関係ないのだなと感じた。特に印象に残っているのが、子供たちの学ぼうという姿勢である。TAYAMA 日本語学校、プノンペン大学で日本語を勉強する子供たち・学生に会ったが、あの気迫・学びたい知りたい意欲に圧倒された。あんなに外国語を覚えよう、どういう意味なのか考えようとする姿を日本で見ることはまれではないかと思う。その分、こっちも何とかして伝えたい、分かりやすく言うにはどんな言葉がいいか、ゆっくり話そうという気持ちになった。これは教育の面からだけだが、日本も学べる点ではないかと思う。また、農村を訪れた時、そこの土地環境を生かして、果物や井戸水、さらに豚・鶏を飼ったり、自給自足の生活をしていた。それでも何不自由なく村の人々は生活しており、直に自然と触れ合いながら生活できるのは貴重なことだなと感じた。便利な機器があるから必ずしも幸せ、何もないから幸せではないのではなく、“豊か・幸せ”のかたちは多様であることを再度思い知った。やはり、現地に行って、自分で経験して聞いて見て、そこで初めて知ることができるとこのツアーに参加して感じた。

さらに体験して感じたことをみんなで共有できる場が設けられていたこともカンボジアに対する考えを深める大事な時間だったと思う。そう感じたのは最初にデスカッションをした時だった。その日に行ったクチトンネルでの当時の映像・様子・話を聞き、自分はそれを鵜呑みにし、ベトナムは被害国・アメリカは加害国と捉えていた。しかし、みんなと話を聞く中でそれは偏った見方なのだと考えさせられた。双方が加害国・被害国であり基準ボーダーはないのだと。考えれば当たり前のことで視野が狭いなと思った半面、もっと多くの考え・意見を聞きたいと思った。そして、もっと戦争や当時のカンボジア政権のこと、現状を知りたいと思った。そして、毎日、どこか訪れるたびにデスカッションをして、考えを共有し、あらゆる考えを聞いて、自分はしない見方・考え方・その人の専門分野から出てくる知識など面白くて、楽しかった。あんなにデスカッションすることが楽しいと思ったことはなくて、すごく充実していた。

12 日間、これだけ多くの体験をし、知り、考えや違った見方を深めることができたのもガイドさん・学生スタッフの方々・同じグループのみんなのおかげだ。このツアーに参加し

ないと関わることがなかった出会いだと思う。本当に貴重な機会だった。ここで学んだことをこれからの生活に生かして、もっといろんな見方で物事を考えられるようにしていきたい。参加できてよかった。本当にありがとうございました。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアの価値観】

福岡工業大学　工学部　2 年生

先輩の宣伝で興味を持ち参加しようと思った。一度カンボジアへ観光で訪れたことはあったが、それ以来カンボジアについてより知りたいという気持ちが強かった。

ツアーを通し様々な分野の研修先へ行き、とても刺激のある毎日であった。研修先の中でもゴミ山と農村は私の心に強く残った。ゴミ山へ行くまで私はゴミ山で生活している人達は家がなく仕方がないからゴミ山へ行き、ゴミを集めてお金へ変えていると勝手に想像し、苦しい日々を送っていると思いこんでいた。しかし、現状は家がありゴミ山でゴミをお金へ変えることで仕事をせずとも生活をするためのお金をもらえていた。ここで生活を送っている人達は今必要であること・できることをして過ごしていた。そのような現状であるためゴミ山での生活は現地の人からすると全く苦しいものではなかった。また、農村での生活は私の目から見るととても生活しにくい環境に見えた。道は舗装されておらず、電気も通っていない。そのため時計がなくニワトリの声などで時間を判断する生活を送っていた。また一世帯あたりの稼ぎは 150 ドル程度であるため果物などを育てて食料へしたり、井戸から水を汲み取り生活で使用するなど半自給自足の生活を送っていた。農村の学校の子供達は笑顔で私達を迎え入れてくれ、とても元気に遊んでいた。農村で生活することに対して特に不満を抱えているわけではなかった。

ゴミ山や農村だけではなくすべての研修先を通して『価値観の多様性』を実感した。日本から来た私は自分の視点でしかカンボジアの人を判断できていなかった。ゴミ山や農村で生活している人は毎日苦しい生活を送っていると判断をしていた。しかし、現地の人達にとって現状は苦しいわけではなく、私が考えるより生活に不満を抱いていなかった。また、JC グループを訪れた際『経済格差はあるが決して貧しいわけではない』と聞いた。それはお金があることが幸せとは限らないことに改めて考えさせられた。そして私は自分自身が想像する幸せをカンボジアの人に対して押しつけようとしていたことに気づいた。私は日本人であることに奢り、カンボジアはあらゆる所に支援が必要であると考えていた。だが、私達の考えるカンボジアをより発展させより幸せに繋がるとはカンボジアの人をとっては全く別なのかもしれない。私は便利なものに囲まれ様々な情報を得て行く中で、本当の幸せを見失っていた。幸せの形は人により様々であることを実感した。

12 日間の研修は毎日刺激的でとても勉強になった。ディスカッションを通し周りの仲間と意見を共有できたり、自分では気づけなかったことに気づくことができた。また、時にはぶつかることで同じ日本人でありながらも価値観の多様性をより実感した。そして、仲間の分野は全く違うからこそ様々なことを学ぶことができ、毎日とても充実していた。仲間のおかげで毎日頑張ることができ、本当にかげがえのない存在となった。

今後、カンボジアが観光や農業などでどのように発展して行くかがとても楽しみになった。そして、私はカンボジアのような発展途上国のインフラなどに関わる仕事をして行きたいと感じた。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム、カンボジアが教えてくれたこと】

大分大学 工学部 ３年生

実際に自分が経験しているからこそ伝えられることがある。ベトナム・カンボジア研修を通してこのことに改めて実感することができた。言葉では言い尽くせないほどあるが、特に私が伝えたいことは大きく分けて３つある。

１つ目は「知るということ」についてである。戦争証跡博物館やトゥールスレン収容所、キリングフィールド、地雷博物館で私は戦争や内戦について知った。事前学習で調べていたため、一応、知っているつもりだった。しかし、実際に行き、自分の考えの甘さを実感した。自分は何も知らなかったのだと。当時の状況を物語る多くの写真や武器などの現物、収容所として使われた建物、そしてガイドさんの話。戦争の悲惨さや残酷さ、同じ人間がしたとは考えられない残虐な行為を目の当たりにした。それと同時に欧米の人をはじめとする、多くの外国人が訪れていることも知ることができた。私が話しかけてみた人もヨーロッパの人が多く、「戦争や内戦について学びに来た。」と話していた。世界中の人々が平和な世界を祈り、当時の状況を「知ろう」としていることを、自分の目、そして耳で知ることができ、前向きな気持ちになることができた。わからないことはインターネットを活用して簡単に調べることができる現在において、実際に自分自身で足を運んで、知ろうとすることが大切なのだと実感することができた。

２つ目は「豊かさ」についてである。研修先の農村では林の中に木造の家があり、貧しそ うに見えた。しかし話を聞くと、家の周りには年中、栄養満点の果物が採れ、町から遠くて 食料を買うことができなくても、自給自足で満足に食べることができるそうだ。農村に住む 人々はそれで「豊か」であるのだ。また、ベトナム、カンボジアの人は皆笑顔であった。バ スの中から手を振ったときやごみ山視察に行ったとき、日本語学校や孤児院に行ったとき。 行く先で出会うすべての人の笑顔がまぶしかった。どのような時代や文化背景でも、心から の笑顔を絶やさない人は「豊か」であるように見える。ディスカッションも踏まえ、「豊か さ」とは他人によってではなく、個人によるものであり、異なる背景の元では比較すること はできないものだと考えた。日本は先進国であり、物質的に見ると「豊か」である。しかし、 心の「豊かさ」を本当にベトナムやカンボジアの人のように持っているかはわからない。日 本を出てみて初めて気づくことができるのかもしれない。このことに気づくことができて 本当に良かったと思う。私はいつも笑顔で人に接することができる、心の余裕のある「豊か」 な人になろうと思う。

３つ目は「人」についてである。多くの出会いを通して様々なことを学ぶことができた。特に日本語学校に通う人からは「目的」がいかに重要か、改めて気づくことが出来た。なぜ日本語を勉強しているのか尋ねてみると、みんなが元気よく、我先に、と手を挙げて答えようとしていた。それだけ、みんな一人一人、自分が勉強している目的がはっきりしているの

だ。日本で同じように、なぜ勉強しているのかという質問に対して、みんなが同じような反応をするとは考え難い。教育環境が完全には整っていない国々と比べて、勉強ができる環境が当たり前になっている故に、明確な目的を持って勉強に取り組む人が多くないのではないかと思った。雨音で話が聞こえなくなるような外の教室や、教育を受けたくても受けることができない現状を目の当たりにした私がまず出来ることは、今の恵まれた環境に感謝し、最大限に活用していくことなのだと思う。また、このように今までになかった視点に気づくことができたり、自分の知らない分野にこれほど深く学ぶことができたりと、言葉では言い尽くせないほどの大きな経験ができたのは、間違いなく共に過ごしたメンバーのおかげである。最高のメンバーとの出会いに感謝したい。

この１２日間は今までにないほど充実していた。普通に日本で過ごしていたら関わることのないと思われる分野も知ることができた。自分の世界を広げる、という目標もメンバーのおかげで達成することができたと思う。しかし、この研修はあくまでもきっかけに過ぎないと思う。１２日間の研修で終わらせず、この先どう行動していくかが大切であると考える。この貴重な経験をこれからの人生に最大限に生かしていきたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアから学ぶ】

北九州市立大学　文学部 1 年生

私がこのインターンシップ型スタディツアーに参加しようと思った理由は得にない。理由を一つ挙げるならば、大学 1 年生の夏休みをバイトと遊びだけに使うのはもったいない気がしたのと、海外に行ってみたいと思ったからだ。何の目的も持たないまま軽いノリでこのツアーの参加を決めた。私は、このツアーに参加するまでカンボジアやベトナムについて何も知らなかった。アンコールワットですら聞いたことある程度で、それがカンボジアにある世界遺産だということも知らなかった。私がもつカンボジアのイメージは、暑くて、貧しい国という感じだった。私は心のどこかで、カンボジアやベトナムを見下していたように思う。

しかし、実際にその地を訪れて、自分の目で見て、肌で感じていく中で、カンボジアやベトナムに対する考え方は変わっていった。人の温かみを感じられる国だと思った。日本にいれば、街ですれ違う人々は皆、スマートフォン片手に歩いていて、どこか冷たさを感じることが多かった。でも、カンボジアでは、昼間から人が集まってにぎわっていたり、私たちを見て日本語で「あじのもと！」と言ってきたり、笑顔で手を振ってきてくれたり、人びとの温かさが伝わってきた。日本はカンボジアよりも発展しており、便利になったことはたくさんあるが、その発展がゆえに疎かになってしまっている部分も多くある。先進国が幸せで、途上国が不幸せであると決めつけてしまっていたが、それは全然違う。人と人のつながりというのは途上国のほうが強いのではないだろうか。SNS などの頼った間接的なつながりではなく、温かみを感じられる直接的な人々のつながりがカンボジアやベトナムには多くある。

また、課題となるものもある。それは、農村と都市部の経済格差だ。カンボジアのプノンペンからシェムリアップへ行く道は、整備されてないただの土の道路で、道路の両側には広い草原みたいになっていたり、途中、牛が道路を走っていたり、日本ではあまり見られない光景があった。そういった場所にも木で作られた高床式の家がいくつかあり、人々は生活しているようだった。家の中は外から丸見えで簡易的な住居であった。けれど、シェムリアップの都市のほうに近づいていくと、道も補正されており、建物もたくさんあり、日本とあまり変わらない風景だった。同じ国なのに建物の作りも全然違っていてとても驚いた。プノンペンにあるイオンに行ったとき、そこにいる客はもちろん外国人も多かったが、その中に私たちと同じような格好のカンボジア人もいた。ダイソーのような店に行ったとき、あるカンボジア人の親子がいた。その子供は上を指さして、父親におもちゃをねだっているようだった。日本であれば得に気にならないこの光景に私はとても違和感を覚えた。裸足でボロボロな服を着て、日本人観光客である私たちに 1 ドルでミサンガを売っている子供がいる一方で、私たちとなんら変わらない格好をした男の子が、父親におもちゃを買ってもらっている。どの国であっても貧富の差はあると思う。けれど、カンボジアではその差がはっきりしてい

る。この差を少しでも小さくしていかなければならないのではないだろうか。農村を隔離せず、都市とのつながりをもたせ、国全体が潤う発展ができるようにしていかなければならないと思う。

この 12 日間で、私は他の参加者に比べ、知識や経験が少なく、それを 1 年生だからという言い訳で自分に甘えてしまう部分が多かったと思う。今まで、他学校、他学年の人たちと共にディスカッションを行う場がなく、人前で自分の意見を言うことも少なかったため、この研修は、わたしにとって、とても新鮮で刺激的なものだった。意識の高い人たちの中で共に研修を行うことで、自分の足りないものに気付くことができた。また、マイナスな面ばかりでなく自分の持ち味というものにも気付ける良い機会だったと思う。ベトナム、カンボジアだけにいくことで、現地のことはもちろん、途上国から見た日本というものを新しくしることもでき、考えたの幅も広がった。このツアーで学んだこと、感じたことを心に留めて、インプットだけでなく、アウトプットできるようになりたいと思った。このツアーは、自分を見つめなおすきっかけとなったと思う。これを機にステップアップしていけるように頑張りたい。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【目に見えないものを考える難しさ】

九州大学 工学部 ２年生

「なぜベトナムとカンボジアに？」「ほかに行くべき国があると思う」「行って何をするの？」…自分がこの研修に参加すると打ち明けた時の周りの反応である。たしかに自分も、もし周りの人間が同じことを言い出したら同じ反応をしたであろうし、まさかベトナムとカンボジアに行くことになろうとは大学に入った時点では思ってもいなかった。今回この研修に参加した理由・動機を先述しておく。１）個人的に東南アジアに興味があった。２）「何かしたい」という欲求不満を形にし、これを契機に大学での勉学以外の自分の活動範囲を広げてみたかった。３）いろんな学生と共に学習することで考え方・価値観というものを共有し「自分が本当にしたいこと」に向き合うきっかけづくりにしたかった。１についてはアンコールワットやマーケットといった観光地に行く、そしてその国の人たちと接することで文化といったものの片鱗を味わいたかったという個人的な思いであり、今回の研修の中でも十分味わえたと思われる。そこで、２と３について今レポートの最後で話を展開させることにする。

今回の研修では、６つの分野(平和・医療・文化・社会・産業・教育)を軸にして学んだ。平和分野では、ベトナム戦争についての資料を見る、実際に使われていた地下通路に入り身をもって体験する、カンボジア内戦時代に使われていた収容所・処刑場にいきその惨状の跡を見るといった研修を行った。医療分野では、ベトナム戦争時にアメリカ軍によってまかれた枯葉剤の影響を、遺伝子を通して受けた子供たちの治療をする病棟や、現在も大きな問題になっているカンボジアの HIV 感染症を治療する病棟で実際の現場の声・患者の声を聞きに行くといった研修を、社会分野では、国際協力機構(JICA)のプノンペン事務所を訪れ、日本政府と JICA がカンボジアに対してどういった活動を行っているのかと聞き、またゴミ焼却場がないカンボジアではゴミを都市部郊外に山のように積み上げている(通称：ゴミ山)が、その現状とそこで暮らす人々の様子を見に行き、カンボジアの農村部の学校の様子や人々の暮らしぶりも見に行った。また孤児院に行き、孤児たちと触れ合い、孤児院の現状も聞いた。産業分野では、カンボジア観光省に行きカンボジアが今後どのような観光産業を手掛けたいのかを聞き、またカンボジアで起業した日本人の話を聞きに行った。教育分野では、日本語学校にいき生徒がどんな考え・展望をもって日本語を学んでいるのかを聞き、また日本の文化についてプレゼンをする機会もあった。プノンペン王立大学の日本語学科教室にも入り、大学教育の一端にも触れることができた。

さまざまな分野に沿った研修先に行ったが、個人的に印象に深く残っているのは、ｉ）カンボジア内戦時の収容所に行ったときにカンボジア人ガイドさんが涙していた場面　ii）JICA の活動の正当性を示すかのような発表　である。この二点について自分の考えを述べていく。まずｉについてであるが、ガイドさん自身はポル・ポト時代(カンボジア人の当時

の 1/4 が虐殺されたとされる時代)に生きた人ではなかった。しかし、収容所で説明をしている途中に涙を流された。実は、自分はこの研修から帰国したのち、『僕たちは世界を変えることができない』という映画を見たが、その中の現地人ガイドさんも同じ場面で涙されていた。これについて自分は悲しい気持ちを抱くと同時に、カンボジアという国全体に悲しみがまだ広がり、残っていることに改めて気づかされた。日本も 1945 の太平洋戦争中にアメリカによって原子力爆弾を落とされ、唯一の被爆国となった。自分は幼き頃より歴史に興味があり、これまでに広島の原爆資料館や戦艦ヤマトの博物館、沖縄の地下防空壕や沖縄戦資料館に足を何回か運んできたが、そこで涙している人はほとんど見たことがない。終戦してからの年数が違うといったことは理由に挙げられるかもしれない。しかし、内戦が終わり、これから国を立て直していこうとするものたちの中にある悲しき記憶の強さというものを垣間見た気がしたのだ。と同時に、次にガイドさんが言った言葉がさらに印象に残った。「内戦が終結してもう 30 年が経とうとしているが未だにポル・ポト時代の惨劇を世間に伝えることはできない。もし伝えると逮捕されることもある。」つまり、未だに「言論表現の自由」が許されていないのである。日本では考えられないであろうが、世界にはまだこうした国もあることを忘れてはならない。また、「どのようにしてポル・ポト時代の歴史を後世に伝えていくのか」を日本人学生同士で討論したが、やはり自分は、こうしたその国独自の文化・風潮を度外視して自分たちの国の価値観で話し合うことの怖さ・申し訳なさを感じた。歴史の過ちは二度と繰り返さないように後世に伝えていくべきものである。そこには教育というものを介入したほうが良いと我々の大概は考えるであろうし、その考えは必ずしも間違いとはいえない。しかし、やはり、歴史というものがその国の文化の上に成り立つことを考えるとそう簡単に答えが出る問題ではないと思われた。次に ii について述べていく。自分は正直 JICA がどういう活動をしているのか、具体的に聞いたのは初めてであった。事務所ではカンボジアの現状(=人口・出生児死亡率・電化率・就学率などの基本データ)や実際に行った事業内容を中心にお話ししていただいた。中には、JICA が行った橋建設事業のおかげでベトナムからカンボジア経由でタイに行き着く物流ルートが完成したという話もあり、支援の大切さを学んだ。また JICA は自らの支援はあくまでカンボジア政府と日本政府と共同で行っていて、決して日本側の独りよがりではない、カンボジアの発展こそ日本経済の発達にもつながると話していた。たしかに事業計画を聞く限り、日本側だけで進めているわけではなさそうであった。しかし、カンボジア人の心中はどうなのか、とても気になった。というのも、マーケットに行った際も、あるいはゴミ山に行った際も、自分たちが日本人であるのをわかってか、すごく物をねだられ、また片言の日本語で話しかけ無理やりにでも買わせようとし、買わないものなら態度を一変させそっぽを向くといった光景を多々見てきた。たしかにこれまで日本はアジアのリーダー格として数々の支援をしてきた。しかし、本当の意味での支援というのはただものを与え、また技術を伝授することだけなのか、すこし疑問である。個人的には、国民の中で「自国の復興をどうにかしてしよう」という意識が芽生え、それが浸透してこそ、それが「本当の支援」をしたということなのではないかと思う。今は

内戦が終わって程ないために他国である日本を頼ってもよいが、これをいつまで続けるのか、と考えると様々な疑問が生じる。しかし、だからといって急速な技術提供を行っていいわけではない。例として挙げられるのは、カンボジアの交通事故は JICA などが信号機を設置しても年々増加している現状であろう。これは急速に発展してきたベトナム同様、バイクなどが急速に普及したことも考えられるが、なにより信号機の使い方が国民の中で意識として浸透していない中で設置しても意味をなしていないという現状があることを示すものであろう。JICA が行っている支援は本当の意味での支援になっているのか、外見だけの見せかけの支援ではないのかといったこともしっかり考えなければいけないと思う。

さて、最後に、自分がこの研修に参加したきっかけを振り返り、果たして目標を達成できたかと聞かれると、思い切った回答はできない。まだまだ、自分の中で疑問が多く残った。しかし、間違えなく行く前の自分よりは「自分像」を見つけやすくなったと思われる。将来、自分がカンボジアなどの東南アジアでの支援事業に携わることがあれば、今回の研修で考えたことを十分に生かしていきたいと思う。また、たとえ、「大海の一滴」であったとしても今の自分にでもできることを積極的に探していけるようになればよいとも考える。

一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【たくさんの刺激】

北九州市立大学 外国語学部 １年生

私はこのツアーに参加して、本当に良い経験が出来た。毎日毎日、様々な刺激をもらい、とても濃い１２日間になった。

私は研修先を訪れたり、ディスカッションをするたびに、自分の知識の無さや、視野の狭さを痛感した。例えば、研修先であったゴミ山を訪れる前には、なぜゴミ山をなくさないのか疑問でしかなかった。しかし、実際に訪れてみるとゴミ山で生計を立てている人は今のその生活で成り立っていて、急にその収入源であるゴミ山をなくすことはその人たちにとって迷惑なのかもしれないという、訪れる前には考えもしなかったことを考えることが出来た。このように、私は自分の価値観だけでゴミ山を捉えていたのだと分かり、様々な立場に立って考えることの重要性を強く感じた。また、毎日のディスカッションの際にも周りの人と自分の知識量の差が大きく、自分の知らないことは山ほどあるのだと知ることが出来た。他にも、観光省を訪れた際にメンバーの方が英語を訳してくれたが、私は知っている単語を聞き取ることしかできず自分の英語力の無さに気づけた。また、TAYAMA 日本語学校で日本について聞かれた時も中途半端な答えになってしまった。私は自分が住んでいる国でさえ、ちゃんと知っていないということに気づいた。このように、私は自分が今までどれだけ狭い世界で生きてきていたかが身をもって実感できた。そして、自分が「知らない」「出来ない」ということに気づけて良かった。きっとこのツアーに参加していなければ「知らない」「出来ない」ということも知らないままだったと思う。「知らない」「出来ない」ということに気づけたので、そのことを無駄にせずにこれからはより多くのことを何でも吸収していき視野を広げていこうと考えている。

そして、ツアーに参加して一番強く感じたことは、教育の大切さである。様々な研修先を訪れそれぞれの課題があったが、課題を解決するために最終的に行きつくところは教育だということを感じた。私は、正直今まで教育に関して無関心だった。それはおそらく今まで何不自由なく教育を受けられてきたからだと思う。そのため、教育を受けられていることに対してのありがたみもよく分かっていなかった。けれども、アキラー地雷博物館を訪れた時私は教育の大切さが強く分かった。なぜなら、アキラーさんが「戦争は楽しい」とおっしゃったからだ。私はこの言葉を聞いて本当にぞっとした。この言葉はアキラーさんの子ども時代の気持ちである。このように、戦争、銃を持つことが楽しいという感覚を持っていたことにとても衝撃を受けた。教育を受けなければそのことが良いか、悪いかを考えることもなく当たり前と考えてしまうことを知り、教育の大切さが本当によく分かった。アキラーさんは選択肢がなく少年兵をしていた。選択肢がないことはおかしいことであり、選択肢を増やすためにも教育は重要だと思った。

私はこのツアーに参加して本当に良かった。一緒に研修した人たちは研修先では真剣

に取り組み、楽しむときは楽しむなどメリハリがあってとても充実した１２日間になった。たくさんの尊敬できる人にも出会え、本当に良い出会いをした。そして、どこかでこの研修で得たことを少しでも生かしていくようにする。そして、今回訪れた時の自分より知識を増やし、視野を広げてもう一度ベトナム・カンボジアを訪れたい。